
THE TEAR OF WORLD

FRONTIER

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

THE TEAR OF WORLD

【コード】

N6034R

【作者名】

FRONTIER

【あらすじ】

THE WORLD IS DEAD .
BUT , THERE IS A ROOM TO SAVE IT
!!

ごく普通の人間の青年、アレン・クロニクル
並外れた身体能力を持った謎のイカれた青年、スターク
二人の行く先々で繰り広げられる強敵と戦闘を交えながら、
世界中に撒布されたウィルス「マリア」と黒幕の組織の謎を暴いて
いくダークファンタジー

マイペースで更新していきます。

文章構成が苦手だけどストーリー構成な好きな学生です(^^)

皆さんからの声を参考にして作品をどんどん改良していきたいと思
っていますので、どしどし意見下さいませ

では、お楽しみ下さい…

A JUVENILE DEVIL

グレゴリウス暦21XX年、人類は古くから伝わる営みを繰り返し、木々、生物、空と共存していた。

そして突如欧州の一部において複数の住民が一夜の内に消えたとの情報が入った。

地元の警察が捜索に尽力したが、成果は現れなかった。

その後、行方をくらましていた住民の内数人がアジアに所在するとある小国にて発見された。

この不吉な事件が、世界の終わりの始まりとも言つべき悲劇の予兆になるうとは…

まだ、誰も知る由もなかったのである…

A JUVENILE DEVIL ?

2月7日月曜日、時刻は午後4時を回っていた。まだ少し肌寒い季節で、街の人々は誰もがあくせくと街道を歩いて行く。

ここハーレン街は一年中交通量が他の地区に比べて多い。アクセスが容易であり、何よりも繁栄しているというのが大きな理由とも言えよう。

この街の郊外に住んでいる青少年アレン・クロニクルは、家族で外出していた。

クロニクル家の目的は、今年新しく建設されたハーレン街のランドマークであるフィリップス・シャンドリアを観光することだった。

無論、この家族以外にも多くの人々がタワーには集まっていた。

「アレン、とりあえず最上階の展望台に行ってみよう。もう少ししたらきつと入場規制がかかるかもしれないからね。」

この眼鏡をかけた白髪頭の中年男性はアレンの父親ジャン。

今日のためにわざわざスケジュールを遣り繰りして休暇をとったよ
うだ。

「お母さんは？」

「ああ、お母さんなら少し遅れて来るみたいだ。彼女は働き者だからね、なかなか都合もつけられないんだろう。」

アレンの両親は共働きをしていて、彼は幼い頃から留守番をして慣れたためあまり孤独感を感じない。

それでも、どこか寂しさがあったのかもしれない。だからこそ、今日は家族皆で過ごす最高の一日にしたかったのである。

A JUVENILE DEVIL ?

エレベーターを降りると、そこには老若男女関係なく多くの人々が観光していた。窓から街を見下ろすと、今までかなり高層だと思っていたビルでさえちっぽけに感じる。なんとも不思議だ。

いくつか望遠鏡が設置されているが、順番待ちだけで軽く数時間がかかるだろう。とても心地よく享受出来るスポットとは言えない。

すると、喧騒な空間の中でアナウンスが流れ始めた。

「今日は、フィリップス・シャンデリアに御来場していただき、誠に有り難うございます。」

本日午後7時より、22階にてディナーショーを開催致します。皆様是非御来場ください。」

「デイナーショー？」「ああ、今日はそれがメインだからね。あま
り間食をするなよ、デイナーのためにね。」

それからアレンは各フロアを回り、デイナーまで時間をつぶした。

途中で何度か屋台の前を通ったが、その魅力になんとか勝てた。

「さて、そろそろ行くか。」

午後6時40分、アレンとジャンはエレベーターに乗り、賑やかな
会場へと向かった。そこに、アレンの母シェリーもいた。

「お母さん！来てたんだね！」

「ええ、遅れてゴメンなさいね。さあ、今日は最高のディナーにしましょうね。」

シエリーは微笑み、それがアレンの気持ちをいつそう高陽させた。そう、最高の一日になるはずだった。そうなる運命だったのに

いや、最初からこうなる運命だったのかもしれない。

突如停電が起き、会場は混乱した。

その時アレンはトイレに行っていて、その場にはいなかった。そして、扉を開け賑やかだった会場に戻ると

その少年の瞳に映ったのは、鮮血の匂いが充満した惨劇の舞台だった…

A JUVENILE DEVIL ?

僕の中で、何かが壊れた気がした。

なんだろう？わからない、それすらわからない…

ただ、ひたすら絶望した。自分の肉親の死を目の当たりにして正常でいられる方が異常だろう。血で染められたテールブルクロスや割れたシャンパングラスが散乱した会場には、誰もいない。

そう思っていた矢先のことだった。暗闇の中に誰かがいるようだった。話しかけてみよう。誰かいれば心の支えになるだろうから。

眼鏡をかけていたため視力が低い僕は、目を凝らして見ないと姿勢がよく見えない。

うつすら見えたその姿は、少ないとも心の支えにはならない者だった。

漆黒の衣に全身を包んだその爪は鋭く尖り、鮮血がまとわり付いていた。その時、僕は全てを悟った。

この惨劇は、こいつのせいだということ。そして、僕の中にある生物的本能が逃げるとシグナルを出していることだった。

しかし、僕の足はすくみ腰はすっかり抜けてしまい立つことすらできなくなった。

その漆黒の衣から見えた紅い眼は僕を凝視した、すると突然身動きが取れなくなった。これは恐怖感故ではない、何故だろう…こいつは一体!?

血まみれの爪を振りかざし、そいつは僕を襲いかかった。もう死んだ、絶対に助かることはない。誰も心の支えになる者はいない。

そう悟ったんだ。

「ひゃー、ずいぶんど派手に染めてくれたじゃないの」

若い男性の高い声が閑静な会場に響いた。何が起きたのかその時はよくわからなかった。ただ唯一わかったことは、僕は死ななかつたということである。

赤髪その青年は、銀色の剣を手にして漆黒の男の攻撃を防いだのである。

「……………あ、あんたは…！？」

「あ？人間じゃん。なんだ生きてる奴がいたのかよ…まあいいや。おいお前、後ろに下がってな。」

そついうと青年は剣を両手で持ち、その男に剣先を向けた。
無論男もたじろぐ仕草すら見せずに爪を向ける。

先に行動したのは漆黒の男だった。人間とは思えない脚力を持つそ
いつは奇声を揚げながら一気に距離を縮めた。

青年もただ待つているだけではない。剣を振り男を攻撃する。その
刃は尋常ではないサイズである。大人でもあんな大きさの刃物を振
り回すことなど無理だ。

だけでも、これは決して夢ではない。全てが現実である。

「はあっ！チェックメイトオオ！！」

青年は男の喉元を剣で貫き、一気に引き抜いた。すると漆黒の男は
また奇声を出して体が黒い砂に変化し、姿を消した。
これで終わったのか…？

「あ……ああ……!!」

「なあにびびってたんだよ？ほら、お前は生きてるんだ。笑え!!」

青年はこちらへと歩み寄り、腰を抜かしている僕の目の前で不気味ににんまりと笑う。本当に彼は何者!?

「俺か？俺の名は……スターク。まあ信じてもらえるなんぞ思っちゃいないけど……」

俺は人間じゃない。魂を喰らう異界の住人さ。」

A JUVENILE DEVIL ?

突然現れた悪魔のような謎の男、そして魂を喰らうなんたらとかいうスタークの出現、もう頭がおかしくなりそうだ。わけがわからない。

しかし、もうこんな事態だ。少なくとも彼は僕を殺すつもりはないようだ。ならば、一緒にいれば安全なのかも…!?

「あー…そいつは面倒だ。実に面倒だねえ。」

「そんな…!このままここにいたら僕は殺されてしまう!またさっきみたいなの奴らに!!」

「ふうん……」

こいつ…何を考えているのかよくわからない…。さっきは僕を助けてくれたんじゃないか!? もはや恐怖なんかなかった。僕はスタークの肩を掴み睨みつけた。

「まあまあ、そんな怒んなよ。それより…」

すると突然爆発音が響いた。その方向を見ると、先程の男のような人物が大勢いた。その中心には髭を生やした体格の良い男性がいた。周りのやつらとはまた一風変わった感じだが…どうやら味方ではないみたいだ。

「うぬ…やはりここにいたか、スタークよ。」

「ひゃー、駆け付けるのが早いねえ…そんな俺派手にやらかしたっけか？」

「ふん…こいつらは死ぬと最後に菌を撒き散らす。俺にはそいつの

匂いがわかるのだよ。」

「なあるほど、そいつが例の菌か？なら…いつまでもこうしちゃいられないねえ…」

スタークは少しづつ後退る。背中の方には何も無い。夜景が一望出来る窓が羅列しているだけだ。

しかし、彼は何故かニヤついている。一体何を企んでいるのかわからない。

そして急に僕の足は地面を離れた。宙に浮いたのではない、スタークが僕の体を背負い込んだのである。

すると彼は窓へ向かいダツシュし始めた。おいおいまさか…！！！！
???

「いくぜえええ！途中で吹っ飛ぶんじゃねえぞー！！」

窓を突き破り、僕らは夜の街へと急降下していった。

無論、やつらは追いかけては来ない。

会場には髭の男性と漆黒の集団がいただけの空間となったのだった。

「逃げたか…ふん、まあいいわ…このまま逃がしはしないぞ。この街を消してでも儂の手で貴様を殺してくれるわ…!!」

こうして、はちやめちゃんな一夜が幕を開けたのであった。

まだまだ夜は明けない。グロテスクなパーティーは始まったばかりなのだから…

A P E R F E C T M A D N E S S

夜の風が痛いくらい顔や手を突き抜けていく。もはや声すら出ないくらいにスピードが出ていたのだろうか。イカれたように笑うスタークの横顔を見るのが精一杯だった。

やばいよ…やばいって！これ絶対死ぬよ！諦めて目をとじた。次に開けた時には魔の絶体絶命空中ダイブは終わっていた。

そこには天井があつた。見知らぬ部屋、ここには誰もいない。いや、窓側にスタークがいた。

こいつといると嫌なことがいっぱい起きる気がする。残念ながら、僕の直感は見事的中した。

「やばいな、またあいつら来てやがる。」

「ね、ねえ！あいつは一体なんなのさ！？まるで悪魔じゃないか！
！」

「へえ、案外鋭いね。そうさ、あいつらは皆悪魔…いや、元々はお前と同じ人間だった。

しかし菌にやられた感染者、それがあいつらなのさ。」

菌…さつきも同じようなことを聞いた。するとあいつらは皆菌を持つていて、それが暴走か何かして悪魔となったのか。

「いや、ちよつと違う。暴走じゃない、完全に一体化したのさ。究極完全悪魔型ウイルス「マリア」の一部とな。そして、それはもう世界中に撒布されている。」

スタークの話で次のことが明らかになった。

数年前に欧州で起きた複数名の失踪事件。あれは、菌の感染つまりマリアによる完全コントロールである。

マリアは凄まじい勢いで世界中に広まっていき、ついには壊滅状態にまで陥った地区も次々と現れてきた。

その菌は三段階のフェーズに分かれて感染者の体内の細胞を破壊し、そして新たな生物として転生させる。

この過程を経て誕生したのが所謂悪魔である。

この菌が短期間で広まった要因は、ある組織による陰謀があった。その組織の一員が先程の髭男であり、スタークと同じく異界の住人だという。

彼らの目的は、異界との結合を実現し新たな世界を創造することである。それを阻止するためには、菌を排除することらしい。

そして、菌を排除する条件は……

「お前が必要なんだよ、人間。」

「え……ええええええ！！う、嘘だろ！！??？」

菌を排除することが可能なのは、人間だけだということだ。

A P E R F E C T M A D N E S S ?

「ああ、だから俺は人間を探してこっちの世界に来たんだ。まあ想像してたようなガツチリした野郎じゃなかったけどな！」

そついうとスタークは歯見せて大声で笑った。ムカつくけど…なんか慣れたよ、うん。

そんな僕の思いを気にもせず彼は静かな部屋の中を徒然と歩き回る。こんなに閑散としたハーレン街なんか未だかつてなかっただろう。眠らない街が今眠ろうとしているようだった。

何かを察知したかのようにスタークは窓を開けて外を見た。そこら中にさっきの悪魔がいるこの光景は恐怖以外の何でもなかった。

「スターク……コロす……」

「ころしてヤル……」

「にんゲんの匂いする…!!」

僕は思わず嗚咽してしまった。さすがのスタークも身震いしているようだ。剣を持った手が震えている。

しかし、僕の読みは今度は外れてしまった。彼は窓から飛び降りて石畳に着地した。どうやら疼いて仕方がないらしい。全く…こいつは怖くないのか…？

「さあああて!!全力でヤろうぜ!!」

今の僕はただ傍観しているだけしか出来なかった。悪魔達がまるで赤子のように扱われている。戦慄を通り越してむしろ滑稽だった。

あんなに大勢いたのに…一分足らずで一網打尽してしまった。彼は戦いを享受しているようだ。

「さあて、人間。行くぞ。」

「え、どこに…?」

「フィリップス・シャンテリアに決まってる？バギーのおっちゃんをぶっ潰すんだよ。さて…人間、降りてこいよ!」

助走をつけて、僕は2階くらいの高いの家から勢い良く飛び降り、スタークを下敷きにして唾が飛ぶくらいにまで顔を近づける。唾然としているスタークにこう言いつけた。

「アレン！僕の名前はアレン・クロニクル!」

にいつと笑い、スタークは立ち上がった。

どこか自分の中で決心がついたんだ。僕は一緒についていく。どうせもう戻れない運命なら、この道を歩んでいけばいいんだ。

冷たい石畳の上を一步步つ進み、僕らはフィリップス・シャンデリアを目指した。

ここから先は命の保障はないにちがいない。それでも、僕らは行くしかないんだ。

「ほう…あれだけの悪魔を一人で倒すとは…さすが我々と同じ種族だ。」

「あーあ。フィリアつまんなーい。ね、あの赤髪と戦っていいー？」

「待て、ここはまずバギー様に報告すべきだ。どうせ奴らは我々の

手で消されるのだ。焦ることはない。」

髑髏の仮面を被った長身男キース・オーウェン。

そして栗色のおかつぱ頭の少女はフィリア・レジストブルク。

二人ともマリアの組織側の者である。これからスタークに立ち塞がる敵達は、さらに強さを増していく…

A P E R F E C T M A D N E S S ?

もうどれくらい歩き続けたらろう。それでも、人どころか野良犬一匹すら会うことがない。まさかみんな殺されたのだからか…

最悪の展開を想起したが、僕はすぐに忘れ去ろうと懸命になった。そうでなければ気が狂ってしまいそうだ。こんな悪夢のような世界を早く解放したい、そう考えてばかりいた。

そうは言っても、僕はただの人間だ。スタークみたいな超人並みの力を持っているわけでもない。

何かできることはないのか…
せめて…これくらいは

「左の裏道から行けば近道だよ。」

なんか…これくらいしかできないな…。情けない…

「おお！そうか！さすがここの住人だな。ん…？どうしてそんなしけた面をしてんだ？」

「僕は…無力だから。これくらいしかしてやれないけどさ…」

一瞬、スタークの表情が強張ったような気がした。何か悲しい…そんな感じだった。

彼は腰にかけていた短剣を取り出し、目の前に突き出した。

「なら、これ持ってな。こいつはきつとお前の役にたつからよ。」

見た感じはただの短剣にすぎない。何か能力でもあるのか？それでも無防備よりかはマシだ。

「ああ、ありがとう。」

「ところで、さっきからいやーな感じがするんだなあ……」

右側の木材が積んである廃棄場に剣先を向ける。その先端は電気を帯び、そこから雷を発生させ、木材を破壊した。

そこには機械の残骸があった。これは今破壊したのか？そしてこれは一体？？

「ずっと監視してやがったんだ！やらしー奴だな！おい！まだ見てんだろ！？」

いっそう静まり返る夜の街……スタークの怒鳴り声が余計に良く響いた。

彼の言う通り嫌な予感がするな……風が強く吹いてきたようだ。まるで僕らを先へ先へと追い込むかのように……

「こりゃ良くない…走るぞ、アレンー！」

ひたすら走り続けた。つまずきそうになってもすぐさま体勢を立て直し、フィリップス・シャンデリアに続く小路を駆けた。

そして、ようやくタワーの近くにある大広間に出ることが出来た。いつもなら華やかな噴水がこの場所の雰囲気を上らせていた。

…どつやら、ここにいるのは僕とスタークだけではないようだ。

奥には漆黒の悪魔の軍勢が待機していた。それだけではない。中くらしいの身長で三十代程の銀髪の男性があぐらをかいて座っていた。

「おやおや…スタークじゃないか…」

「よう、久しぶりだな…疾風の狩人、アルフレッド・トルネード…
」！

「覚えてたんだあ…嬉しいねえ、まあいいや。」

こいつも組織の一員なのか！？どこか不思議な雰囲気のある男だ…

「わりい…あなたに構ってる暇はないんだよ。どいてくれないか？」

挑発的な態度に反応した悪魔達がスタークを睨みつけて戦意を見せる。しかし、アルフレッドは気性の荒れた悪魔をなだめる。どうやらこいつらを手なずけているらしい。

「…それでも、君と僕の目的は違うんだよね。君はタワーへと進みたい、僕はそれを拒む。」

「…いやだとしたら？」

「荒い手段はいやだけど…仕方ないかな。」

「…おもしれえ…！」

A P E R F E C T M A D N E S S ?

スタークは剣を握りしめて走りだし、アルフレッドの目の前にまで距離を縮めて体を突いた。

しかし、敵はもうその場にはいなかった。一瞬にして背後に回り先端が鋭利な長槍で反撃をする。速い…！全く目に止まらない…！

「いってー！そんないきなりマジでやるか！？ええ？」

「悪いねえ…残された時間はあまりないんだよ。ちやちやっと終わらせないとさ、ダメなんだなあ…これが。」

アルフレッドは槍を振り回しだした。するとその中心から風が吹きはじめた。まるで竜巻がうねるような激しさである。あれに飲み込まれたらただでは済まないだろう。

疾風飛翔天流… ルドゼラ！！

アルフレッドがそう唱え、全力で槍を前方へと突き出した。先程の竜巻が集合し、一つの大竜巻となりスタークに襲い掛かり、彼は石の壁にたたき付けられた。その力は周囲の建物の壁や屋根を破壊するほどである。

「ありや… やり過ぎたかな？ その君、逃げるなら逃げなさいな。スタークはもうダメみ…」

突如、大広間に前触れもなく雷が降ってきた。これは偶然ではない。自然なものではない。降ってきたんじゃない、降らせたんだ。

あいつはまだ生きているんだ。

「待たせたな。さあて…ここからがショータイムさ!!」

A P E R F E C T M A D N E S S ?

スタークは家屋の壁に後頭部を打ち付けて血を垂れ流す。なんとも痛々しい傷だ。

それなのに、こいつはニヤついている。痛覚がないんじゃない、マゾでもない。ただ、楽しいのだ。

「……おっどろいたなあ……まさかルドゼラまともにくらって立てるなんてねえ。」

「……忘れたか？昔から俺は打たれ強かったろ？」

「…あゝ、そついやそつだね。んじゃ、もつちよい本気出そつかね
…」

その時だった。アルフレッドが所持していた携帯電話？のような通信機器の耳障りな音を立てた。戦いの最中にも関わらず、彼は応答した。

なんだか戦闘の空気がぶち壊しだぜってきつとスタークなら言うだろうな。

「けっ…戦いのムードがぶち壊しだぜ。」

…やっぱり。もはや剣先を地面に刺して一時休戦という態度のようだ。

それにしても長い通話だ。スタークのわりにはよく痺れを切らさな

いな…。

「ああー！…！もう待てねえ！！」

「あ、悪いねえ。ちよいと命令で戻らないといけねえんだ。」

「おいおい…冗談が下手くそだなあ。」

「フィリップス・シャンデリアに来なよ。そしたら決着つけよう。」

そう言い終えたあとにスタークは後をつけるように体をつかもつとしたが、もうその時は遅かった。

戦場と化した大広間はまた再び閑散とした空間へと戻っていった。

そのうえ雨までも降ってきたようだ。なんとも切ないものだ。

しかししばらくして彼はまたタワーの方へと歩き始めた。それに僕もついていく。

目的地まではあともう少しの場所まで来ていた…

A P E R F E C T M A D N E S S ?

アレン.....

どこかで聞いたような名前...

誰の声だろう…それでも、優しい声だ…

僕を呼ぶのは誰…？あなたは…

「アレンツッ！」

スタークの太い声で僕はようやく我にかえた。どうやら僕は上の空のようだった。歩きながらぼうつとしてるなんて…なんて能天気なんだろうが。

「ああ、ゴメン…なに？」

「なにっ？じゃねえよ。まだタワーまでかかるのか？？」

「いや、もう少しだよ。この道を行けば…」

何かとてつもなく重い物がどしん、とのしかかったような気がした。

この感じはなんだ…！？足が震えて歩けない…！

スタークは前方を見上げて、冷や汗をかきながら笑みを浮かべた。

どうやら、フィリップス・シャンデリアの中からこのまがまがしい
気はきているらしい…！！

「着いたか…！！アレン…ここからは、死ぬ気でついてこい。」

「…！！」

タワーは数時間前のものとはまるで別物のようだ。左右双方に置かれた神々しく輝く金像が客人を迎え、それをくぐるとレッドカーペットが敷かれたエントランスが待っているのだ。

なんとも言えないこの感激は、ここに踏み入れた者のみぞ知ることが出来る。

その空間への第一歩を踏み出した時だった。金像の目が赤く光りだした。

「おまエたチ八何者だ……」

「いますぐ立ち去れ…」

「かつ！！最近の石像は喋んのか？ずいぶんハイテクなやつだなあ！

だが、残念だったな。俺と会った運命を呪いな。」

すると金像は激しく揺れだし、手にしていた金の剣と盾を握りスタ
ークに襲い掛かろうとした。重々しい足音とともに迫りくる。

「うらあ ああっ！…！」

力一杯込めた彼な一振り、金像はバラバラに碎け散り、輝かしい光
を見せながら動かなくなつた。

まさかこんな物までもが攻撃をしてくるなんて…いったいどうなってるんだろう。

スタークいわく、それはマリアによる感染だという。どうやら、その感染は生物以外を対象としても支配してしまうようだ。

そして、僕らはびりびりにひき裂かれたレッドカーペットの上を歩いてようやくフィリップス・タワーへと入った。

このあと、更なる試練が二人を待ち受けていた…

静まり返ったエントランスは照明すら消えてしまった。そのせいで部屋の奥がよく見えない。しかし、スタークは視界が良好なのだろうか。そのままずんずん進んでいく。

「ね、ねえ！見えるの！？」

「あ？まあな。びびんなよ、俺の手を掴め。」

黒い手袋をはめた細い手をしっかりと掴む。こいつ…なんか手かたいような気がする……

いや、それは間違いだった。手袋が異常に頑丈に出来ているんだ。

しかし…鉄のようにかたい。おそらく剣を握るためだろう。それにしてもどれだけ強い力で握っているのか。まあ金像が砕けるくらいだ。尋常じゃない力だ。

余計なことを考えているうちにエントランスの奥にある扉を開け、次の部屋へと入った。

この部屋には何十もの黒い柱が林立していた。なんとも圧倒的な光景である。

そういえばこんな恐ろしい場所にいるのに…さっきみたいな余計なことを考える余裕がいつから出来たんだろう。

しかし、ここから先はそんな悠長な態度をとっていられないことになる。そう、新たな敵の襲来だ……！！！！

「なあ、そろそろ出てこいよ。いるのはわかってんだよ。」

スタークの読みは完全に的中していた。人の気配がする……。奥にいる……？いや……！！

「伏せろおおお……！！」

突然、右側から何者かが剣で切り付けてきた。スタークはそれに対応して剣で競り合う。不意の出来事に僕はただ戸惑うばかりである。

「あら…久しぶりね、スターク。」

「おお！その声！ビアンカちゃんだろ！！なあ、明かりを点けてくれよ。そのエロボディを見せてくれ！」

こいつ…何言ってるんだ。でも、どうやら知り合いのようだ。そういえば、さっき戦ったアルフレッドとて人とも面識があったんだよな。

「ふふふ…彼はあたし達の同志だったのよ、ぼづや。」

なんだって…？スタークはこいつらの仲間だったのか？それなら、スタークはどうしてこいつらの陰謀を阻止しようするんだ？

「おっと、ビアンカちゃん。相変わらず口が達者だねえ。」

アレン、とりあえず後で話してやるよ。俺と、組織の因果をな。」

そう言い残すと彼は剣を握り、戦闘の体勢に切り替えた。徐々に明かりが点けてきた。そして、ビアンカという女の姿が現れた……

「さて、久々ね。あなたと剣を交えるのもっ」

「ふう！やっぱりエロボディ！負けちゃったらどうしようかな、ははっ……」

その金髪の女性は、年齢はスタークより少し上というところだろう。そしてたしかに、彼の言う通りかもしれない…。あの胸のサイズは戦いづらくないのだろうか…？

「ははって…あなた、私に負けたことないじゃない。まあ、前のあたしと軽んじないことね…！」

「そっか…じゃあちよーつと痛い目にあってもらうぜ、女の子に手あげるの嫌いだが…恨まないでくれよ…！」

いつものように急な展開で戦いが始まった。どうやら知り合いのようだけど…お互い容赦がない。

先に勢いに乗ったのはスタークだった。間合いを詰めて剣を振り下ろす。一撃目は床に直撃し、それは土掘りの如くいとも簡単に穴がぽっかりと空いた。

しかし、ピアンカは一旦後退して体勢を立て直す。そして彼女は剣を高く掲げ、息を大きく吸う。なにか来る……！？

セクシャルフレイム！

「まただ！！さっきの竜巻のように唱えた途端に変化が起きた！

上空に複数の炎が浮かび上がり、それらが剣にまとわり付いた。あんな物に切られたら無傷では済まない。

「さあ…！あつっーいモノをあげるわ！！」

「どつやら変化が起きたのは剣だけではないようだ。さっきの移動速度よりも明らかに向上している。身体能力も飛躍的に上がるのか…

「ひゃー！やっばいなあ！！」

「灼熱に焼かれなさい！！」

振り上げた炎の剣を逃げまどうスタークに目掛けて投げた。床に触れた途端炎は周囲に広がり、瞬く目に彼の腹部は火傷を負った。

打たれ強いとはいえ、さすがダメージを受けたらしい。あれでは皮膚も深く焼けてしまっているだろう。

「くっ……！！ビアンカちゃん…強くなったんだな…」

「言ったでしょ？軽んじるなって。ちなみに、今のはちょこつと外したから…次は当てるよ…」

ビアンカは炎が猛る剣を向け警告をする。たしかに、次はないだろう…！こんな窮地に立たされたら、普通ならば畏怖するだろう。

それでも、スタークにはそんな常識は通用しない。ほら…顔をよく見てみればわかるさ……

「なあに笑ってんの？怖くて頭おかしくなったのかしら？」

「ああ……頭がおかしくなりそうだ。」

楽しすぎて頭が壊れてきたぜ……！！ピアンカちゃんよ……今度はお前をイカせる番さ……！！」

剣を大きく一振りすると、周囲の炎が一瞬にして消し去った。そして剣を構え、ゆっくり瞳を閉じた。

「……………っ！！」

それと同時に彼女は危険を察知したように間隔をあけた。スタークは何をするのか…

この時、僕は初めて彼に秘められた力を見せつけられることになる…。

炎が消し去った時、ピアンカは心中でもはや悟っていたのである。スタークのが解放されるということ。

相手としては、これは看過出来ない事態と言っても過言ではないだろう。

何故なら彼は……………！！

「ふう…やっぱり止めとくぜ。まだ解放する時じゃない。」

「はっ…！！能力解放をせずにあたしを倒すつもり！？」

「ああ…俺も少し本気を出さしてもらっけどな。安心しな、殺しはしないさ…」

挑発され険相を浮かべ痺れを切らしたピアンカは床に刺さった剣を抜き、足を強く踏み込んで飛び上がり斬り掛かるうとした。

再び炎がまとい付く。またくれば確実に助からないだろう。するとようやくスタークは次の行動に移った。

姿勢を低くし、絶妙なタイミングでスライディングを繰り出して攻撃を回避した。

「今日のピアンカちゃんはピンクか…」

彼女は直ぐさま手でスカートを押さえて頬を染める。所謂乙女の恥じらいというやつだ。スタークのやつやりたい放題じゃないか…。

それと同時に剣の炎の激しさが増した。どうやら怒りに触れたようだ。

彼女は後ろを振り返り、足を動かそうとした。その時、スタークは指差して警告した。

「足…動かさない方がいいよ。」

恐る恐る彼女は自分の足を見てみた。

ゆっくりと赤い雫が足元へと流れていく…温かい…けど、徐々に冷たくなってきた。

そして、気づいたんだ。さっきのスライディングは、回避じゃなく攻撃だということ。

スタークはいつのまにか剣を手にしていた。足をくぐった時、瞬時に剣を振るって臙を斬ったのだ。女の子には手をあげないと言ってたくせにえげつないことをするもんだ。

「くっ……！！いたっ……」

「ふう、これで懲りたる？もし認めるなら、助けてやるよ。」

もはや立つことすらままならないビアンカはひざまついて悔しげな表情を浮かべて俯く。

このまま彼女が強がると命が危ない。早く諦めた方がいいのに……どうしてこんなにも頑固なんだろう。

あまりにも目を当てられないのでよっぽどスタークを止めようとしたが、たしかに彼女は敵なんだ。ここで僕がどうこう言えることはないはずだ。

「……………くっ!!」

いつまでも意地を張る彼女だったが、最初に折れたのはスタークだった。彼は呆れたように腰に巻いていた小型のポーチからカプセル状の薬？を取り出した。どうやら回復薬のようだ。

口を開けな。何も言うな、ただ従え。

耳元でそう囁き、スタークは彼女の口に薬を入れる。それにピアンカはただ従うだけだった。

やっぱり、彼は女性には甘いのだろうか…

「さて、行こうぜ。アレン。…ピアンカちゃん、動けるようになった異界に帰りな。」

そう言い残し、部屋をあとにした。ただ残ったのはヴァンパイアに血を吸われた淑女のような彼女だけだった。

むなしく、時間だけが過ぎていった。

THE MALEDICTION OF ALLEN'S GODDESS

柱の部屋を出ると、そこはエレベーターへと繋がる一本道だった。相変わらず静かな空間だと思ったがその時、室内の明かりが点いた。これでエレベーターも作動するはずだ。

「いつで上に行くのか…？」

「そうみたい、作動してくれて助かったね。」

そしてエレベーターに乗って扉が閉まり、ボタンを最上階へと押さうとした時だった。

ひとりでに作動し、上へと上がっていく。行き先は8階のようである。そういえば、観光した時に8階へと行ったな…たしかあそこは………

「映画館だと……？」

「ああ、たしかハーレン街の町並みの歴史を見た気がする……」

アレン……

またこの声だ……しかも声がこもっていて識別が出来ない。それだ

けど、どこか懐かしく優しい声だ…。

さっきと違うのは、声がするのはこの奥のシアタールームからだということだった。僕はスタークより先に足を動かしゆっくりと歩き始めた。

「おい、どこに行くんだ？おい！！」

なにか妙な圧力が奥から感じる…。アレンの野郎先走りやがって…
どんな目にあっても泣くなよ。

しかも奴はなにかつぶやいている。小さすぎて聞こえない。吐息を繰り返しているようだ。

そして奥の扉を開き、そのまま部屋へと入っていった。

その時だった。空間が砕け、中から複数の悪魔が現れた。今はこんなやつらの相手をしている暇はない。とっとと片付けるぜ！！

悪魔たちは剣や槍を手に襲い掛かる。背後にいた一体の悪魔が剣を

振り上げた時、スタークはその刀身を掴み握力だけで砕いた。無防備な悪魔は腹部を蹴られて黒い砂となった。

それを見た悪魔たちは一瞬たじろぐ。その隙を突かれて、瞬く間に斬られて消えうせた。

しまった…！アレンを追わなければ…！！

扉を蹴り室内へと入った。中は客席が並んでいて、奥にはスクリーンが下りていた。無論誰もいない。俺とアレンを除いて……

「アレンッ…！」

「……………ん。……………か……………た。……………ぼ……………だね。」

やつは何か独り言のよつに呟いている。よく聞こえない。近づいてみよつ……。

「……………さん。わかつ……………。僕……………いんだね。」

「お……………さん。わかつた……………。僕が……………せばいいんだね。」

距離が縮まっていきさらにもう一步進んだ時、アレンの姿が消え、スタークの背後に立った。

そしてその手には…拳銃と剣が……

「お母さん…わかった。僕が殺せばいいんだね。」

THE MALEDICTION OF ALLEN'S GODDESS

どこか様子がおかしい…ふらつき銃を構えるその姿はもはや敵とも思わせる。

しかし今この場で力をふるうわけにはいかない。こいつはただ操られているにすぎない。

アレンは躊躇うことなく発砲してきた。その弾は右肩を貫き、スタークの動きを鈍らせる。どうにか策を練らなければ殺されるのも時間の問題である。

「……………くそっ……………こうなったら使うしかないか……………」

魔人眼……………

スタークの両眼が紅く染まっていく。これは魔人の眼を一時的に宿す技だが、それと同時に寿命が縮むという代償が伴うのである。

染まりきった時、自分の視界が別世界に変わる。周囲に存在する魔力を見極めることで、あらゆる物質の動きを透視出来るようになる。

そして、それでアレンを見ると……何者かが背後に浮遊している。こいつはまさか……

また再び銃を向け発砲した時に駆け出し、銃弾を手の甲で弾き返しアレンの懐へと忍び込む。

そして胸倉を掴み、床にたたき付けるとアレンはそのまま糸が切れたように倒れたままだった。

「……出てこいよ、似非超能力者。」

おやおや……相変わらずひどい言い草じゃないか。

徐々に姿が現れていく……狐目をした長い銀髪の男が現れた。彼の名はレンブラント・ルナティック。文字通り相当イッてるやつだ。

「くくく……やあスターク……。久しぶりじゃないか……どうだい？この洗脳能力は……！」

「相変わらずくだらない研究ばかりやってんのか？悪いけど、アレンは返してもらおうぞ。」

レンブランドは首を90度傾け、不快そうな表情を浮かべる。

「まさか君が人間の心配をするなんてねえ…こいつは君のなんだ？
え？」

「…マリアを潰す最後の希望だ。」

しばらく沈黙の時間が続く。レンブランドは目を大きく見開いたままびくりとも動かない。彼の中の時間が止まったのか。

そして次はプルプルと小刻みに震えだし、急に吹き出し快哉を叫ぶように爆笑する。

「全く…君は実に面白いやつだよ。では、君をじっくりいたぶって
からこいつを殺すでしょう！」

レンブランドは滑稽な形をした銃を取り出す。実は今までこいつの能力をろくに見たことがない。つまり、実力は未知数である。とりあえずは様子見といこう…

にやりと笑い発砲した時、銃口からどろどろの液体が流れ出てきた。しかも一つだけではない。次々と無尽蔵に出現してくる。

「くくく…これは私の魔力で造られたしもべ達だ。さあ、ゆけ！」

号令とともに複数の流動体はスタークに迫っていく。それらをひたすら剣で攻撃しても何度も分裂を繰り返す。そしてそれらは中央に集合し、一つにまとまり巨大化する。

「どうだ…スターク、負けを認めるんだ！そして私の研究材料となれ！君の中の魔…！」

レンブラントが言葉を言い切る前にスタークは瞬時に間合いを詰め、彼の口元を片手で掴み、それ以上は言わない約束だと言い捨て座席にたたき付けた。

しかも巨大流動体は剣による渾身の一撃で分散していった。何もかも瞬間的出来事である。

「く…やるね。だけど、私にはまだ策が山ほどあるんだよ。次の策は…やはりこいつにかきる！」

するとアレンが再び動きだし、そして剣を自分の首に突き付ける。なんとも卑劣な手段である。しかしレンブラントの表情は血に飢えた悪魔のような笑みを浮かべているだけだ。

「ちっ…どこまでもきたねえ野郎だ。」

「……………ふん、無駄口を叩く余裕があるなら自分の心配をしたらどうだい？」

「なんだあ？俺が死ぬような言い方しやがって！」

「ご名答。君は私を倒すことは出来ない。こいつの命は私の手の中にあるのだからね……」

「はっ…そいつ、お前だけが操れると思うなよ。」

もう一度言う。アレンを操れるのがお前だけだと思っなよ。」

スタークはそう宣言すると、剣をしっかりと掴みぽかんと口を開けたままのレンブラントに先端を向ける。はつと我にかえった彼は銃を構え、同時にアレンも動き出す。

洗脳された今の彼には意思はなく、ただひたすら剣を振り銃弾を放つだけの兵器である。しかし先程よりも少しずつ動きが鈍くなった。それはレンブラントの魔力が消耗されつつあるからだ。その証拠に、彼の息が荒くなっていく。

「はっ……はっ……」

「おいおい、てめえは昔から戦闘向きじゃねえんだからさっさと諦めなつて。言っておくがさっきの言葉は嘘じゃないからな。」

「……洗脳能力が君にもあるというのか……否！！そんなはずがない！！この能力は異界でも私だけが使えるんだ！！君のような奴が使える技じゃないんだよおお！！」

怒りを表わにした彼は辺りにいた流動体のしもべに向けて殴り蹴り八つ当たりを繰り返す。なんともおかしなやつだ。自分の思うようにいかないとすぐにキレル餓鬼と同じだ。こうなると手がつけられない。

「あ………ああ………だんだん………だんだんだんだんだんだんだん
だんムカついてきたよ……！！こうなったら、私の切り札で君を葬
つてやる………来い、しもべ達よ！」

するとレンブラントは銃を踏み潰して破壊し、中から液体が大量に溢れ足元に集まる。それに周囲にいた流動体達もついて行き、それらはレンブラントの口内へと入っていく。なんとも不気味な光景だ。彼の体に異変が起きる。華奢な体がぶくぶく太っていき、最終的には鞭のようなゼリー状の複数の腕を兼ね備え、足は大蛇のように長い尾となった。まさに化け物である。

「サあ……終幕といコウか……」

「ちっ……厄介なことになった……悪魔化ってやつか……」

悪魔化：それは異界の者がある条件を満たしたときに発動出来る切り札である。自分の体や魂を悪魔することで秘められた力を最大限に引き出せるのだ。

そして、レンブラントの悪魔化の条件は、狂気である。怒りや悲しみで錯乱状態に陥った時に発動できる。その能力は…

「リキッドボディ…肉体を流動体へと変化させる能力。君ノ攻撃は全て通用シナイ!!!これでオワリだヨ!!!!」

「ぐあっ……！！！」

鞭のような腕達がスタークの体をひたすら打つ。とてつもない力によつて足が潰され、一瞬動きがひるんた時に四肢を捕まえられて身動きが取れなくなる。

これで抵抗をすることもままならなくなった。彼はただ攻撃をくらい続ける。人間ならば致死量のはずの血液を吹き出す。生きているものの、絶体絶命の窮地に立たされている。

「クハハハハッ！！！魔人もそんなものか！！！」

「ばーか……まだ魔人は眼しか出してねえよ。だけど、そろそろもう少し出さないと死ぬかもしれないな……」

「出し惜しみしテイルと、シヌよ？君。」

解除を宣言した途端に締め付けていた腕の呪縛がゆっくりと解ける。機能しなくなったそれはただの液体に戻った。

「ば、ばかナ！！なぜ私のリキッドボディーが…！？」

「簡単だよ。魔人の第二の能力…万象還元。」

これを発動している間、自分以外の一切の特殊能力を無効とする。つまり、悪魔化状態も解除されてしまうのである。

しかし、その他の作用として自分の動きが完全に封じられてしまう。

つまり、悪魔化を封じたところで形勢はさほど変化しないというところである。

「ハッ…まあいい。どうやら通常の魔力は使えるようだな。ならば私のしもべ達を使ってとどめをさしてやるっ！」

「残念、そいつは無理だ。お前はここで終わりだ。」

「ばかめ！！君は動くことすら出来ないんだろう！？そして、その魔人の能力を解除すれば私はまたリキッドボディーを復活させる！
！そうすれば君はおわ……………」

一瞬の出来事だった。御託を並べるレンブラントの額から血が流れ出る。原因は剣が貫通したためである。しかしながら無論スタークは動けない。これは…無意識なままのアレンによる攻撃だ。

「な…………なぜだ…………こいつは…私の手駒だったはず……………」

「言ったはずだぜ。アレンを操れるのはお前だけじゃない…とな。」

「……………だから……………なぜ君が操作しているのかと聞いている……………」

すると彼はアレンの持つ剣を見てみると言わんばかりに指を示す。

その剣は…フィリップス・シャンデリアにはいる前に託したものだ。これはただの剣ではない。魔力を溜めることが出来るのだ。そして、それにはスタークの魔力が込められていたため、彼の魔力と剣が共鳴し合いコントロールを成功させたのである。とてもうまくいく可能性は低い技であり奇跡と言っても過言ではない。

「簡単なトリックだろ？お前の頭脳なら理解出来るはずだぜ。」

…と言っても、もう死んでるか。はははっ

目を見開き、口を半開きになったままレンブラントは息絶えた。その死の様はあまりにも自然すぎてまだ生きているような気さえしてしまう。

アレンはその後目を覚まし、起き上がる。どうやらこのシアタールームで起きたことを何も覚えていないらしい。

「……………僕は何を…？母さんは？」

すると突然映写機がひとりでに起動し始める。スクリーンに何か映像がうつしだされた。それは、髪の毛の長い女性がただこちらを向いているだけのものだった。彼女こそ……………シェリー・クロニクル。アレンの母親である。

「母さん……………」

しばらく映像に見入っていると、彼女はアレンに微笑みそしてそのまま消えていった。

さらにタワーの奥へと進むために跡にしたシアタールームには映写機の音だけがむなしく響いていた。

CHILDISH MIND

シアタールームの奥は、またエレベーターへと続く一本道だった。何か特別な仕掛けがあるようにも見えない。彼らは用心しながらもエレベーターに乗り、それは自動的に上に昇っていき、12階で止まり扉が開いた…。

そこは何の変哲のない部屋で、中には誰もいない。ただ、奥には扉が二つあった。どちらかが本物の扉なのだろうか。

「どっちに行こう…」

「お前が決めな。」

「えっ…じゃあ……左に行こう!…」

左の扉を開け、そのまま突き進む。そこは案の定簡単に通れそうな道ではなかった。様々な武器を持った複数の悪魔がいたのだ。

スタークは直ぐさま駆けて飛び上がり、そのまま剣を振り下ろす。もはやただの悪魔は彼にとって雑魚同然である。

あっという間に悪魔達はやられて砂に還る。しかしこれで終わりではなかった。どこかで人の気配がする…。奥から足音が聞こえてきて、それはとうとう姿を現した。

「あー！すたーくとあれんだ！」

彼らを指してきたのは、小さな少女だった。彼女の名はフィリア・レジストブルク。

「なんだあ…？誰かと思えば、ガキンちよか。」

「なにいつ！フィリアのこと馬鹿にすんなあ〜！実はね〜バギーのおじいちゃんからのめーれいで、あなた達をやっつけないといけないの。」

「へえ、どじやって。」

「じーやって。」

フィリアは斧を取り出した。しかしそれはどう見てもレプリカである。彼女は軽やかな歌のような呪文を唱える。するとサイズがどんどん大きくなっていき、最終的には巨大な斧へと変化した。

とても女の子が持てる重さではない。それなのに彼女は軽々と手にし、スタークに迫る。

「おお……やるなあ、ガキんちよ……！」

「えーいつ！グランドシェイカー！！」

斧を地面にたたき付けると、大きな地震がタワーを揺らした。あまりの揺れにスタークは転んでしまう。

その隙を彼女は見逃さない。彼の前で大斧を大きく振り上げる。この子…強い！！

CHILDISH MIND ?

スタークは体勢を切り替えて剣で対抗して間一髪危機を乗り越えた。しかし、形勢が変わるわけではない。怯むことなくフィリアは大斧を無垢な両手で握りしめる。

「がきんちよ、それ反則じゃあないか？俺の知り合いのやつ有能力だが…対象具現化に似てやがる。」

「あれ〜？あなたキースと知り合い？」

「……………やっぱりお前達の組織にいたのか。」

すると、フィリアの大斧の柄に白い手を置く蒼い髪の男性が現れた。彼が視界に映った瞬間辺りに重々しい異様な圧力が加わる。どうやらただ者ではないようだ。

「……よお、キース。」

「……あ、あいつは……？」

圧倒され怖じけづくアレンは動くことすらままならない。しかし、人間がそうなるのも無理もない。何故ならば彼は……

「キース……オーウェン……異界でも最強と謳われている……そして、俺の兄だ。」

彼はスターク達を冷たい眼差しで見つめ、次の瞬間には背後へと立っていた。あまりにも速過ぎる……大広間で戦った風の男よりも速い……！！

細い剣を抜き、スタークと火花が散るほど力強く競り合う。しかしキースは顔色一つ変えもせず、一度退きフィリアと並ぶ。

「力を抜け。俺は貴様とここで戦うつもりはない。フィリア、次の一撃で終わらせる。」

「はい。いつくよおー！！スーパーダイナミックブレイカー！！」

ふわふわした少女の音が響き、大斧が鋼の槍へと変形しそのまま凄まじいスピードで迫り強力な一突きをくらわせた。

スタークはなす術もなく軽々と突き飛ばされる。壁は悉く破壊され、瓦礫の中に彼は埋まった。

「あ……あ……！！」

「人間、貴様の希望の光はたった今消えた。絶望しろ、そしてこの場で無惨な姿で果てるがいい。」

再び大斧に還元し、少女はアレンの方へと少しずつ歩く。ここで死ぬのか……！？こんな終わり方なんて…

諦めかけた時、何者がフィリアに奇襲し大斧にひびを入れた。突然現れた救世主、それは炎がまとった剣を手にしたビアンカだった。

CHILDISH MIND ?

「な……ピアンカさん……!？」

「また会ったわね…アレン君。今度はあたしに恩を返させてちょうだい。」

炎はさらに猛るように燃え盛り、それは勢いづいてフィリアに襲いかかる。

対抗する彼女は大斧を前に置いて盾のようにして炎を防ぐ。しかし今の攻撃は囷にすぎなかった。炎が消えた時、ピアンカは剣を大きく振り上げ、大斧に打撃を与えた。

するとひびがますます大きくなっていき破壊した。どうやらフィリアはもはや武器を持っていないようだ。

王手をかけるが、それを仲裁したのは冷酷な表情のままのキースだった。彼女を見つめ、そして背向ける。

「……………戻るぞ。」

「ま、待って!!…どうしてあなたは組織に入ったの!?!あなたは…!!」

空間が裂けて、中に空洞が続いている。これは移動空間と呼ばれ、異界での移動手段の一つである。

何も言わずにキース達はその中へと退避し、そのまま空間は元に戻った。なんとか危機を免れたが、スタークは起き上がらずに瓦礫に押し潰されたままだった。

アレンとビアンカは直ぐさま協力して瓦礫を除く。しばらくしてスタークの姿が現れ、ゆっくりと起きたが立ち上がる気力がないようだ。

「ちくしょう……………やられたか……………」

「スターク…これを飲んで。」

ピアンカは回復薬をいくつか所持していた。ここに駆け付けられる際にくすねてきたらしい。どうあれこれでスタークの応急処置は済んだ。彼は薄々気づいていた。もしさっきの一撃がフィリアでなくキースによる攻撃だったとしたら、おそらく死んでいたことに。

「…………ピアンカちゃん、どうして戻ってきた？」

「あたしは…またあなたに助けられたから…また、あの日のように……………」

彼女は先程回復薬をもらった時、数年前の出来事を思い出していた。あれは…雪解けが始まりつつあった季節のことだった…。

THE PAST (前書き)

貴方に会えたのは奇跡でしょうか。

何も言ってくれないけれども、貴方はお元気ですか？貴方は幸せですか？

どうか、私な教えてください。

出合いが奇跡ならば、こうなるのは必然だったのでしょうか…？

THE PAST

今となつては五年前……思えば、この日は肌寒い気温で、夜遅く街路には一人たりとも歩く人はいなかった。その中でビアンカは黙々と歩いていた。

異界は人間の住む世界とさほど変わらず、街灯もあれば石畳の道もある。強いて違つところを挙げるならば…

「へっへっへっ…よお、姉ちゃん。こんなところでなあにしてんだ？」

「あら…じろつきには興味ないの、ゴメンね」

じろつきの間を通ろうとした時、彼は通せん坊のように腕を壁に押し付けてビアンカに近づく。汚らしく生えた髭にまた嫌悪感を覚え

る。

その時、後ろから茶色のコートに身を包んだ男がこちらへと近づいてくる。彼は二人の前で立ち止まり、睨みつけるごろつきの胸倉を掴みそのまま殴りとばす。

「ぐっ……てめえ!!」

「失せろ、俺の目が黒いうちにな。」

「な、なめんな!!!!」

ごろつきは隠し持っていたナイフを手にする。怯まずに男ははめていた右の手袋を外す。さらに右手は鋼でつくられたグローブをはめていた。

ナイフで襲いかかってきた時、男は右手を前にかざした。すると手が光り輝き、消えた時には既にごろつきは切り傷だらけで倒れてい

た。

「ほらよ、二度と近づくなよ。」

回復薬のカプセルを倒れている男へ放り投げ、ビアンカのかじかんだ手を握りしめ夜の街を駆け出した。

彼の名前はレオン・レスターク。異界の秩序を守る警察部隊「平和軍」に所属する隊長であり…

ビアンカ・アンデリカの恋人であった。

THE PAST ?

それから何週間か経ち、桜の季節となった。暖かい風が吹き始める。これだけでもビアンカの気分は高陽していった。この日はレオンの職場である平和軍総司令庁へと向かう予定だった。

鞆を肩にかけ、自慢の黒いハイヒールを履いて春の世界へと飛び出す。道を歩く速度も無意識のうちに速くなっていく。

あっという間に彼のもとへと着き、同僚は察してレオンの背を押し、てビアンカの方へと向かわせる。彼は若干頬を赤く染めながらも声色を正常に保とうとした。

「お、おう…もう着いたんだ。」

「おう…じゃないよ。レオン、大丈夫？今日は隊長就任式なんですよ？いつまで緊張してるつもり？」

「だーっ！！わかってるって！俺の晴れ舞台を見てもっと惚れんな
よー！？」

「うっさい！ほら、他の隊長さん達が呼んでるよー！」

すみませ〜んと間抜けな彼の声が響く。なんて落ち着きがない人な
んだろう。いつもそうだ。そんなレオンもようやく一人前になれた
んだ。

本当に馬鹿な人なんだから…

惚れてるっっの。

無事式が閉幕し、レオンが舞台の階段から下りようとした時のことだった。会場内に息を切らし少し耳障りなほど音量の大きなアナウンスが届いた。

「内部にいる全ての者に警告します！！総司令庁に悪魔を引き連れた複数の侵入者が現れた模様！！ただちに避難せよ！！繰り返します！！総司令庁に悪魔を引き連れた複数の侵入者が現れた模様！！ただちに避難せよ！！」

アナウンスが途切れるとその場にいた多くの隊長達が行動を始める。レオンもそれに続いて駆け出していった。

なんだか…嫌な予感がする…まるで、大切な何かを失ってしまいそうなのがしてしまって……

まだ無力だったピアンカは他の女子供と同じように避難するしかなかったのだった。

THE PAST ?

レオンは年齢的には後輩となるマルクス隊長に後方の悪魔の殲滅命令を受けて、グローブを敵に向ける。数は多くとも力は弱いため、たやすく倒せた。

しかし、マルクスの方の相手は違った。大量の悪魔を率いていたリーダー格の者だったのだ。小柄なその男は腕が伸びたり刺を生やし攻撃したりなど奇妙な技を扱っていた。

「もう終わりかな？まあ平和軍でも僕ら魔人旅団の前では手足も出ないのはわかりきってたことだけどね」

「くっ…どつやら我々を愚弄しておるようだな。魔人旅団…知っておるぞ。」

「そりゃどつども。」

魔人旅団……それはメンバー、そして目的でさえデータが残っていない謎の組織。しかし、マリアの組織とは関係はないということは確かである。

彼らが総司令庁を奇襲したのには何か訳があるにちがいない。

「なぜお前達は総司令庁を……」

「うーん、わかんないって言うたら？」

「こつするまでだ。」

レオンは瞬時に男の後ろに回り込み、背中に手を押さえる。そして能力を発揮した時、今度はグローブから小さな爆発を起こした。小さいとはいえ相手にダメージを与えるには申し分ないほどだ。

「げほっ…なんだよ、お前…？」

「平和軍第五軍隊長レオン・レスターク。おい、名乗りやがれ旅団よ！」

「ずいぶんと図に乗るなあ…まあいいや…：…僕の名はラット。魔人旅団の第三魔人だ…！！」

すると腕が大蛇と化し、レオンに向かって突撃してくる。それにたいては彼はグローブをかざす。すると今度はごろつきに切り傷を負わせた能力を使い大蛇をぶつ切りにした。

「なあるほど、それが君の能力か…一つは爆発…二つ目はかまいたちのような攻撃といったところか。」

不気味に笑い、ラットの腕が復活した。まだ何か策略がある様子であり、油断は禁物である。

THE PAST ?

距離を常に数メートル離して戦うのがレオンの決まったスタイルである。しかも今回の相手はさらに予想外な攻撃を仕掛けてくるにちがいない。そしてその推測は的中した。ラットの背の皮膚が裂け、その中から鋭利な角を生やした獣がゆっくりを姿を現した。彼は本物の化け物なのだろうか…

獣は雄叫びを揚げてレオンへと勢いよく突進する。彼は獣の背に手をおいて跳び箱を飛び越えるかのようにして回避した。それと同時にグローブから爆発を起こし、巨大な体の獣は大きな音を立てながら倒れた。

「おい…旅団、もう終わりか？」

「……………」

顔を背けたまま何も言葉を発しない。一瞬気を緩めてしまったが、まだ油断は出来ない。しかし彼はそのまま全く動かない。どうやら、本当に策が尽きたようだ。

ゆっくり歩み寄る。その時、彼の肩が小刻みに揺れ始める。ついにラットは大いに吹き出した。甲高い笑い声は腹立たしく思うほど激しかった。

「かかったなあ!!レオン!!」

足元に違和感を覚える。ゆっくり見してみると、そこには死んだはずの蛇達がまとわり付いていた。いつのまにこんな…!?

「僕の蛇はね…狙った獲物は決して逃がさないんだ。そして…こいつらは……どっかーん。」

魔力のこめられた蛇達の凄まじい爆発により、レオンは逃げる術もなくダメージを受ける。もちろん、彼は倒れたままである。

「はっ……平和軍のくせによくやったよ……」

THE PAST ?

平和軍は異界の治安を守るために選抜されたため、戦闘力はずば抜けて高い。しかし、そんな彼らにこの魔人旅団は互角：それ以上の実力を持っているのである。

レオンが再起不能なまでに追い込まれた時、マルクス隊長は決死に力を尽くしたが、ラットの能力を前にして命を失ってしまった。

その光景を辛うじて目の当たりにしたレオンはゆっくりと立ち上がり、ラットを呼びかけた。

「なんだよ…まだ生きてんじゃん。」

「まだ…死ぬわけにはいかないんだよ。愛する…人がいるからな。」

その時、後方から自分を呼ぶ女性の叫びが聞こえた。それはビアンカにも似ていたが、彼女は避難してここにはいない、戻ってくるはずがない。

しかし、それは紛れもなく彼女の声だった。

「レオン……!」

「……あはっ……あの人が殺してやる……」

しまった……!一瞬の間を置いてラットは猛る複数の毒蛇をビアンカに仕向ける。それらはいまにも彼女を襲いかかるうとした。

114

「……………っ!？」

目の前には身代わりとなり蛇に噛まれ猛毒に蝕まれたレオンが立ちはだかっていた。彼はすぐに毒によって身体の自由を失い、そして右手のグローブをラットに向ける。

「なんのまねだい？」

「……………誰が…俺のグローブは二つの能力を持っていると言った…？」

このグローブは…三つの能力を持っている…」

第三の能力、それは相手の体を大きな手の形をした魔力により圧迫し仕留める。これを受けたラットはもがき苦しみ、倒れてしまった。

ようやく旅団を倒した…これで落ち着くと思われていた。だが、レオンの様子が明らかにおかしい。まさか…先程の猛毒におかされたからだろうか。

「は…はは…この蛇の猛毒にはね…悪魔になるための促進薬としての働きをするのさ…」。

そして、悪魔になった彼は…君を殺すよ。あはーははははっ！！！！
！！！！」

吐血をしたラットはそのまま倒れ、とうとう息絶えた。しかしまだ
終わったわけではない。それからレオンはいつそう激しく苦しみ、
ついには紅い体をした悪魔へと変化してしまった……。

THE PAST ?

これは現実なのか、それを疑うことしか今の彼女には出来ない。愛する人の変わり果てた姿、それはあまりにも過酷で、そして悲愴なるものだった。

レオンは一步ずつ近寄ってくる。彼の目には彼女はただの目標ターゲットにしか映らない。今の彼は…レオン・レスタークという悪魔なのである。

「あ……………ああ……………」

彼に対して恐怖心を抱きたくはない…。それでも、彼の手はゆっくりとビアンカの小さな頭へと近づく。

勇気を振り絞り、その場から逃げだす。それでも悪魔の力には敵わず、すぐに捕まってしまふ。冷たい手が腕を強く握る。前なら…彼が握ってくれると安心感がどこからかわいてきた。それでも、今もレオンはいないのだ…。

「さようなら…レオン・レストーク……」

目を閉じ…全てを諦めた。もう……これでいいのだから…運命なら抗う必要はない…。

「ひゃー、ずいぶんど派手にやってくれたじゃないの！」

誰…？赤い長髪の男は剣を片手にしてレオンの攻撃を見事に防いだ。どこからともなく現れた男…それがあたしとスタークの出会いだった。

スタークは力づくでレオンを弾き返すと、一気に距離を縮めて剣先

を喉仏に当てる。少しでも奥に押せば一たまりもない。

「や、やめて!」

「……………残念だけど、こいつにはもう感情どころか理性もない。いっそ楽にさせてやれよ。」

意を決し、あたしはスタークの剣に手を添えてぐつと力を込めて刺した。不思議なことに、レオンは苦しい声を揚げず、その代わりに涙を流した。その時レオンは彼女の頭を撫でて、元の彼を彷彿とさせた。

さようなら……さようならレオン・レスターク……

しばらく声を揚げて泣いたあと、スタークはにやりと笑いながら話しかけてきた。

「なあ姉ちゃん。俺達のところに来なよ。」

彼はそう言い残し、総司令庁をあとにした。そして行く先を失ったピアンカも彼について行くことにした。

その時、彼女は決めたのだった。彼らの元で強くなり、魔人旅団達に…復讐を誓ったのである。

M E N A C E

これが彼女の隠された過去だった。普段は明るく振る舞う彼女だが、それはあまりにも重く、過酷なものである。

そして彼女はとある提案を出した。それはアレン達にとって意外だった。

なんと、ピアンカはこれからの共に戦うことを申し出たのである。たしかに彼女はスタークの助太刀をした以上後戻りは出来ない。

「……オーケー。まあ、俺達は皆もう後戻りはできねえんだ。行ける道が続く限り歩くだけさ。」

部屋を出た彼らは、さらに奥へと突き進む。すると再びエレベーターがあった。しかし、そこにはどこか重苦しい圧力があった。これはエントランスで感じたものと同じか…!?

「はっ…バギーのおっちゃんご立腹つてところか…行くうぜ、ボス
とこによ。」

エレベーターは凄まじい勢いで上昇し続け、ついに惨劇と化したパ
ーティー会場へと辿り着いた。

ここはアレンが命拾いした時のままだった。テーブルクロスや食事
が床に散乱している。いつ見てもおぞましい光景だ。

「誰も…いない？」

おそろおそろ会場を散策してみた。しかし、誰もいない。スターク
やビアンカが他の魔力の存在を感じないということは本当にもぬけ
の殻なのか。

緊張感が緩和しつつあった。気を抜いた時、どこからか巨大な魔力
を察知した。今まで感じていたのはこれだった…！！

「アレン、スターク！！上よ！！天井に！！」

見上げた時、それはにいつと笑う。三日月のように開いたその口はなんと不気味である。だが、それはバギーではなかった。

「てめえは誰だ…」

「失礼した…儂だ。バギーだよ。戦わなければならぬのだろうか？ならば、儂は全身全霊をかけて貴様達を消すまで…覚悟はできたか？」

「…あんたを潰して……マリアについて吐かせてやるぜ。」

「実に滑稽…ならば示すが良い！！本当の差を見せつけてくれよう！！」

MENACE ?

今さっきの魔力はバギーのものだったのだろうか。まがまがしいけれども全く別のよう感じた。しかしそれは彼の能力の一つにすぎなかった。

「儂の能力…虚体創造だ。こいつは儂の分身を作り上げるものでな、しかも能力はほぼ儂と同格、そして…いくらでも創造出来るのだ。」

そろそろと分身達が姿を現す。こいつらは下っ端の悪魔とはわけが違う。油断は出来ないのである。

スタークとビアンカは力を振るい次々と分身を倒していく。能力は類似していても一撃与えると消える仕組みになっているようだ。

ビアンカの炎によって複数の分身が消えかけた時、奥にいる本物のバギーが指を鳴らし、オーバーと呟いた。分身達は一斉に爆破して彼らに大きなダメージを与えた。どうやら火に当たると爆発するようである。

「そんな…スタークとビアンカかが押されている…!?!?」

「小僧、見ているが良い。そして絶望しろ。希望が消えてゆくのをな……」

なんとか立ち上がったものの、バギーはさらに分身を増やし続ける。このままでは埒が明かない……！！

どうにかして策略を練らないと負けるのも時間の問題であることは自明だった。

そしてスタークはさりげなくピアンカに耳打ちした。どうやら何か考えついたようだ。

スタークは一人で分身達を相手にして、周囲を素早く動き翻弄し始める。それでも形勢が逆転するような一手を繰り出す様子はない。

「何をしても無駄だ。儂には敵わぬ。」

「どっかしら…？セクシャルフレイム！！」

ビアンカの剣に再び猛る炎が纏わり付き、そして分身を切り付けた。これではまた爆発を受けてしまう！！

案の定バギーは指を鳴らして分身達を爆破させた。しかし、これがかえって状況を変えてしまうことになる。

「ふはははははっ！！！！まずは一人だ！！」

「そうね、その一人は…あなたよ、バギー！！」

爆風によって彼女は吹き飛ばされたが、一体の分身の爆発と同時にその他の分身も続いて爆発する。

それらは連鎖していき、その先にはバギーがいたのだ。先程スタークが俊敏に動いたのは分身を錯乱させるためではなく、分身を整列させるための行動だった。

作戦は見事成功し、バギーは爆発を受けて会場の壁に吹っ飛ばされた。

「すごい…!!こんな連携技を繰り出すなんて…!!」

MENACE ?

バギーにダメージを与えられたが、これで終わるほど生ぬるい相手ではない。頭から流血していたが、彼はゆっくりと立ち上がった。

そして背中に背負っていた大きな剣を手にし、振りかざした。

雄叫びとともに床に振り下ろしてスタークに攻撃を仕掛ける。彼はなんとか避けたが、床にはぽっかりと穴が空いた。あれをまともに受けていたらただでは済まないだろう。

「ふん…一撃だ。僕の愛剣であるこの轟剣で一撃受けたならば、死ぬだろう。」

「ちっ…やっぱり一筋縄じゃいかねえか。どうしたらいいかな。」

「それは愚問だな。魔人となり戦えば良いのだ。そうすれば、もう少しは興じられる戦となるだろう。」

「いやだね…魔人なんか解放したら、おっちゃん死ぬぜ?」

「ふははは！…！ならば、儂を殺してみろ…！」

右足をあげて四股を踏むような動作をすると、床が揺れ始めてスターク達は尻餅をついてしまう。

バギーはその無防備な状態を狙って大剣でスタークを斬りつけた。床が壊れて彼はそのまま下のフロアへと落下していった。

「そんな…スターク！」

「これでまずは一人。次はもう一人の反逆者を消すまでだ。」

一歩ずつ戦意を失いかけているビアンカの元へと歩み寄る。このままでは本当に負けてしまう、アレンまでもがそう思っていた矢先のことだった。

先程スタークが落下した穴から神々しい紅い光が発生した。同時に何かとてつもなく重々しい魔力で満ち溢れていた。これはまさか……！！！！

「ふん……………魔人が現れたか。」

穴から現れたのは黒みのある紅い尾や角を生やした男だった。しかしそれは紛れもなくスタークである。右手をかざして前方に押した時、バギーの体は宙に舞い吹き飛ばされた。

「……………」

「ふはははは！！！！実に愉快だ！！よかろう……儂の手で今度こそ葬ってくれるわ！！！」

MENACE ?

バギーの魔力も跳ね上がり、舞台は二人の激戦区となった。こうなれば誰も手を出すことは出来ない。ビアンカにはアレンと待機する以外にすべきことはなかった。

「信じるのよ……スタークを。」

「……………ああ……………!!」

スタークは人差し指をバギーに向け、そこから魔力による光線を発生させる。目にも止まらない速さで彼の肩を貫いた。

一瞬怯んだ時、スタークは紅く輝く剣を手にして渾身の一撃を与えた。今となつては完全に彼が優勢である。これが魔人解放なのか……!!

「……解せぬ!!何故……………儂が押されているのだああ!!」

「……………」

スタークは深く息を吸い出し、尋常ではない雄叫びを揚げる。いつもの彼ではなく戦いに飢えている獣のようにも見える。まさか……今のスタークは人格を失い暴走しているのか!?

「……………誰かいないのか!? 助太刀する者はおらぬのか!?!」

バギーはかるうじて動ける体を起こして辺りに助けを呼びかける。すると空間が割れてその中から現れたのはキースだった。

キースは上司であるバギーを助けようと手を差し延べる。その時、もう一人この場に現れた。それは傷だらけのアルフレッド・トルネードだった。

「ダメだ!! 逃げる!」

情に流された貴様らも同罪だ。故に消さなければならぬ。」

キースは剣を持って傷だらけのアルフレッドへと近寄る。それを阻止したのは魔人となったスタークだった。

MENACE ?

スタークがキースの前に立ち塞がった時、キースは思わず身構える。彼といえどさすがに魔人を相手にするのは分が悪いのだろうか。

「魔人……か。悪いが、俺は現世で解放することを禁じられている。故に今ここで貴様と剣を交わすことは出来ない。だが、それでも……貴様では俺には勝てない。永劫にな……」

すると会場に人間の形をした複数の悪魔が現れた。キースを迎えにきたようだ。そしてそのまま彼は何も言わずにこの場を去っていった。

ふと外を見ると、少しずつ太陽が昇っていた。こうして、悪夢のよくな長い一夜は明けたのだった……

夜明けと同時にスタークの体は徐々に元の姿へと戻っていった。そして行き場を失ったアルフレッドはアレン達の元へと駆け寄る。

「アレン君…だっけ？君はどうしてあの時からずっとスタークにくっついているんだい？」

竜巻でスタークを襲った時、僕は君に逃げると警告したにも関わらずあの場から去ろうとはしなかったね…？」

「僕は…マリアを倒す最後の手段として、それまでスタークと…そしてビアンカの戦いを見届けることを決意したんだ。」

僕は…仲間なんだ！」

仲間…そんな些細な言葉がアルフレッドの心に強く訴えかけた。思えば、なにが仲間で、なにが信じられるものなんだろうか…彼はふと心の中で思慮に耽っていた。

そして、彼はついに答えを出した。これから歩む道を決めたのである。

「ちよいとばかり…僕も一緒に行っちゃまずいかな？その戦いにはさ。

僕は…仲間だったはずのフィリアの幼い命を奪ったキースを許しはしない…。」

「いーんじゃない？アルフレッドは悪い人なんかじゃないわよ。」

ピアンカは直ぐさま彼を連れていくことに賛成した。たしかに、彼は根からの悪人ではないようだ。心強い仲間となるにちがいない。しかし、問題は彼だ…

「まだ…俺とあなたの戦いは決着ついてねえ。だが…とりあえず後回しにしておいてやるよ。組織を潰したい気持ちは同じだろうしな。

ついてこいよ、どこまでも。」

スタークはそう言って窓から壊滅したハーレン街を見下ろした。これ以上…被害を広げるわけにはいかない。一刻も早くマリアを止め

なければ、世界は終焉を迎える。

たった今…アレン・クロニクル、スターク・オーウェン、ピアンカ・アンデリカ、アルフレッド・トルネードの長きにわたる世界の運命をかけた戦いが始まった。終わりはまだまだ先である。

MENACE ? (後書き)

これで、とりあえず区切りが良いので第1章完結とさせていただきます。

後書きを書かせていただくのは今回が初めてです。これと言って書きたいことはないのですが…ひとつ言いたいことを。

なんとかアクセス数1000件突破いたしました！

これも読者の皆さんのおかげです。

これからも頑張って更新し続けますが、よろしければ感想やレビューなどを願います(^^)

無論文章力がないのは重々承知してます(; ;)

それでも、アイデアが浮かぶ限り書きたいなと思ってます。

これからの作品をより良いものにするため、ご協力お願いします(^^)

それでは、第2章を引き続きお楽しみください…

WAKING! ! ! ! (前書き)

あれから彼らはもぬけの殻と化したフィリップス・シャンデリアを跡にしてスタークが住み着いていた古い家へと向かって睡眠をとることにした。

つかの間の休息、そして決意の朝がきたのだった…。

WAKING!!!!!!

昨夜の疲れもあり誰もが熟睡していた中で最初に目覚めたのはアレ
ンだった。彼起きると体をつんと伸ばしてすぐさま洗面所へと向か
った。

ふと外に出てみても顔見知りどころか誰一人として通りを歩いてい
ない。昨日の悪夢のような出来事が悪夢のままであれば良いのにと
何度願ったことだろうか。しかし、朝は来てしまった。彼の心に癒
えない傷を負わせて……

部屋の方から足音が聞こえた。誰か起きたようだった。その正体は
寝癖のついたままのアルフレッドだった。

「どうしたんだい？こんな早くに。」

と欠伸混じりに彼は言った。

「僕は……この街を……守れなかった。ただ傍観しているだけしか
出来なかつたんだ……!!」

その時の僕の声は誰が聞いても震えていた。それは恐怖、情けなさ、自分の無力さに対する怒り故だった。アルフレッドは頭を掻きながら隣り合わせに座り込んだ。

「…なら、君も強くなりたくないか？」

彼は真つすぐな眼差しで僕を見つめた。その発言は決して気休めではなく、悪魔に対抗出来る力を欲するかどうかという質問だった。一瞬言葉が出てこなかったが、僕はもう決心していた。

もう、誰の足手まといになりたくない、と。

「なら…決まりだね。いつまでコソコソしてんのさ？」

すると部屋からスタークとピアノ力が現れた。どうやら僕の答えを待ち望んでいたようだ。

そしてスタークは昨夜僕に託した剣を手にし地面に刺して

「その言葉、本気なら剣を抜いてみる。その手で、その力で。」

と言った。もはや迷いはない、恐れなどない！にいつと笑って高らかに決意を示して剣を抜いた。

僕は…強くなりたい！！

STERN DISCIPLINE

若干まだ残っていた眠気が覚めて意識がすっかりしたあと、アレックス達は誰もいない街路を歩き、とある広場へと向かった。

大きな噴水のあるこの広場はかつて多くの人通りでたいそう賑わっていた。今となっては、いくつかの小鳥が集まり巣を作り住み着いているくらい閑静な場所だ。ここに来たのにはすっかりした理由がある。

「よし、ここならいいだろう。」

「スターク、僕らはここで今から何をやるんだ??」

「お前に魔力を持たせる修業をするんだ。これから先、俺らは異界へと向かうことになるだろう。その時、魔力を持たざる者は通れないんだよ。」

「そのために、ここで修業をやるんだ。」

突如、広場に鋼のような重みのあるの扉が出現した。中は別の空間にリンクしていて、そこで三日間スタークとアレンは滞在するのだ。

しかし、この扉の形態を維持するには魔力とのリンクを続ける必要がある。そこで、その役割はビアンカとアルフレッドが務めることになった。

「さて、準備はいいか？止めるなら、今のうちだ。」

「……………始めてくれ。」

彼の眼差しには力強さが宿っていた。今更スタークはそんな心配をしたことを自ら悔いた。

ゆっくりと扉が開いていく…。後戻りはもう出来ない。いや、することなんかないんだ！

空間は何の変哲のない小さな小部屋にすぎなかった。

「つまらないか？」

スタークが指を鳴らすと小部屋が一気に広々とした砂漠へと変わった。しかし不思議なことに、全く熱くはないのだ。

「さて、早速始めるかー！」

「何をするの？」

するとスタークは何枚かコインを取り出した。上へ投げると、それらは砂漠の奥へとそれぞれ拡散していった。

「いいか？今日はこれから俺とゲームをやってもらう。なあに、簡単だ。もう察しているだろうが、さっきのコインを探すゲームだ。」

なんて無茶苦茶なことを言っているのか。こんな無限のように広がる場所の中からあんなちっぽけなコインを探すなんて。しかし彼は発言を訂正しようとはせず話を進める。

「いいか？実は、あのコインには魔力が込められているんだよ。だから、あれから発する魔力を感知して見つけるんだ。」

制限時間は10時間。ハンデとして、俺は今から9時間後に始める。そうしないと、お前は勝てないからな。」

魔力を察知すること…それが最初の訓練だった。そして開始と同時にアレンはとりあえず行動に移った。彼の頭には、開始した時に言い残したスタークという言葉が再生されていた。

初めて魔力を察知するには…精神を研ぎ澄まし、自分がコインになった気持ちになれ。

類は友を呼ぶ…ってな。まあ、ガンバレ。

……いいかげんな奴だ。

STERN DISCIPLINE ?

アレンはひたすら辺りを散策したり、目的地もなく走り回るが一向にコインが見つかる様子はない。

あまりにも疲れたため、限りなく広がる砂漠の地面に仰向けになって大の字となる。まがい物の太陽のせいで汗が額から滴り落ちる。

もうどれくらい時間がたったのか…それだけが気掛かりになりかけていた。

「只今、3時間経過致しました。」

「ふうん…そつか……………え??」

誰…? 赤縁の眼鏡をかけた背丈がとても低い女の子がいた。

「私は今回貴方の修行をサポートする案内人、リースと申します。」

スターク様の命により、本日は貴方に時間経過を伝える役割を務めさせていただきます。」

「そっか…よろしく！」

「よろしくお願いします。」

彼女は深々と頭を下げる。なんか堅苦しい子だけど…僕があれこれ言うこともない。

また再び起き上がり辺りを散策する。しかしいつまでもこのままだと絶対にコインなんか見つからない。

大変疑わしいけれど…あいつの言ったことを試してみるか…??

その場で立ち止まり、僕は…コインだ。コイン以外の何者でもない！と心の中で何度も唱え続ける。

それを数分間続けてみたが、全く変化はみられない。

「あの…」

リースがおそるおそる何か尋ねてきた。

「……………何をしていたらっしゃるのですか？はっ…またスターク様は…」

……………どうやらアレはデマだったようだ。あいつ……これが終わった
ら一発殴りたい気分だ。

では、どうしたらいいのか？しかし彼女いわく、スタークのアドバ
イスは全くの嘘ではないらしい。

「どづいづことだい？」

「もし貴方の背後に誰かがいたら、気配を感じるでしょう？それと
同じように、魔力を持つ者は魔力の気配を感じることが出来るので
す。」

貴方のその剣：それは昔スターク様がお使いになっていた物です。
まだ少しだけ魔力が残っているようですね…
そして、それを持っていたことで貴方は微少なながらも魔力を感じられるはずです。

ここは一度、心を研ぎ澄ましてみても、コインの魔力を探してみてもいかがでしょうか？」

STERN DISCIPLINE ?

それからまた時間が流れ、とうとう太陽が沈もうとしていた。まだ時間はあるものの、彼はまだ一枚も見つけてはいない。

アランは砂漠の中でたまたま発見した木々の日陰で座り込んでいた。コインの魔力を感じるために…

隣りではリースが立ち続けていたが、彼女は全く言葉を発することはなかった。

いつの間にかアレンはザアツと風によって動く木々の音すら聞いていなかった。もう彼の集中力はすべてコインへと向いていた。ここから西の方角、大きな岩の側……

………感じた……！！！！

「リリース！こつちだ！」

疲れを忘れ、西へ西へと突き抜けていく。すると、ぼんやりと感じた大きな岩があった。

そしてその近くを調べてみた。するとそこに金ぴかに輝いたコインが落ちていた。

ようやく三枚あるうちの一枚を手に入れることが出来た。喜んでばかりではいられない。リリースに時間を尋ねると、残りはあと2時間、つまりスタークが動き出すまであと残り1時間。モタモタしている時間なんかない。

外の世界では、ビアンカが魔力を使って扉を維持していた。彼女はマリアの組織に所属していた頃から他に比べて魔力の維持を得意としていた。

「まあ僕はそういうの苦手なんだけどなあ」

「あんたも手伝いなさいよね!!」

「わかってるって。どれ、ちよいとやってみようかな。」

皆それぞれが役割を果たすことに専念していた。そして、アレンの訓練はさらに過酷さを増すこととなる。

STERN DISCIPLINE ?

残るところ後1時間。その間に二枚目のコインの在り方を探ることが出来た。そして、その在り方である断崖のふもとへとやってきた。辺りを探してみたが、魔力を感じるが見つけれなかった。どこか岩々の下のような取れない場所に落ちたのだろうか。

すると、前方からスタークが歩んできた。そしてその手はコインをにぎりしめていた。彼は行動に移って早々コインの在り方を突き止めたのである。拡散させた時に自分すらその場所を知らないのにも関わらず。

「あとは一枚だな。さあて、どこかねえ。」

実はお互いにもう場所に気づいていた。ここからそう遠くはないオアシスの泉の中である。しかし、そこには罫が仕掛けられていた。

「アレン、もう場所はわかってるんだろ？なら、取ってきな。ただ

し、取れるもんならな。」

何かたくらんでいるのか。いや、そうではない。気掛かりなままそのオアシスの方角へと走り出す。しかし、奇妙なことに一向に辿り着ける様子ではない。

そして、アレンは気づいたのだった。塵気楼という自然が生み出したトラップにかかっていることに……！無数に広がるオアシスが彼を惑わせる。

「……………これは……！……どうすればいいんだ。」

「……………大丈夫です。本物は、一つだけなのですから。」

リースはそういうと、時計を気にし始めた。おそらく残された時間はもうほとんどないのだろう。

本物は一つだけ……どんなに酷似した物でも、見極めればそれに気づけるのだ。アレンは全神経を研ぎ澄ませてみた。

緊張感が込み上げる中で、そして数多くある中で彼が選んだのは北の奥にあるオアシスだった。

そして、その泉の中に金色にきらめくコインが沈んでいた。拾い上げた時、リースの時計のアラームが鳴り響いた。

「……おめでとございます。アレン様の勝利です。」

一気に疲れが込み上げてきて、僕はそのまま意識を失った。気づいた時には砂漠は消え、最初の殺風景な部屋へと戻っていた。どうやら、今日の訓練は終わったようだ。

外の世界ではアルフレッドが交代して、一方ビアンカは疲労を回復するために仮眠をとっていた。人間の世界では、星が降る穏やかな夜を迎えていた…。

STERN DISCIPLINE ?

昨夜は夕食や入浴など最低限の生活を済ませた後に、いつの間にか眠りについてしまっていた。

そして朝を迎えて、何か目の前に違和感を覚えた。嫌な予感がしてゆっくりとまぶたを開けてみた。するとそこには吐息がかかる距離にリースがいた。

「どわぁあぁっ！…！」

「おはようございます、アレン様。」

「な、なな……なにしようとしてたんだよ…？」

「なーに変な妄想してやがるんだ？ひゃっはっはっはっはっ！…！」

寝間着のままスタークが起きてきて早々赤面のアレンをからかった。

やはりこいつは人を小ばかにする癖があるのか。呆れて眠気もあったという間に覚めてしまった。

「さーて。今日も修行をやるか。」

「またコイン探し!?!」

「いや、今日は昨日の応用といったところだろうな。」

そういつて指を軽快に鳴らすと、部屋が薄暗い森へと続く入り口と変化した。この森の奥にはアレンへの試練がいくつか仕掛けられている。そして全て制覇した時に出口へと繋がる道が現れるという。

「心配するな。また今日もリースが同行していくからな。迷った時は彼女に尋ねてみるといい。だが、いつまでも助けがあると思うなよ。」

戦場ではいつ何が起きるか予測がつかない。さあ、生き延びて帰っ

ていいよ。」

そういい残してスタークはその場から去っていった。意を決して森へと踏み入れた。すると早速二手に分かれた道が待ち構えていた。

これはまた魔力を探るパターンである。少しずつ慣れたため、昨日よりも早く感知出来る。

そしてさらに奥へと進むと、突如三つの黒い球体が姿を現した。近寄ってみると、それらはとても小さな悪魔となった。

最初の関門、それは悪魔（実際よりも少し弱い）との戦闘だった！！

STERN DISCIPLINE ?

悪魔達は高々と叫び声を揚げて襲い掛かる。もちろんアレンを殺すつもりである。一体の悪魔が尖った爪を向けて攻撃を仕掛けたが、危なっかしいステップながらもなんとか回避出来た。

魔力の流れを掴めるようになってから体の動きも少しずつ変わっていた。彼が反射的に繰り出した蹴りは想像以上の力だった。蹴り飛ばされた悪魔は大木にたたき付けられてダメージを受けた。あの夜初めて悪魔に会った時の彼ではないのだ。

ダメージを受け続けて少しずつ悪魔の動きが鈍ったところをアレンは剣で大きな一撃を与えた。すると悪魔達は黒い砂へと還った。この勝利は彼にとって大きな糧となっただろう。

それからさらに深部へと進んでいく。しばらくして、彼らは無数のつたが絡み付いた壁が道を塞いでいるのを発見した。邪魔なそれを切り落とそうと試みたが、切れた瞬間につたが伸び出してしまふ。

しばらくの間その行動ばかり繰り返したが通れる様子ではない。？困り果てていたが、再び始めようとした時に魔力の関係を意識してみる。やはりこの修行の根本は魔力を使うことである。

「……………そうか！わかったぞ！！」

魔力のこもったつたを切るために…魔力をこめて一撃を与えたらどうなるのか…？やってみる価値はあるだろう。直ぐさま体勢を立て直し、彼は剣に集中力を向ける。すると剣は白い輝きを放ち出した。そのままつたを切り落してみると、それは再生することなく壁は崩壊した。

（この人…尋常でない早さで力を付けている…。まさかスターク様はアレン様を偶然マリアを倒す手段として選んだのではなく…必然的にそうなるつもりだったのでしょ…？）

リースの直感は的中していた。スタークにはわかっていたのである、アレン・クロニクルには素質があるということに。

そして、アレン達は最深部に到着し、最後の関門に直面した。一歩踏み入れた時、彼の周囲に掃除機の形態をした魔力を吸い取る機械が現れた。

「アレン様、これが本日の最後の訓練でございます。三分間これによる吸収に耐えてください。魔力の維持力向上のためです、ではご健闘を願います。」

COMING TO A HEAD

凄まじい吸収によって魔力がぶれる。しかし、必死に抵抗している
と三分過ぎるのはあつという間のことに感じられた。時間を過ぎた
途端、機械の容量が満たされて故障した。アレンの持つあまりの量
の魔力を吸いきれなかったのである。

実のところ、リースは彼はこの試練には手こずると思っていた。何
故なら、一発で達成した者は今だかつてアレンを含めて二人だけだ
からだ。そしてその一人は…他ならぬスターク・オーウェンだった。

二人の魔力はどことなく似ている…彼女は二日間アレンを観察して
いてそう感じたのだった。

森林のさらに奥から光がさしてきた。紛れも無く出口に繋がってい
る。向かおうとした時、背後から無数のつたがものすごいスピード
で追いかけてきていた。

後ろを振り返る暇なく彼らは走り込んだ。つまずきそうになっても
ひたすら走り、そしてようやく森林から脱出出来た。
そこにはスタークが腕を組んで待ちくたびれていた。

「よう、やっと戻ってきたか。」

「……ただいま。」

アレンは初日の時から今までの間で急激に魔力をつけ戦闘出来るほどにまで強くなった。それは誰が見ても一目瞭然と言えよう。

しかし、彼はさらに強くなってマリアの組織に対抗出来るようにならなくてはならない。彼はマリアという全ての根源を断つ最後の兵器となるのだから……

「こちらリンセイ。ええ、あと数時間といったところでしょうよ。反逆者達の居場所にね……!!」

少しずつ、また新たな影が迫っていた。現世に滞在していたのはビアンカとアルフレッドである…。しかも彼らは魔力を著しく消耗しているのだ…

しかし、彼らはこれから最大の危機が迫ることをまだ知らない…。

COMING TO A HEAD ?

こうして異次元の中での最後の朝を迎えた。外の世界は雨や雪が降ったりするが、こっちはいつまでも同じ気温であり、天気など存在しない。まだこんな調子に慣れずにいた。

部屋の中心に集まり、スタークの指の合図と同時に周囲が変化した。ただ、今回は背景は変わらずに部屋の広さなどが変わり、大きな柱が林立している空間となった。殺風景であることは相変わらずだ。

「今日は実戦だ。お前はこれから戦闘を行う。そして、そのあいては…」

昨日戦った悪魔のようなやつが相手だろうか。緊迫感が高まりつつあったが、実際は意外なものだった。

身構えるアレンの目の前に立ったのは、長い黒髪をゴムでまとめ、白く輝いた刀身の剣を手にしたリースだった。まさか彼女と戦うことになるとは夢にも思わなかっただろう。

「アレン様、本日は修行の為…私も本気で挑みます。」

ですから、貴方も本気でかかってきて下さい。」

その時の彼女の目は覚悟を決めたものだった。死ぬか生きるか…互いにどちらかの結末をたどることになるだろう。

アレンは様子見を兼ねて彼女との距離を空けた。しかし、その手段は何も意味なかった。彼女は剣を振りかざして迫ってきた。

素早く避けた時、剣の先を向けてそこから白い光線を発した。それはアレンの腕をかすった。もしあれが胸等を貫いていたらと考えるだけで恐怖を覚えた。

「……………まだですよ。 シャイリアス 聖煌剣……………」

そう唱え、彼女は剣を上へとかざす。するとまばゆい光が視界を遮った。次に瞳に映った時、それはさらに鋭利で荘厳さを増した剣と変化した。

柱に向けて一振りすると、それに亀裂が入った。それに凄まじい魔力を帯びていた…！！

「いってきますよ…アレン様…！」

「…。」

COMING TO A HEAD ?

異界に存在する者は皆多かれ少なかれ魔力を持っている。そして、それらはそれぞれの属性に分類されることで能力を発揮出来るのだ。

例えばビアンカの火属性…アルフレッドの風属性以外に水、雷、自然、闇、光…そしてスタークの魔人など例外が存在するのだ。

それぞれの属性が特性を持ち…さらにその所有者次第で能力も変わる。リースの聖煌剣は、魔力を一気に放出させることで莫大なダメージを与えられるものである。

アレンは剣を構えながらも彼女の攻撃を避けたり剣で競り合えばかりだ。決して自ら攻撃をしようとはしない。

いや、正確には仕掛けられないのだ。彼女の剣はアレンのものよりも長いため、むやみやたらに近づいたら返り討ちにあってしまう。今は機会を伺ってみるしかない。

「はっ……はっ……」

「アレン様…逃げてばかりではいけません。攻撃なさって下さい。こんなふうに。」

彼女はまた再び魔力を一気に高め、そして剣先からそれを放出させた。回避しようと試みたが…駄目だ…間に合わない！！

外の世界は今日はいにくの雨だった。冷たい雨が麻酔のようにピアンカの集中力や感覚を奪う。一方アルフレッドは誰もいない街に出向いて食料の調達に励んでいて、その帰り道のことだった。なんと長身の男が歩いていた。まさか人間の生き残りがいたとは…

「もしもし、何してるんだい？」

彼は俯いた男の顔を覗き込んでみた。その男はどうかやら怪我をしているようだ。眼帯からはみ出ている傷が痛々しい。避難している最中に負ったのだらうか。

「ああ…すみません。私はこの辺の者ではありません。ただ行く宛てもなくさまよっていたのです。よろしければご一緒させてくれませんか…？」

よく見ると痩せこけていたのがわかる。それから仕方なくその男を連れていくことにした。

扉の前に着いた途端に突然どこからともなく魔力の気配がした。今ここを襲撃されたら大変な事態を招きかねない…！！

浮浪していた男に避難するよう注意をしようとしたが、同時にこの魔力は男のものであるとわかったのだった。

「残念ながらあなたたちはまんまと罠にかかったのですよ。このリオンセイによってね…！」

「くそっ……！！僕達の始末するために派遣されたんだね？」

「ええ…そして、ピアンカさんが守っているその扉…どうも怪しいですわえ……」

早々と気づかれてしまった。アルフレッドだけでなく、もしピアンカまでもやられてしまったら、扉が消滅してアレンやスタークが閉じ込められるという最悪なこととなってしまふ。

ピアンカが動けない以上アルフレッドがなんとしても死守しなければならぬ……！！

COMING TO A HEAD ?

リースによる一撃が目前に迫り、もはや命拾いという結果で終わらないと諦めた。しかしながら、不思議なことに神はアレンを見捨てなかった。絶対に直撃したはずなのに…壁が崩壊しながらも自分の身体は無傷だった。

「あれ…??どうして僕は……」

「………まだお分かり頂けませんか？」

彼女が一体何をほのめかしているのかが理解出来ない…それはただ今命拾いしたことと関係があるのか？

そういえば、さっき聖煌剣の魔力放出に腕が当たった時も痛みが皆無だったと思い出した。もしかしたら、彼女の攻撃は受けないのだろうか。

………一か八か、試してみよう。

リースが再び剣をぐつと掴み攻め込む。互いの距離が少しずつゼロとなっていく。そしてアレンの腹部に剣が刺さりそうになった瞬間に彼は剣を手放した。聖煌剣は容赦無く彼を貫いた……！！！！

やっぱりそうだ……痛みもなければ血すら出ていない。そう、これが最後の試練……恐れを消し去ること。そして、同時に彼の力を上げる修行となる。

「よく気がつきましたね……もしかしたら、貴方はわかっていたのでありませんか？この聖煌剣は……貴方の真の力なのですよ。」

知っていたさ。なぜなら、剣が体に当たる度に温かさがあったからだ。誰の物でもない……僕の……

僕の魂の温かさが…そこにはあったんだ。

さあ……現世に戻りなさい。そして、強く生きなさい。貴方は一人じゃない……！！

通常ならば初見とはいえ、こんな魔力しか持たない者に押されるはずがない。しかし、アルフレッド達は異次元への扉を長時間維持していたため、魔力を相当消費している。今の彼らは…通常の5分の1の力しか発揮出来ない。

リンセイの武器は二本の小刀であり、魔力が上がると刀身が鋸のような形へと変形する。

リンセイはボロボロのアルフレッドを容赦無く鋸で肩に斬りかかる。

なす術もなく彼はその場で倒れ込む。鮮血の臭いが周囲へと広がっていく。

そして身動きが出来ないビアンカへと近づいていく。

「待ちなよ…まだ僕は死んでないさ…」

「おやおや…おとなしく死んでいればよかったものを…それでは、これで終わりにしてさしあげましょう！…！」

鋸が振り下ろされる。しかし、その刃が当たったのは白い剣…そして、魔力が飛躍的に跳ね上がりリンセイは勢いを失い一旦退いた。目の前を見ると、赤髪の男と人間の少年が立っていた。いつ現れたのかわからなかった…！！

「……………誰ですか、あなたは…？」

「アレン・クロニクル。お前を倒す男だ!!!」

COMING TO A HEAD ?

「アレン…アレン…アレン…おや？そんな名前私は存じませんなあ。戦力外は引っ込んでいただけます？」

「やってみるか？こいつと。」

スタークはにやりと笑いそう言う。それは自信の表れと言えよう。たしかに、修行を終えた彼の魔力は飛躍的に上がっている。それは明白であったが、それだけではない。

アレンが手にしていたのは、従来の剣ではなく、シャイリアス 正真正銘聖煌剣だった！！

「面白い！！あなたから先に始末させていただきますよ！！」

鋸を両手にリンセイは笑みを浮かべながら迫る。ところが彼の一撃はアレンの剣で受け流され、そしてその瞬間に生まれたわずかな隙を突かれて逆にダメージを与えられてしまった。

しかも、それだけでは終わらずにアレンは何度か斬り続ける。リンセイは魔力を解放していたため、それでダメージを軽減していたが、深刻な傷を負わせられた。

もはや、力の差は歴然たるものだった。

「がはあ……!!な、なぜ私が……に、人間ごときに……!!!?」

「人間ごとき?………笑わせるなよ、お前はその人間に負けるんだよ。」

怒りをあらわにしたリンセイは最大限の力の解放を試みた。すると二本の鋸が合体して巨大な刃を持った鋸となった。

「ははははっ!!!!しねええええ!!!!!!」

辺りの空気が張り詰める。息苦しささえ感じた。それは、アレンの魔力がさらに、またさらに上がったからである。

彼は剣先をリンセイに向ける。そして、聖煌剣を解放するため、叫んだ！

聖煌剣：解放！！

シャイリアス・レイ！！

リースのように……彼の剣から神々しい白い輝きが放たれた。その場にいた皆の視界が一瞬眩んだ。良好になり始めた時にはもう決着はついていた。

アレンの初陣は見事な結果となったが、反動が彼の体を襲いそのまま意識を失った。

「……………はっ、あいつ……変わった力を手に入れたようだな。」

あれほどの魔力の攻撃を受ければただでは済まない。たしかに、リンセイは戦闘不能となった。しかし、死んではいけない。その代わりに、魔力をほぼ完全に喪失していた。命を奪うことはしたくない…彼の想いが表れた能力である。

「お…覚えていなさい…！！私はまたあなたたちの前に現れ…そして…殺す！！」

彼はそう言い残して現世から異界の扉を開き、この場から去っていった。

全滅の危機を迎えたが、なんとか免れた。しかし、それは他ならぬただの人間だったアレンの活躍があったからである。

緊迫感から脱した彼らはひとまずもう一夜この世界で過ごすことにした。

そして、スタークからひとつ提案が持ち出された…。

COMING TO A HEAD ?

「よし、わかったか？お前たち。」

要するに、スタークの話は次の通りである。数時間前、彼らは今日も現世でスタークの住み着いていた小屋で一夜を明かすことに決めた。

そして、彼らはこれからの行く先を考えていたところだった…。

無論、これから倒すべき者達、マリアは常に現世にいるわけではない。むしろスタークを始末するために現世に出向いてくるのである。裏切り者は相当の処罰を受ける…これはどこでも同じルールなのである。

裏切り者………。スタークもその一人である。彼には…同僚だったビアンカやアルフレッドですら知らないベールに包まれた過去があった…。

「ふう…懐かしい過去だな。まあそんなことはいいや。」

いいか、やはりこのまま現世にいても組織の元には行けやしない。」

「ということは…スターク、やっぱりあたし達は……」

「ああ、異界に行く。今横でのびてるこいつも、魔力を手に入れたことだしな。」

先程リンセイが逃亡する際に開いた異界の扉…それは開いてから三日間は跡が残ってしまう。つまりはもう一度開くことで異界に繋がるのである。

「よし、わかったか？お前たち。」

皆の頑なな決意は変わることはない。おそらく、いや絶対にアレンもそつにちがいない。

なぜなら、戦つべき敵がいるから。倒すべき敵がいるから。

救つべき世界があるから…!!!!

「はあはあ…なんだあの人間は…!?!」

リンセイは辛うじて異界の何処かに存在するマリアの組織…またの名をエデンの元へと帰還する最中だった。

彼はアレンとの戦いを後にして大きなダメージを受けていた。その為救助を求めてに来たが、道中にて人影を発見した。

それは林立する枯れ木の上に座って景色を眺めていた。その正体を知ると、一瞬の間に木から降りて彼は肩をたたかれた。

「リンセイ君やな？君…何のこのこと帰ってきてんねん。理由、聞きたるか？」

「……………あ……………ああ……………」

リンセイは恐怖のあまり微動すらままならない。蛇の如く絡みつくその冷たい手…彼はエデンに所属している者だが、上位階級だったバギーと対等である。

薄い緑色の髪…そして独特な口調故に周囲でも毛嫌いする者がいるらしい。しかもそれだけではない。

「ないんか？ほな…死んで詫びてくれ。」

目を大きく開き、地面から木々の根が出てきてリンセイの心臓をピンポイントで貫いた。

そして吹き出た血液は木々に吸収され栄養として蓄えられた。もちろんこの木はただの木ではなく、魔力によって血肉に飢えた魔物へと変貌を遂げている。

「…また派手にやってるのか。」

「おやあ、テセラヤないか。何や？君も気になるんか？」

「馬鹿、俺はモーファ様の命を受けた。人間を引き連れた反逆者達がこの世界へと戻ってくるとな。」

「ほな…行こか。ちよいとお遊びや。」

COMING TO A HEAD…!!

SHUDDER WITH FEAR

早朝、晴れ渡る空、旅立ちには最適な天気である。相変わらず眠気は残っているけれど、今日ばかりはいつもよりマシだった。

起き上がると、もうそこには誰もいなかった。皆広場に行ってしまったのだろうか。

気掛かりのまま街路を歩く。ふと思えば、もうしばらくはこの道を歩くことはないのだろう。最悪、二度と帰れないかもしれない。それでも、道を歩き続けた。

案の定、広場に集まっていた。覚悟を決めて、そしてスタークが異界への扉を開いた。

恐る恐る中へと入ると、そこは淀んだ青色の管の中にいるようだった。いまにも崩れ落ちそうなほど脆い一本道の上を駆けていく。

もうある程度進んでると感じたが、まだまだ出口までの道のりは長い。不変の景色に飽きてきた頃に、退屈凌ぎにはなりそうな訪問者達が現れた。

「悪魔か…へっ……俺が一網打じ………」

「落ち着け！こんなところで戦ったら道が崩壊してしまう！」

剣に手を回したスタークをアルフレッドがとり押さえる。たしかにここでの戦闘は危険だ。しかし、戦わないとなると強攻策しか残されていない。

「逃げるー！！」

久々の戦いに飢えたスタークを無理矢理アルフレッドが抱き抱えて一目散に前方へと向かう。

しかしながら、悪魔達は現世にいる間は力が弱まるが、今いる場所では全力を出し切れる。そのため試みた逃走も敢え無く失敗した。

一体の悪魔が手にした鎌の一撃によって道が崩れ落ちていく！！さらにスピードを上げるが、崩壊する速度には敵わない。

出口が見えてきた。幸いアレンとビアンカは前方にいた。ここを出ればエデンへと辿り着けたのだが、その前に悪魔が立ち塞がり、続く道を破壊された。

そして、彼らは前方にいたアレン、ビアンカと遅れをとっていたスタートク、アルフレッドがそれぞれ二つの方向に落下していった。つた。

こうして彼らははぐれてしまい、エデンから遠く離れた場所に飛ばされてしまった……

「いてて……あれ、ビアンカ？」

「アレン？ そっちは無事？？」

「ああ、なんとかね…。…っ!」

二人とも異変に気づいた。複数の魔力がこちらに近づいていることに…

そしてそれらはすぐに彼らと出くわした。魔力の持ち主達は皆白いローブを身にまとった集団だった。ローブの右肩には、「平和軍」という刺繍が施されていた。

「あんだ達…!」

中央にいた眼鏡をかけたリーダーらしき男が前に出て目を凝らす。それから一笑して言い放った。

「ほう、懐かしい顔だ。だが、今となつては貴様はエデンの者…故に我々は

ピアンカ・アンデリカ、貴様を正義の為、世界の為に捕獲する。」

SHUDDER WITH FEAR ?

ビアンカが前に言っていた平和軍…それにかつて彼女の恋人が所属していたらしい。なるほどたしかに以前の彼女は軍からは同情される立場だったかもしれない。だが、今になっては彼女はエデンに所属していた者…つまりは完全な敵なのだ。

リーダー格の男が腰に下げていた剣の柄に手を添えると、周囲の者達も皆それぞれ武器を手にし始めた。

この状況をどう回避するか…そのために頭脳をフル回転させるが…どうしても一つしか思い浮かばない。無論、いわゆる強攻策というやつだ。

しかし、ビアンカの様子からしてそれは不可能かもしれない。何故なら、彼女は俯いたまま何も言葉を発しないからだ。

何も…できないのかよ…!!

「小僧、失せたまえ。これは貴様には関係のないこと…妨害するようならば、それなりの罰を受けなければならぬ。」

「ビアンカは…今はもうあんなやつらの仲間じゃない。僕の仲間だ
」！
」

「そうか…皆は手出ししなくていい。私が始末してみせよう。」

ゆっくりと、その腰から取り出したのは先端が蒼い剣だった。アレ
ンのものに比べて細い刀身が特徴的である。

ここはなんとしても勝たなければならない。ビアンカを助けだすん
だ。

聖煌剣を握りしめ、戦いに挑もうとした時にビアンカが精一杯の声
で警告を促した。

「逃げて…！アレン…！その人は…！！」

「どこを見ている？貴様の瞳に映すのは彼女ではない。己の弱さ、
そして驕りを省みるがいい。」

男は剣先から蒼い雷を放つ。それはとても回避出来るような速度ではない。対抗出来ずに雷はそのまま身体に直撃した。

これは…いったいなんだ??まるで力が違う…。昨日戦ったリンセイというやつとは比べ物にならない。

危険が迫っていたが、手にたしかに脈を打つ鼓動が伝わった。それは…聖煌剣と僕が共鳴しているようだった。

そうだ、僕はこんなところで負けられない…ピアノ力を奪還するんだ!!

「うおおおおっ!!!!」

「ほう…まだ戦うつもりか。仕方ない…なるべく殺したくはなかった。」

SHUDDER WITH FEAR ?

全身全霊の力で戦わずして勝利は有り得ない。現世で習得したこと
…それを最大限に引き出すんだ！！

これは命を捨てる行為ではない。失われそうな命を救う行為だ！！

「……………先程よりも魔力を上げたようだな。しかし、それでは私には敵わない。」

「試してみようか……………」

引きずっていた白い刀身を上げて、真っ正面から斬り掛かる。男はそれを難無く避けて、アレンの丸腰の背中を斬る。しかし、完全にアレンを甘んじていた男は逆に背中から血を流した。

(……………なるほど、全魔力を脚に上乘せして瞬間的に移動したか。だが、まだ私は……………)

「油断したね。」

アレンはわずかの隙を逃さない。懐に侵入し、そのまま聖煌剣で大きく振り一撃を与えた。

反射的に腕を出した時、腕に縫い付けていたネームがちぎれた。

「よろしくね、グロリア・ジルフォート!!」

「小僧……!!許さん!!果てる……我々の能力によって……!!」

グロリアは両腕を大きく開き、無限に広がっている天を仰ぐ。その瞬間に魔力が今までの何倍にも跳ね上がったのを感じた……!!

だがしかし、それを阻止したのは周囲にいた仲間らだった。全身を取り押さえられたグロリアは落ち着きを取り戻して元に戻った。

その時、首筋に電気のように痛みが走った。平和軍の一人が不意打ちをしたようだった。そこで僕の意識は途絶えた。ここで死ぬわけにはいかないのに……!!

「グロリア…何もそこまでしなくても良いでしょう。その者は我々の敵ではないのですから。」

彼を宥めたのは第三席のミランダ・ルーラー。アレンを気絶させたのは彼女の能力によるものだった。

しかし、グロリアの表情からして腑に落ちていない様子である。そこで彼女はある条件を提唱することにした。

ピアンカだけでなくアレンも連行すること。そうすることでその他に情報を持っていたらそれを聞き出す…もしかしたら、エデンについて何か知っているかもしれない。

「いいだろう…行くぞ…ここに長居する理由はないのだ。」

皆の肩辺りが一斉に白く輝きだす。そこから天使のような羽が生え出し、そのまま天空を舞ってその場を去ったのだった…。

右も左もわからない世界でアレンはただ振り回されていた。そして、平和軍との戦いで彼の實力はまだまだ不足していると露呈されたのだった…。

BLOODY WOODLAND

一方、スタークからも離れ離れになった後無事に異界に辿りついた。

そこは青々とした草原が広がっていた。この辺りから西へとずっと進むと大きな街がある。とりあえずその街を目指すことにした…

「スターク。」

アルフレッドがいつものようにけだるそうな口調でスタークにふと話しかけた。

「なんだい？」

「僕はこの辺の地理には疎いんだが…」

「はあ！？てめえの方がこっちの世界に長くいただろ？俺が現世へと姿をくらましてからどれだけ経ったと思ってんだ。」

「…それもそうだ。仕方ないな、あれを使っしかない。」

するとアルフレッドはおもむろに自身の槍であるルドゼラ（技名と同じ）を取り出し、天に矛先を向けた。

しばらくして、彼は街の方向を感じとったようだ。人の気配、魔力、そして風から場所を感知出来るのだ。

…どんだけスゲー能力なんだよ。スタークは心中でそう思っていた。

到着した街は、「ベツフェル」。剣や銃を売る商人や魔力を持ち合わせた旅人達が多く集う場所である。

街の至る所に微々たる程度だが魔力の気配を感じる。だが、何故かおかしい。それはスターク達にはすぐに気づくことだ。

「…まあ、いいか。」

スタークはとくに気にもせず街中を散策した。大広間へと続く道を抜けた途端、男の怒鳴り声が響いた。その方向を見ると、盗賊らしき男が複数いた。こんな昼間からたかりか…どうやら治安は悪いらしい。

そいつらのカモは、どちらかと言えば薄い緑色の髪をした男だった。

BLOODY WOODLAND ?

「おらあ！！てめえ！！さっさと金を出しな！今なら許してやるよ
」！

「おーこわつ。僕そないな物騒な事は嫌や。」

「なら力付くで奪うまでよっ！！」

一人の盗賊がナイフを取り出して無防備なカモに襲い掛かる。だが、盗賊は瞬く間にズパンという軽快な音と共に倒れた。どうやら何らかの武器によって殴られたらしい。

だが、その男が手にしていたのは単なる木の棒だった。

「な、なんだあ！！あいつは！？」

「はて、来ないんか？そんなら僕の番や……」

一瞬、男の表情が一変した。それだけではない。さっきまでは微々たる魔力だったが、飛躍的に上がったのである。

そして、彼は呟くように唱えた。

起きろ……食事や……

突然、手にしていた木の棒が妖しい輝きを放つ。それを地面に当てると、そこから複数の根っこのようなものが現れた。

再び地中に潜って、そして盗賊達のところで出てきて腹部を貫通させた。

ズルツと引き抜かれると同時に夥しい量の血液が流れた。

「う……うああああ!!」

悍ましい光景を目の当たりにした一人が逃走をはかった。しかしながら、男はにんまりと笑い、盗賊の四肢を木々が捕らえた。

だんだん力が入っていき、そのままゆっくりと四方に広がっていく。盗賊の断末魔は虚しく響き、ぶちっという音が聞こえるほど綺麗に体が裂ける。まるで大昔に現世で行われた処刑のような行為をしてなお男は笑っていた。

「……………なんや……もう終いか。」

男がこちらへと迫る。アルフレッドはスタークの肩を掴み、直ぐさま撤退を促した。こんな街中で戦うわけにはいかない。

しかし、アルフレッドは突如吹き出した黒い風に包まれた。目を開けると、そこは先程歩いてきた草原だった。

「アルフレッド・トルネード。貴様の相手はこの俺だ。」

「テセラか…まずいことになったもんだ。」

「…誰だ、てめえは。」

「あー会つのは初めてやったなあ。ほな自己紹介と行こか。」

僕は…セル・ネルジュ。エデンNO.7や。」

B L O O D Y W O O D L A N D ?

エデンには主力から微力含めて全てを合わせると5000もの戦力が存在する。

そして、それらは総帥を除く1〜10、11〜20、21〜30で上からファースト、セカンド、サードとクラスが分けられている。

（ただしそれ以下にはクラスは存在せず、数は意味をなさない。）

サードとセカンドのあいだの差より、ファーストとセカンドの差はるかに離れている。つまり、ファーストクラスの者はエデンの中でも真のエリートというわけである。

ちなみにフィリップス・シャンテリアで戦ったバギーはNo.10
…そして、この男は……！！

「セル・ネルジュ、No.7や。」

「やるのか…?」

「当たり前や…僕はそのためにはるばるエデンからやってきたんや

「からなあ。」

「それは不運だな、てめえはここで俺にやられるんだよ。」

「知ってますよー？君が昔エデンにおったのを…そして、No.2
だったことも。」

No.2…懐かしい肩書だ。昔から、俺は兄貴を越えたことは一度
たりともなかった。

だが、こいつはNo.7にすぎない。ただ、おそらく昔の数字など
はあまり役に立たないだろう。

「さて…もう始まってるで。」

先程盗賊達を殺したあの複数の根っこがまた出現した。体を貫こう
としたが、地中から現れた刹那、剣によってぶった切られた。

こんなにも容易に攻略されるとは想定していなかったらしく、セル

は拍手をして軽い音を立てた。

だが、それ以外には変わった様子はない。すると地面から大きなつぼみが現れる。

「色々だすなあ。もっと何かないのか？ん？」

「うーん、まだ足らんか。ほな、血いもらいますわ。」

セルは盗賊の死体を掴んで、つぼみに血液を垂らす。白いつぼみがかだんだん赤く染まっていく…同時に花が大きく開いた。

「さあて…おはよう、邪桃花。」

甘い臭いが漂ってきた。それをスタークの嗅覚が察知した時、セルの罠が始まったのだった。

「邪魔くせえ！！！」

スタークは剣を振り回して突撃する。向かっている途中、背中に違和感を感じた。それは先端の尖った杭だった。状況に気づいた時、彼の背中を貫通した。

「かはっ……………!!」

不意の攻撃にスタークはそのまま片膝をついてしまったが、ふとそれは幻であることに気が付く。

上を見上げると、セルが木の棒を手にして立っていた……………!!

B L O O D Y W O O D L A N D ?

高速で振り下ろされる魔力をまとった木の棒は刃にも匹敵する武器となるのだ。

スタークを斬って吹き出た血液が棒に付着した。それを邪桃花に垂らす。するとつぼみはまたさらに大きな花を咲かせた…！！

「…さあ、暴れる。」

ここからが、セルの力の発揮である。邪桃花は前に傾いて魔力の塊を発射した。

ただひたすら攻撃を受けたが、ひとつ気づいたことがある。さっき背中を貫かれた感触がしたにも関わらず、そこからは血どころか穴すら開いていなかった。

どういふことだ…！？

ほら…うしろ取ってるで…

脳に直接語りかけてくる奴のカンに障る声…どこを振り向いてもやつはいいい。

今度はふと足元を見る、自分の膝下が無くなっていることに気づく。そのまま崩れ落ちる肉体、待ち受ける最期は…

「うおおおおっ！！！」

セルには断末魔にしか聞こえないこの叫びは、彼の抵抗だった。魔力が急激に上がり、彼の中で何かが解けた。頑丈に絡んだ鎖をちぎったかのように、再びスタークは立ち上がる。

そう、全ては幻影にすぎない。

邪桃花の香りによる催眠術だったのだ。この手の術にはリスクがある。花を媒体にして自分の魔力を流すことで発動するため、術が失敗すると魔力が暴発する。その影響は、本人にもおおいに及ぶのだ。

「怖いなあ…そないな魔力を持ってたなんて。」

「血、けっこう出てるぜ？お花に与えたらどうだい？」

「……せやな……」

セルはそのまま意識を失って倒れた。だが息はまだあるようだった。とどめをさそうとしたけれども、エデンの部下達が現れ、彼の体を回収して姿を消していった。

しかし、現実を受けたダメージは想像以上に深刻だったため、スタークはその場で倒れてしまう。

今回ファーストクラスの者を倒したが、スタークですらここまで苦戦した。今後の戦いは更なる強敵が彼らの前に立ちはだかるのだった。

ALLY OR ENEMY?

アルフレッドはかつてエデンに所属していた時はN.O.14でセカンドクラスだった。つまり、エデンの中では上位の実力者である。

しかし、このテセラはN.O.15。彼はアルフレッドのポストを狙っている。しかも彼らは同じ風属性の技を扱うため、さらにテセラは意欲的になったのだろう。

彼の能力は風を使うが、それは黒い竜巻のようであり、威力だけはアルフレッドを上回るのだ。テセラは次々と竜巻を発生させてアルフレッドに襲い掛かる。

一瞬でも気を緩めたら竜巻に巻き込まれてしまうのは目に見えている。彼は竜巻、そしてテセラに目を配る。

「どうした！逃げてばかりでは俺を倒せないぞー！」

「んじゃ、遠慮なく……」

距離を空け、彼はルドゼラを取り出した。しかし、それは相手の思
うつぼだったらしい。

矛先から風を起こした時に、テセラは左手に装着していた何かをか
ざす。

「ハツハツハ！！かかったな、アルフレッド・トルネード！！

こいつは……………から頂いた新型の魔力吸収装置だ！！」

……………肝心な名前が風のせいによく聞き取れなかった……。だが、大
方見当はつく。ファーストクラスを動かすとは…モーフアも必死の
ようだな。

「……………さあ！！これで貴様の最大の武器は使えなくなった！！

おとなしく殺されて、俺にNo.14の座を渡してもらおう！！」

「…そんな階級、もう僕にはいらな過ぎ。くねてやるよ。」

「……………貴様のそういうところが気に入くわないのだ…！！俺が貴様を殺すことのでこそ……………」

「あー…もういいって。どつちやら、僕は君の素質を買い被っていたよつだね。」

ALLY OR ENEMY? ?

テセラは彼の落ち着きぶりが気にいらなような様子で、徐々に怒りをおぼえる。たしかに、この危機に瀕している相手がその様子では動揺するだろう。

痺れを切らしたテセラは大きな風を巻き起こし、それをアルフレッドに目掛けて飛ばした。

普段のアルフレッドならば対抗できる魔力だが、その術は意味をなさないので……！！！！

「僕の能力で長けているのは破壊力じゃない、速度だ。

僕は風属性の中では最速……君は黒い風のせいで視界が悪かっただろうけども、僕は君がああ巨大な竜巻を起こした瞬間に……

「から空きな君の背後を取っている。」

直ぐさま振り返ったテセラだが、反撃を繰り出す間髪もなくルドセラで直接刺した。

抵抗力すらなくなったテセラは瞳を閉じて草原に倒れ込む。アルフレッドは彼の脈が打っていないことを確かめ、その場を去ろうとした。

「ブラボー！！いやーたいしたもんだ！」

だみ声じみた喋り方をした髭男と長い赤髪の体格の良い男、眼鏡をかけたボサボサの髪の女性が突如現れた。

「君たちは…？」

「私達はブラボーナ戦いっぷりをただみただけなの…さっ！

ユーはエデンの人間だったそうじゃないか？ええ？」

「それなら、僕に何の用だい？殺しにでも来たのか？」

「ノンノン…私達はユーにイイコトを教えにきたん…だっ！」

男はしきりに髭を触りだし、間を置いて話を続けた。

「ユーの仲間が相打ちになって倒れた…。」

「なんだって…？スタークが…！？」

「そう…さっ！へい、リサちゃん、出してやってくれ！」

すると眼鏡の女性が頭を掻いて呟く。

「私を倉庫みたいに言わないでくださる…？」

細い手を前にかざし、何かを掴むように動かした。すると彼女は紙を破るみたいに目の前を裂いて箆^{たんす}笥のような物を取り出した。

その引き出しを開けると、またさらに四次元のような空間が続いている。そこに手を伸ばし、彼女は服の裾らしき布を引っ張る。

それは、紛れも無くスタークだった。

「安心なさい。この空間に居る間は治癒が行われるのです。」

よくスタークの体を見ると、まだ傷が多少あるが、はっきりした外傷はなかった。

「君たちは一体…？」

「…エデンでもなければ平和軍でもない。

私達は…魔人旅団なの…だっ！」

ALLY OR ENEMY? ?

魔人旅団：もはやエデン、平和軍に続く第三勢力として台頭している組織である。

こいつらは決して安心して仲間と呼べる存在ではない。もしかしたら味方を装って奇襲を仕掛けてくるかもしれない。

「ノンノン、私達はユーたちと戦うつもりはない…さっ！

もしユーたちがまだエデンに所属していたなら…容赦なく殺していたのだがね。」

テセラとの戦いの後にこんな奴らと戦うわけにはいかない…。命拾いをしたもんだ。そして、彼は咳払いをし改まる。

「失礼した、私の名前はドルコン・モンテリオ…魔人旅団第四魔人なの…さっ！」

だらしなくかけて眼鏡を正し、長い黒髪をボリボリと掻いて口を開

いた。

「私はリサ・アミューサと申します。魔人旅団第八魔人ですわ。」
ずばらな見た目と口調が完全に合わない…変わった人物が多いが、最後の男性はきつと大丈夫だろう。

「ああん あたしは魔人旅団第七魔人バンテラ・クリングス…よろしくねん」

ああ…もう嫌だ。魔人旅団の話はエデンにいた頃から聞いていたが…なんだか拍子抜けだ。

だが、はっきりしていることはこいつらの持つ魔力はとてつもなく強大であることだ…。

「さて、実はまだ話があるの…さっ」

「なんだい？」

「実は私達は現世にいた頃からユーたちを偵察していたのだが……ユーたちの仲間……まだいるのだろうか？彼らの命が危ない。」

「……………どうして……？」

「……………誘拐というやつになるのだろうか。おそらく平和軍辺りがくさいと思うのだがね。」

まさかアレン達が……！？それが本当の話ならば、こんな場所にいつまでもいる時間はないだろう。

するとスタークがゆっくりと起き上がった。

「たしかにそうかもしれない。あの時離れ離れになってからどんな

危険にさらされるかもわからねえ…

おい、てめえらはどうして俺らを救う？」

するとドルコンは再び髭を触りだし、一閃空けて小さい笑う。

「私達も平和軍に用があつてねえ…もう平和軍の本部に直通している空間を仕掛けてあるんだが…

どうだい？ユーたちも一緒に来るかい？」

GET RID OF DESPAIR

ふと目が覚めると、黒い鉄格子が自由を束縛していた。

どうやら自分は気を失った後に連行されたらしい…ということはこのは……

監視が着ていた衣服の肩を見ると、やはり平和軍のエンブレムの刺繍が施されていた。

ビアンカ…？ビアンカはどこに行ったんだ！？まさかもつ処刑されたのだろうか…

おもむろに鉄格子を掴んで監視に呼びかける。監視は警備用の槍を手にして構える。

「おとなしくしているんだ！！」

死刑囚ビアンカ・アンデリカの執行は二日後の早朝に行われる。これは最終決定故、助けだそうなどと企まないように。」

また…大切な人を失うのか…

あの日の夜のように…また…！！

精一杯、叫んだ。とにかく、叫んだ。

怒り、悲しみ、無力さ、そして大きな絶望が一斉に襲い掛かる。

それでも…涙を流すわけにはいかない。彼女に会わせる顔がないじゃないか…。

まだ諦めてはいけない。

「僕は……」

「何だ？」

「僕は…お前達が掲げる正義とは違うかもしれない。

それでも、僕はピアンカを救う、そして旅の戦いを続けるんだ。

それが…僕の正義だッ！！」

アレンの言葉と共に、手元が白く輝いた。視界が戻ると、手には聖煌剣があった。

それを一振りすると、鉄格子が切断される。監視はこの光景に思わず怖じけづく。

槍で攻撃を仕掛けたが、アレンの力を前にして呆気なく敗れた。

「待っててね…ビアンカ…！」

「ヒアアアア…！…ウイイイイ…！…アアアアア…！…！」

「うるせえ…！」

スタークは騒がしいドルコンを蹴飛ばす。警備に発見されたらどうするつもりだ……？

「まあ…警備は甘くはねえか…！」

ぞろぞろと警備兵が現れる。下手な悪魔よりも実力はあるだろう。

それでも、彼らは盗賊を始末するわけではない。魔人達を相手にするのである…

「さて…暴れるか！」

GET RID OF DESPAIR ?

牢を脱出した後、アレンは曲がり角を次々と進んでいく。建物の構造がわからない以上、先に構造を把握しなければならぬ。

さらに進んだ時、奥から警備兵が出現した。しかしながら、その中に一人だけ異なる制服を身にまとっていた。

そういえばあいつは…グロリア達の中にいた兵士だった。あの時は顔しか見なかったけれど、無論高い魔力を持っているだろう。

「やあ、脱獄かい？」

「僕はやらなきゃいけないことがあるんだ。そこをどけよ！」

「あはは！そう言われて退く兵士がどこにいるんだい？」

僕の名前はリーガル・ヴァイオレット。僕は…炎使いだ！！」

魔力が向上し、複数の火玉が浮遊しだす。あれはいつたい…??

身構えて攻撃に対し回避を狙う。するとリーガルは火玉を勢いよく飛ばした。

それは回避できない大きさでも速度でもない。しかしながら、火玉は軌道を変えてアレンに攻撃を与えた。

「ぐあ…!!?」

「あはは！僕的能力…焰車はこの火玉を自在に操ることが出来るんだ。」

「くっ…ずいぶんと親切なんだね。」

「ああ…僕的能力を知ったところで勝機はないからね。ハンディというやつね。」

リーガルは高らかに笑い声を揚げて余裕の態度を見せる。たしかに、彼の魔力、そして戦闘能力は高いようだ。

しかし、彼は自分の力に溺れているらしい。つまり、彼の弱点はそこにある。弱点について、聖煌剣の攻撃を与えれば……勝てる！！

策略を練ったけれども、リーガルは隙を一切作らない戦い方である。どうやら平和軍の上位兵は相当戦闘慣れしてあるようである。

火玉はさらに大きさを増していき、とても手に負えられない……！！
どうする……！？

アレンが次の一手に迷っていた時、異次元で三日間行った修行をふと想起した。

リースの戦いを経て、戦闘のパターンを覚えただはずだ。あの時、彼女は様々な戦い方を駆使していた。その中には、リーガルのやり方に似たものもあった。

それなら……回避策はこれだ……！！

「あはは！まだやるのかい？おとなしく牢にいれば安全なのにさ！
！」

「まだやるよ。あんたを倒せるからね。」

GET RID OF DESPAIR ?

たった今僕は豪語したのだろうか。いや、事実を宣言しただけのことだ。

それからリーガルの攻撃はいつこうに命中することなく、彼は聖煌剣の一撃によってダメージを負う。そう、彼の戦い方はリースが訓練で仕掛けてきたパターンと酷似していたのだ。

そうとなれば対処法は単純。相手が火玉を全て使い果たした瞬間を狙う。しかし相手は戦い慣れしているため、このような策は一度きりしか使えない。

「くっ……!!」

「どうやら、火玉を使いすぎて魔力をひどく消耗したようだね……」

「甘んじるな!!君は僕の最大級の力で葬ってやろう!!」

リーガルは全身全霊の力の解放を試みる。すると、彼はグロリアと同じように白い翼を生やし、神々しい輝きを放った。

「これは僕ら平和軍の上位兵のみに与えられた能力…浄魂……！！
一時的に、僕らは一体化するんだ…

神の如く煌めく、ハル様と…！！」

リーガルと目が合った瞬間に悟った。今までの彼ではない…！！魔力が桁違いに跳ね上がっていたのである。

先程の火玉はさらに威力を増し、強力な武器と化した。反撃を仕掛けるタイミングすら与えられず一方的に攻撃を受ける。

尽力し、やっと剣を持てるのが精一杯である。そんな状態で何が出るのか???

「……………僕は…死ぬわけにはいかない！」

聖煌剣：解放！！

シャイリアス・レイ！！

聖煌剣を天井に向け、魔力の光線を放つ。それによって天井は崩れ、戦場は瓦礫に埋もれてしまった。

リーガルは反射的に退いたため、アレンの行方を見失ってしまった。一方彼はどうかその場を離れたが、人目に付かない陰のところで倒れてしまった。

「くっ…ハル様…いらっしやいますか？僕の声が届いてますか？」

リーガルは通信するように瞑想し、ハルという人物に語りかける。

「……………リーガル…。早急に確保する必要はない。それより、侵入者達
がきたようだ。遊んであげてね……………」

この声の人物こそが、ハルである。彼はどついう者が不明だが平和軍の中でも上位にいるようだ。

リーガルはすぐさま場所を離れた。

アレンは息すらままならぬ状態だったが、何者かが彼の元に訪れた。

GET RID OF DESPAIR ?

あれから僕はリーガルから逃れたが、気を失ってしまったんだ。

体が冷たい…そろそろ死ぬのだろうか。それも仕方ないことだ。あれだけ傷を負ったのだから。

目を開け、辺りを見渡した。ここは地獄か天国か…まあまだ殺していないから地獄には行ってないと信じたい。

しかし、そこは暗い密室だった。またここは牢獄なのだろうか。

それなら、何故僕の傷は癒えているのだろう。何もかもが唐突すぎて理解出来ない。

すると奥に誰かがいた。敵か…!?

「ああ…!!まだ動くなつてばさ!」

そこには揉み上げの濃い小柄な男がいた。何者なのだろう……

彼は上位兵の物とは異なるものの、たしかに平和軍の制服を着ていた。

「おいらは平和軍救命リカバリー・チームの第九席、マリオ・ボンテル…よろしくな。」

「どうしてそんなやつが僕を助けたんだ？」

「あいな、それは……」

マリオが話し出した途端に外が騒がしくなる。兵士が巡回しているのだろう。

「あんたはここで待ってるよな！」

マリオは部屋を出て、兵士達を呼びかけた。無論兵士は脱獄したアレンの居場所を尋ねる。

彼はこれは罫だったのだと考えた。マリオは密室に連れ込んだ自分を通報するにちがいない、そう思っていた。

「脱獄した人ですか…？ああ、そういえば先程下のフロアが騒がしかったですよ。」

「ご苦労。皆、下へ向かうぞ！」

兵士達はそのまま下の階へと駆けていった。どうやら助かったらしい…

本当にこいつは僕を助けたのか…！？

「……………君は？」

「おいらは…あなたにピアンカさんを助けてほしいんだよ。」

スターク一行は、あれから二手に分かれる行動を決断した。
スタークとドルコン、アルフレッドとリサ、バンテラである。

244

スタークらは内部に侵入したあと、奥へと進むドアのところへとたどり着いた。

入口には内部の構造が記されていて、奥に無数の部屋がありその中心には総監室があるらしい。

そこを目指すのが最優先だろう。おそらくその周辺、あるいは奥にピアンカ達がいるかもしれないからだ。

「おい、ドルゴン！こいつらずっと出てきやがるぞ！なんとかならねえのか！？」

「ふーむ…私もマイソードで戦っているのだがねえ…」

兵士の軍団をなんとか一掃した後、さらに深部に繋がっているドアの前に新たな刺客が現れた。

それは、先程アレンと戦って傷を負ったリーガルだった。

「あはは…ここから先は立入禁止さ！！」

「ちっ…面倒なやつが出てきたか。」

スタークが剣を構えたが、それをドルゴンが押さえた。相変わらず立派な髭を触りながらである。

「ユーは下がっていたまえ。ここは私の力を見てもらおうか。」

GET RID OF DESPAIR ?

ドルコンは得意げな表情で前に出る。

ちなみに平和軍の上位兵はそんな容易に倒せる力ではない。かつてスタークがエデンに所属していた頃、彼の同志は平和軍との戦いよって戦死したものだ。

…まあ、ここは小手調べといくかな。

俺も魔人旅団の戦いを見るのは久しぶりだ。

「僕ら平和軍に背く者は皆制裁を与えなければならない…君達もこの炎に焼かれて逝くんぞだ！」

リーガルは傷を癒すためにリカバリー・チームから支給された回復薬を投与し、万全なる状態で挑む。

「なに、ユーは炎を使うのだな!？」

「あはは！ただの炎じゃないよ…高速で突撃する火玉さ！」

リーガルは周囲に何十という数の火玉を作り上げる。

火玉一つ一つに魔力が込められているせいか辺りは重々しい。

それらは放たれ、容赦無く次々とドルコンを襲った。さすがの彼でも無傷ではすまないか…？

「さてと…まずは一人。次は君だ………」

なにつ……！？」

爆発による煙から現れたのは魔人と化したドルコンである。無傷どころか能力を発揮させて火玉を消滅させていた。

「ふむ…これがユーの炎かね？温いな…」

ドルコンには武器がないが能力、単純に言えばリーガルと同じ炎を使う。

しかし、彼の炎は火玉ではない。かつて地獄の果てで行われていた、骨の髄まで焼き尽くす火刑のごとく相手を死に追いやる。

故に滅業焰めつじやうえん…と呼ばれる。

リーガルは地獄の業火を前にして逃れることはなかった。

魔人旅団まじんりょだんてのは皆こつも強いのか…??

殺気をむきだしにしていた魔人の時とは違い、もう普段の無性に腹立たしい髭面となっていた。

「まあこんなところか…なっ！」

「はっ…なかなかやるじゃねえか。行くぞ。」

まだわずかに熱気が残ったこの部屋を跡にして、彼らはさらに深部を目指した。

部屋を出てみた。するとそこには何百という兵士達が武器を手にして待ち構えていた。

こんな兵力がよくあるもんだ…。

だけでも、スタークにとっては好都合かもしれない。先へ進むのに退屈しそうにはならないからである。

そして、二人の魔人が存分に暴れていた。

「いっちょド派手にやるかああ！！ヒヤッハーツ！！」

GET RID OF DESPAIR ?

突然傷だらけのアレンを助けた救命リカバリー・チーム所属のマリオ…

彼はアレンに頼みがあって命を救ったという。それは、死刑囚でありアレン達の仲間であるビアンカ・アンデリカを連れ戻すことだった。

マリオは、かつてのビアンカの恋人だったレオン・レスタークに憧れて平和軍に入隊したという。

彼が入隊して間もなく、例の事件が起こってレオンは魔人旅団によって実質殺され、ビアンカはスターク達の元へとついて行き行方を眩ませた。

しかし、マリオはこう考えた。

レオンが認めていた人ならば…きっと彼女は悪ではない。彼のように、清らかな心を持っているのではないかと。

それならば…彼女を救い出したいと……。

「……おいらは弱いやつだから…あんたに頼んだんだよ。」

「マリオ。」

アレンは彼の名を呼び、手摺りに捕まって立ち上がる。

「…もし君が本当に彼女を助けたいなら、僕と一緒に来てくれないか？」

僕は、君の力を信じているよ。」

信じることは相手を愛することであり、敬意を示すこと。

たとえ嫌いな自分を卑下しても、きっと誰が自分を必要としてくれる時がくる。

そして、今がその時。

「あんだ…名前は？」

「アレン、アレン・クロニクル。人間だよ。」

「ああ、やっぱり…」

あの人と同じ雰囲気…

懐かしいなあ…やっぱり、ヒアンカさんを救えるのは、あの人に似た彼しかないや…。

「よしっ！それじゃあ、行こう！」

「…ああ。」

彼らは部屋を出て、マリオが案内する方向へと進んでいった。

だが、部屋にいたのは二人だけではなかった。

アレンたちが去った後、設備されていた水道の蛇口から自ずと水が溢れ出した。

部屋中が水浸しになった後に拡散していた水が集まり人の形を作り上げていく。

金色の髪をしたそれは裸体の女性となった。

「シルヴァ様、御召し物でございます。」

部下の兵士が部屋に入りシルヴァという女性に制服を差し出す。

「ったく…相変わらず服は窮屈だぜ…」

さて、脱獄犯と裏切り者…いいねえ…」

御馳走を目の前にした獣のように長い舌を出し、彼女は笑う。

A BEAUTIFUL DESTROYER

途次、マリオは内部構造が載った地図を広げる。内心では、何故部屋を出てすぐ見ないのかと思った。

というより、所属兵ですら把握してないのか…

あれからアレン達はスタークらとは異なり兵士になるべく遭わないように突き進んだ。

そのため回復してから力は消耗していない。

「ここからどう進む?」

「えー…っと、左に行くと近道っすね。」

彼の言うとおりに進んでいき、ようやく広々とした部屋に辿り着いた。

油断してはいけない。もしかするとまた兵士が現れるかもしれないから。

前に出ると、突如上から大量の水が目の前に降ってきた。

再び水は集結し、裸のシルヴァが現れた。

「あんたは…?」

「俺様は平和軍上位兵…シルヴァ・アクアリアだ!!」

彼女は完全に男まさりの喋り方であるが、端正なるその顔は立派なものである。

ずっと見ていたら吸い込まれてしまいそうな表情であり……

「アレンツ！シルヴァの顔を見るな！！これは罠だ!!」

マリオの警告で我にかえる。しかしシルヴァが操る高圧水によりアレンは軽々と飲み込まれる。

「おせえんだよ…クソガキ!!」

シルヴァは見ての通り水を操る能力を持ち、さらにもう一つ能力がある。

ウォーター・テンプレーション
水艶：自分と目が合った相手を一時的に催眠状態にさせて行動を封じる能力である。

彼女が放つ凄まじい水圧の攻撃は避けると床にひびが入るほど強力だ。

どう抵抗すればいいのか…？また再び放たれた水を避けようとした時にはもう更なる攻撃が放たれていた。

しまった…!!

思わず反射的に目を閉じた。しかし、前方には厚い盾が仕掛けられていたのである。それはマリオの能力だった。

「てめえ…裏切りが許されると思うなよ…?」

「おいらは…アレンの仲間っす!!」

A BEAUTIFUL DESTROYER ?

マリオは意を決して敵であるはずのアレンを擁護した。

シルヴァを前にして豪語したが、彼の足が震えているのがよくわかる。

「そっかよ……なら、てめえから殺す！」

彼女は再び水を集結させて、大きな水玉を創造した。

それはマリオに襲いかかり、彼はその中に取り込まれる。無論、水の中では呼吸はままならない。

「マリオッ!!」

「どこ見てんだ？」

水を細長く凝固させて、水の剣を作り上げる。

それを手にしたシルヴァは間合いを詰めてアレンに襲いかかる。

強い水圧は鋭利な刃にも匹敵する。反射的に腕をかざしたが、アレンは水の刃によってダメージを受ける。

「ぐっ…!!」

「ひゃはははっ!!!!どうした!？」

「こいつを助けるんじゃないのか!？」

彼女の背後には水玉に閉じ込められたマリオがいる。

だんだん彼の息も苦しくなってくる頃だ。

そしてもがき苦しみ、彼は溺れて気絶してしまった。

「あーあ…死んじまったか？あ？」

怒りのあまり聖煌剣で斬りかかる。魔力を脚に注ぎ、速度を急向上させたがシルヴァは瞬発的に剣で対抗した。

がむしゃらに剣を振って攻撃を繰り返すが、彼女の戦闘能力はやはり高いためそれにも反応している。

「よえーな……やっぱりめえはビアンカどころか、こいつすら救えないんだよー！」

誰も救えない…今の僕では…誰も……

そんな言葉が僕の心に雨のように突き刺さる。

心のどこかで諦めかけたが、僕はビアンカが連れ去られた時を回想した。

その時、僕はどう思ったんだ…？見殺しにすると決めたのか…？

否、僕の答えは違うだろう。強く、心に刻んだろう。思いだせ…強く、もっと強く…！！

ドンツと大きな轟音とともに聖煌剣から白い衝撃波が周囲に広がる。それに思わずシルヴァは吹き飛ばされ、体勢を立て直す。

「てめえ…！！」

A BEAUTIFUL DESTROYER ?

彼女は魔力を高めて反撃を試みたが、すぐに察した。

アレンの様子が明らかにおかしいことに……まるで今まで魔力を制限していたストッパーが解除されたように、彼の力は高まる。

思わず怯むが、形勢が変わったわけではない。

おそらくアレンの変化は一時的な解放にすぎない……このまま攻撃を続ければ、勝てる。

「いくぜっ！！クソガキッ！！」

水の量を増やし彼女は二本目の剣を創造する。

シルヴァはなりふり構わず突撃し、ターゲットの始末を遂行させようとする。

強力な水圧が彼の頭部に直撃する。普通ならば大きなダメージとなる。しかしながら、それは残像のようにふっと姿を消した。

アレンの力が解放され、聖煌剣の能力も変化していた。これは分身を作り出すというトリックではない。

ただ、シルヴァの眼にはアレンの移動速度が認識しきれないだけである。

返してもらおうよ、僕の仲間を。

シルヴァは懐のあたりに焦点を合わせる。すると彼女の喉元には聖煌剣が突き付けられていた。

死…という言葉が彼女の脳裏に焼き付く。いつ殺されても不思議ではない……！！

やむを得ず後ずさりをしてしまった彼女は、恐怖さえ感じてしまい、

戦う意欲を喪失してしまう。

「くそ……」

シルヴァは危機感に煽られてその場から退避していった。それと同じ時に水玉は弾け、マリオは一命を取り留めた。

まさか自分にこんな力が秘められていたとは到底思わなかった。

そう、聖煌剣は使い手の想いに比例して力を解放出来るのである。

それがたとえ憎しみでも狂気でも……

マリオは激しく咳込んだが、しばらくして目を覚ました。

「おかえり、マリオ。」

FAIR SACRIFICE

平和軍の本拠地にいるのは兵士だけではない。内部から発生する魔力の塊が人型に変化して侵入者を排除するのだ。たいていの侵入者ならば太刀打ちできないほど強力なトラップである。

そして、それらは彼らにも襲い掛かる。スターク、ドルコンと分かれたアルフレッド達の前にも立ちほだかる。

だが、ルドゼラを巧みに使いこなすアルフレッドや異次元に直通する柵から機関銃を取り出して応戦するリサ、

その機関銃からは魔力が込められた銃弾を放つ強力な武器である。そして不思議なことに柵は綿のように軽いという。

それだけではない。彼女の身体能力は女性とは思えぬ程異常に高い。やはり魔人旅団の一味だ。

そしてバンテラは魔人解放し、猛る虎のような容姿へと変貌を遂げて、トラップを次々と倒していく。

魔人旅団は皆ここまで強大な力を持っているのだろうか。決して敵には回したくはないが、仲間としては頼もしいかぎりである。

どうにかトラップを一掃した後、彼らは長い一本道に出た。正確に
いえば、連絡橋の役割を果たしているようだった。

さらに反対側から何者かが歩いてきた。アルフレッドらは足を止め、十分に身構える。

どうやら、女性である。だがもちろん制服を着ている以上、安心できる存在ではない。

「皆さんはじめまして。私は、平和軍第三席ミランダ・ルーラーと申します。」

「元エデンNo.14アルフレッド・トルネードだ。こりゃあ強そ
うな人が出てきたもんだ。」

「私は無用な戦いはいたしません。ですから、皆さんがここで退くなら争いは起きないのです。」

微笑たる笑みを浮かべ、意外な交渉を仕掛けてきた。

しかし、気を緩めてはいけない。いつ、どのような攻撃を仕掛けてくるのか予測がつかない。

「悪いけど…こんな場所で引き返すわけにはいかないんだよ。」

「そうですね…では、やむを得ませんね。」

ミランダははめていた手袋を外した。するとある程度離れたこの距離でもたしかに感じ取れるほど強い圧力を受ける。

その場にいた誰もが動きを止めた。そして、彼女がはめていたリングが光りだし、その光は人の形へと変わった。それは先程まで行く手にはだかったトラップだった。ただし、今までのものよりもはっきりとした体つきをしている。

「ゼロ…今こそ戦いの時です。」

「御意……………」

ゼロという名の光の塊は、瞬時にアルフレッドの喉元に手を伸ばし強く絞める。

辛うじて反応は出来たが、回避は間に合わなかった！！

体が軽々と持ち上がったが、バンテラが突進したおかげで吹っ飛ばされた。

あいつはいったい…！？

「彼の名はゼロ…私のパートナーであり、私の魔力を具現化したものなのです。」

FAIR SACRIFICE ?

突如姿を見せたゼロ、それはミランダ・ルーラーの魔力と同等の力を具現化したものである。彼女と対峙した時にアルフレッドらが感じたただならぬ魔力：それを想起するだけでも戦慄が走る。

バンテラが幾度強靱なる打撃を与えてもゼロは怯む様子を見せることはない。

「んもう！なんて硬いのかしらん！！」

「それじゃ、今度はこいつでいくかね！！」

そして、それだけがゼロの本領ではない。アルフレッドがルドゼロから強力な竜巻を起こし、ゼロの目前まで迫った時、彼は片手を竜巻に添えた。

次の光景を目の当たりにした彼らは絶句した。この世界の一体何処に竜巻を片手で消す者がいるのか、と。

しかし、ゼロは竜巻を消し去りその刹那、油断していたアルフレッドは背後を取られ至近距離から魔力の光線を受けた。

風力により宙に浮いていた彼はそのまま墜落し、連絡橋に落ちる。そして、ゼロはアルフレッドに近寄る。

「私の本領は単なる戦闘力ではない。属性を持った攻撃を吸収し…そして吐き出す。」

真上から凄まじい風が倒れた彼の体を容赦無く潰す…！！

「ふん…他愛もない。」

「誰がだい？」

竜巻が彼の目前に近づいた時、それはまるで意思を持っているかのように動き、ゼロの体を吹き飛ばした。

「自分の風を、操れないわけないだろう。」

「……………ほづ。」

FAIR SACRIFICE ?

アルフレッドの能力により辛うじて危機を逃れたが、所詮その場凌ぎにしかない。形勢は何も変わっていない。

ミランダはさらに魔力を放出させ、同時にゼロの力も増していく。間合いを縮め、鋼のような拳がバンテラの腹部に打撃を与える。

魔人と化していた彼でさえ大きなダメージを受けたようだ。万が一自分が受けていたら死んでいたかもしれない…アルフレッドはそう考え畏怖していた。

幾度ダメージを与えてもゼロは怯むそぶりすら見せない。

一つ、また一つ抗う術を潰されていく。

「さあ…その魂をもって罪を償うが良い。」

だが、一人だけとあることに疑問を抱いていた者がいた。

ボサボサした黒髪をぼりぼりと掻き、さらには欠伸をしていた。

眼鏡の位置を正し、彼女はつぶやいた。

「……見えた。」

リサのその一声に誰もが反応した。この子はまた何を言っているんだらうとアルフレッドは内心考えていた。

だが、同志であるバンテラだけは確信していた。彼女の潜在能力に…

「何が見えたというのだ。まさか、勝機とでも言うのか？ならばそれは間違いだ。」

「それでも、視力が異常に低い私の目にさえそれは映っているのです。」

「ならばそれを証明するが良い！！出来るものならばな！！」

ゼロは絶対の自信を持っていたが、主人であるミランダは少なからず警戒していた。

相手は犬猿の仲な魔人旅団…どんな手段を使ってくるか予測がつかない。

しかしながら、それはあまりにも安易な行動のようだった。

アルフレッドやリサがゼロを自分達の方へとおびき出し、バンテラが瞬時に移動してミランダ本人に攻撃を仕掛けた。

無論、そんな単純な攻撃は通用しない。ゼロは主人の元へ駆け付け、攻撃を防いだ。

「ふん…何をするかと思えばこのような…」

すると、突如バンテラの体が煙となり、ゼロに纏わり付く。

これはいつたい…！！

「あたしの…真の能力よん この煙に触れた部分以外の行動を一時的に封じるもの…そして、あなたは最初に触れた右腕以外の動きができないのよ」

FAIR SACRIFICE ?

バンテラの持つ能力によって右腕以外の動きを封じたとはいえ、ゼロの場合おそらく止められるのは数秒間だけ…

次の一手で勝敗が決まるにちがいない。

アルフレッドは尽力し最大限にまで魔力を使い、特大の風の塊を矛先から打ち出した。

「愚かしい…！私にそんな攻撃は通用しない！」

彼は右腕を前に出し、風の塊を再び吸収する。だが、それだけで終わらなかった。

もう一つの強大な魔力の塊がゼロに襲い掛かる。それはリサの持つ銃から放った一撃だった。この追加分により、ゼロは吸収しきれずに大きな深手を負った。

リサの読みは次の通りである。

もし本当に全ての魔力を吸収する能力を持っているならば、たとえ連続的攻撃が繰り返されても回避する必要は皆無だ。

しかし、ゼロはリサが複数の魔力の銃弾を放った時に直ぐさま避けた。その行動を紛らわす為に瞬時に動いて間合いを詰めて相手に危機感を与えたが、リサだけはそのパターンを見逃してはいなかった。

つまり、彼女はこう考えた。

ゼロは、一回の吸収につき一撃しか吸収できないのではないかと。

そして、それは完全に的中していた。ゆっくりとゼロは立ち上がったが、数歩進むと再び倒れ、消滅していった。

「まさか…ゼロが……」

「さあ…あとは君だけだね。どうすんの？」

ミランダが後ずさると、彼女の前に同じ制服を着た刺客が現れた。それはアレンの戦闘から撤退したシルヴァだった。

「帰るぞ……」

「ええ……」

平和軍特有の白い羽を生やし、シルヴァはミランダを背負いその場から去るうとした時、彼女はアルフレッドたちに最後の警告を促した。

ここから先は……平和軍本部の中心部だ。

そこに裏切り者の女がいる。だが、てめえらにはあいつを救えねえ。

我らの主、ハル様がいらっしやるんだからな…

ANTAGONISTIC TWO NIGHTS

アレンとマリオはその後仕掛けられた罠や兵士達を倒しながらさらに奥へと突き進んでいった。

部屋から部屋へと移っていつても景色は何も変わらない。ただ殺風景な空間が続いているだけだ。

だが、それはいつまでも続いてはいなかった。マリオがアレンを呼び止めて地図を床に広げる。

「いまはこの中心部に繋がっている連絡橋の手前です…おいら達平和軍の総帥がいる部屋は…もうすぐそこです。」

「それじゃあ、あの橋を渡った先に……」

ピアンカがいるのか…？

体が無意識に駆け出す。そこにいる奴らを出し抜けばこっちの勝ち

じゃないか…!!

しかし、それを阻む者がいた。白い制服、銀縁の眼鏡をかけた彼は連絡橋の向かいから足音を立てながらゆっくりと歩む。

「あ、ああ…!!」

マリオは彼を見た途端におののき、言葉すら出せない。

この魔力、この威圧感、この緊張感……間違いない…!!

「…グロリア…!!」

「また会ったな…小僧」

ビリビリと伝わってくるこの緊迫…一瞬でも気を抜いたら負けだ…
!!

「…シルヴァから聞いたぞ。彼女に勝ったそうだな。」

「あれは…勝利なんて立派なものじゃない。」

「ふん、謙遜する必要はない。喜ぶがいい。我々平和軍と対等に戦えたことを。」

そして、この私とここで剣を交えたことを悔やむがいい。」

グロリアは細い刀身の剣をゆっくりと抜き、そして魔力を徐々に上げていく。

ほんの少し前の自分ならここで実力の差に落胆し諦めていただろう。

もうここまで来たんだ……どうせなら、自分の底力を信じてみようじゃないか……!!」

「いくよ……!!」

「来い……今度こそ私の手で抹消してやろう!」

ANTAGONISTIC TWO MIGHTS ?

グロリアの実力は自分自身がわかっているはずだが、あれが本領だったとは到底思えない。

もし彼が総帥を除く平和軍の指揮をとっている人物なら、間違いなくまだ奥の手を隠しているだろう。

そして彼は剣を抜き、前のように雷を放つ。それにしても、やけに遅く感じるのは何故だろう。

わざとそうしているのか。いや、そんな回りくどい戦法など取らないだろう。

「ふん…どうやら私の雷を避けるほどの実力をつけたようだな。

ならば、こんな子供騙しをする必要もないか…」

もちろん、その彼の一言は意外だった。

力の差は以前に比べて縮まったならば…勝機はある…!!

グロリアは眼鏡を外し、そして利き手に剣を持ち替える。

強い目力に一瞬押された時、四方から異常な威圧感を感じた。いったいつ、どこから攻撃がくるかわからない…!!

集中しろ…そして、見極めるんだ…!!

軋る剣の音が響き渡る。雷が走っている剣を手にしたままグロリアは数メートルの距離を空ける。

ばかな…あの小僧に今の速度が見切れるはずがない…!!

冷や汗をかき、息が止まりそうなほど周囲の空気が張り詰める。

そして瞬きをした時、アレンは間隔を狭めて聖煌剣で先制して一撃を与えた。

あまりの速さ故、数コマ遅れて彼の体から鮮血が流れた。

状況を理解出来ないままにいるグロリアはもはや辛うじて冷静さを保っていた。

「理解出来ないかい…？僕はここでの戦いを通して、ようやく聖煌剣の真価を見つけたんだ。」

「……………ふっ……………はっはっはっは…!!!!」

彼の高らかな笑い声はその場に響く。

「私の…私の本領がこの程度とみたか！？」

「ならば見せてやろう…我々平和軍の…力を…!!」

ANTAGONISTIC TWO MIGHTS ?

「見せてやるう…我々平和軍の力を…!!」

神々しい白い輝きがグロリアを包み込む。それはアレンにリーガルとの戦闘を彷彿させた。

浄魂…!!平和軍上位兵に与えられた力である…

リーガルはあの時、ハルとかいう人物と一体化すると言い残したはずだ。

すると連絡橋の向かい側にある建物から重々しい魔力がグロリアと共鳴しているのを感じた。

間違いない…あの奥にいるんだ…!!おそらくは平和軍の総帥だろ
う。

「……人間風情が……我々に背いた大罪の重さを思い知るがいい！」

グロリアの姿が消え、そして腹部に違和感を覚える。それは容赦なく貫通した。

現状を把握できないまま自分の体から血液が吹き出る。

その時、アレンは心の中で最悪の結末を悟った。

「死」というワードだけが脳裏に浮かぶ。

まずい……グロリアの声が聞き取れない……視界もぐらついてきた……

いやだ……こんなところで……！！

「ああああ…!!アレンが…!!」

マリオはもはや恐怖心から涙声を発するのがやっとだった。

「貴様も死をもって償うが良い。」

あえて少しずつグロリアは近寄る。

徐々に終わりが迫ろうとした時、彼は異様な気を感じた。しかし、それは何かはわからない。

なんだ…僕は死んだのかよ……

終わりのない暗闇の底へと落ちてゆく体…

そこは紛れも無く死後の世界といえよう。体がゆっくりと沈んでいく。まるで海の中にいるような感触である…

その時、アレンの肩を掴む手が現れた。ふと見てみると、そこにはスタークの作り上げた世界で共に時間を過ごしてきたリースだった。

「…大丈夫です、呼吸も出来ますよ。」

吸ってみると、たしかに呼吸が出来る。いったいここはどうなっているのだろう…

「リース……僕は一体どうし…」

「交代の 때가…来たのですよ、アレン・クロニクル…」

イマイチ内容を理解できない。交代…何をだ!?

「今後は…」

すると何者かがリースの隣りに出現した。

しかも、それは…!!…!!

「俺様がアレン・クロニクルだ…!!」

なにかもが僕に似た…いや、もはやアレン・クロニクルそのもの
だったのだ…

ANTAGONISTIC TWO MIGHTS ?

常識では有り得ないことが不意に起きると普通ならば驚いたり、畏怖するだろう。

死後の世界だから、常識など通用しないのだろうか。仮にそうだと
して、目前に自分自身が現れたら悪魔ですら驚愕するにちがいない。

「お、お前は…!?!?」

「あん…? 俺様はお前だろうか…
まあ、強いていえば…」

お前に潜んでいた戦闘力を具現化した存在だ。」

こいつは元々僕の一部で…それが僕の前に現れたというのか。全く
わけがわからない…。

そして、彼はゆっくりと腰から剣を抜いた。それは…間違いなく聖
煌剣の形をしていた。しかしその刀身は白くなく、漆黒の色を纏っ
ていた。

「てめえは浄魂化したグロリア・ジルフォードによって殺され、そして外の世界ではマリオ・ボンテルが応急処置を試みたが、彼によって阻止された。」

まあ…今から消えるやつには関係のないことだがなあああ…！」

アレンの注意が刀に向いた時には、もうそれは彼の体を一斬りしていた。

無惨にも崩れ落ちていく肉体…それを見下ろすリースとアレン…

「バカが…お前はこんなところで終わるわけにはいかねんだよ。」

これでいいんだろう？リース・クロニクル様。」

「ええ…ありがとう。」

「アレン、俺様が戦いつてもものを見せてやる。」

少しの間だけ、休んでやがれ……」

視界に光が差す。ここが外の世界か。ゆっくりと立ち上がると、グロリアとマリオは思わず驚きを隠しきれなかった。

ああ、そうか。一度死んだやつが起き上がったんだからな。無理もない。

「小僧…何故生きているのだ……!!?」

「目が醒めたぜ…今から見せてやる。一瞬たりとも気を抜くなよ…」

右腕に違和感を感じた。まるでとてつもない重力がかかり、潰されるような威圧感。それに気を取られた途端、腹部を剣が貫いた。

血に染まっていく白い羽、そして自分の結末を悟った。

…なんだ今のは…！！馬鹿な…小僧の魔力によるものなのか…！！？

汗が全身にまわり、そして息を飲んだ。魔力だけでこんなに威圧があるとは…

「いいだろう…次は容赦はせん…！！」

「来いよ...」

ANTAGONISTIC TWO MIGHTS ?

グロリアは剣だけでなく、さらに銃までも兼ね備えていた。それはまばゆい装飾が施されている。

「…装填、スピリット。」

銃口が輝き、そこから巨大な魔力の光線が放たれた。

あまりの勢いによってマリオは後方へと吹き飛ばされる。それほど威力を持つ銃撃がアレンに襲い掛かる。

「ハーツハツハツ！！どうだ！！小僧には理解出来ない威力だろう！！！！」

私の最終兵器スピリットは……そうだな。わかりやすく言えば、君の持つ魔力をゆうに越えた破壊力を持つ銃撃を放つ兵器だ…どうだ！！何とか言いたまえ！！！！」

興奮ぎみのグロリアは羽を駆使して浮上していた。銃撃が容赦なくアレンを襲い、一向に返事が返ることはない。

「ははっ！！これは驚いたなあ！！」

たいしたもんだぜ…。この橋はよ。こんな暴れてるのにも関わらず、壊れやしねえ。十中八九、てめえらの親玉の魔力が何かで守られているんだろうがな。」

するとアレンは袖を払い、立ち上がる。グロリアは呆然としているまみである。

「ば、ばかな…！！何故立ち上がる！？何故…！！」

「何故…？はっ、俺様があんな攻撃でやられると思ってんのか？ずいぶんと気楽な奴だぜ。」

アレンは右手を表に差し出し、指を挑発するかのよう^に動かす。
もう一度試してみる、という意味である。

微々たるもののグロリアは明らかに戦きの念を隠せなかった。

先程までの小僧ではない。あれはまさに…

悪魔だ……！！！！

「来ないのか？なら、これで終わりだ。」

するとアレンは懐から黒い^{シャイリアス}聖煌剣を取り出し、そして先端をかざす。

生命の危機を感じたグロリアは全魔力を羽に集中させることでダメージを軽減しようと試みる。

シャイリアス・レイ

黒い光線が放たれ、そしてグロリアはその攻撃に巻き込まれた。

先程彼の銃撃ですら無傷だったはずの連絡橋に亀裂が入る。

ポロポロになった羽、そして傷だらけの体でグロリアは立ち尽くしていた。

激しくなっていく彼の息切れ、そしてそのまま倒れていき気を失った。

「アレン…?」

マリオが近寄ると、聖煌剣は白い輝きを取り戻して彼は意識を失い倒れた途端、アレンはまた再び立ち上がる。

「……………あれ、ここは…？僕は殺されたはずじゃなかったのか？？」

まだ僅かに残っている魔力に違和感を覚えながらもアレンはグロリアのもとへと駆け寄る。

しばらく様子を見たが生きてはいるものの意識はなかった。

そしてアレンとマリオは連絡橋を渡り、総帥の待つ部屋の前にとどり着いた。

近くに寄る度に押し潰されそうなほど強力な魔力を感じた。

その重々しい扉を開けた奥に、ピアンカは十字架にはりつけられていた。

彼らの足元へ何者かの体が転がる。

それは血まみれになったバンテラの姿だったのである。

そして、アルフレッドやリサも瀕死の状態にまで陥っていた。

いったい何が起きているんだ…！？

THE DIVINE JUVENILE (前書き)

天は怒り

神は沈め

民は従い

少年は生まれた

THE DIVINE JUVENILE

魔人旅団のメンバーが二人、そしてアルフレッドの力が合わさったとしても敵わないなんて…！！

いったい何が…！？

前方を見ると、彼を白い布でまとった謎の少年がいて、その背後にミランダやシルヴァ以外の兵士も待機していた。

そして、彼を見た瞬間に悟った。彼と戦ってはならない…と。

「はあ…はあ…！！」

「もういいでしょう。結末は見えている。」

少年は片手をアルフレッドにかざした。部屋にいた誰もがその魔力を感じた。

今まで感じていた魔力は彼のものだったのだ…！

もはや強大という一言では済まない。ありとあらゆる生命体を超越した存在感を醸し出している。

少年の手から凄まじい雷が放たれる。グロリアの雷とは破壊力が格段に異なる。

それに直撃したアルフレッドはもはや立てず、死にかけていた。

「アルフレッド…！」

「アレン君かい…？申し訳ないなあ…！」

これ以上喋ることで負担がかかり苦しむ姿を見ることは出来ない。

悲しみを堪え、少年と対峙する。どこか冷たく、綺麗な瞳がいつそう不気味である。

「ようこそ、そしてはじめまして…僕が平和軍総帥ハルだ。」

こいつが…平和軍のボス…!!

ひしひしと伝わってくる力、本能が戦いを拒み続ける。

しかし、僕らには使命がある。

ビアンカ…!!

「僕と戦うのか？」

「…守るべき人がいるんだ!!」

「ならば、君の術をひとつひとつ消してあげよう。」

全てをかけた戦いが始まるつとじていた…!!

THE DIVINE JUVENILE ?

圧迫されつつも剣を手にしてハルに攻撃を仕掛ける。接近すると、彼は片手から雷を発した。先程よりも明らかに威力が弱めてあるが、それでも速度は尋常ではない。

ギリギリのタイミングで避けたあと、すかさずもう一度雷を放つ。

ハルは余裕の表情を浮かべていたが、アレンが捨て身の覚悟で聖煌剣で弾き返したことは驚いたようだ。

アレンはその勢いでそのまま剣で一撃与えようと試みた。しかしながら、ハルは球体の透明ガラスのような物で周囲から守られていた。

防御の能力も兼ねているのか……！！

「君、神の持つ能力を知っているかい？」

彼は近づきながらそう言う。油断してはいけない。それと同時に距離を置く。

「まあ……」

人間にはわからないだろうね。

耳元でハルが囁く。手を差し延べると心臓にも届くほどにまで接近していた。

全くわからなかった…瞬時に脳が反応することすらできなかった。

聖煌剣を振り攻撃を仕掛けてみたが、彼は元の場所へと戻っていた。

ダメだ…何が起きているのか…

「教えてあげよう。神の持つ能力とは、

万物を司る能力さ。つまり、こういうことだ。」

こんな事が有り得るのか…？あらゆる属性の中で、二つの属性を持つ能力者なんているのか！？

右手から猛る火炎、左手からはさらに威力を増した雷を放った。それに対抗する術もなくダメージを受けてしまう。

これが魔人旅団を倒した能力なのか…！！

「よくここまで来たね。天国はすぐそこだ。」

ハルが最後の一撃を与えようとした時、それを間一髪で何者かが防いだ。

灼熱を帯びた体、殺気立てた髭男…爆風で乱れる赤い髪、深紅の剣
を持ったそれは間違いなく悪魔だった。

その姿が徐々に人間のようにならなくなっていく。

まだまだ…まだ終わってはいない…!!

「ふう…間に合ったか。ユー…観念しなよ…!!」

「神とやらを冒険しに来た…とても言おうか。返してもらおうぜ、俺
様達のなかまをな。」

THE DIVINE JUVENILE ?

突如現れたのは既に魔人と化したスタークとドルコンであった。背中合わせの二人は瞬時にハルの前後に移動し、強靱なる攻撃を繰り返す。

しかし、彼は微笑むと周囲を囲む魔力の壁が現れそれを阻止する。

「なんて固いんだ…！！ユーの力でなんとかならないのかい？」

「無茶言つな。俺様は策を練ってるんだよ。」

「ほづ…いかにして？」

「知らねえ…来るぞ！」

ハルは再び火、雷それぞれ異なる属性の攻撃を放つ。

しかし、スタークは剣でそれを受け流し、ハルとの距離を縮める。
一撃を与えようと試みた時、足元が光り輝いた。

それは円陣を描き、スタークを包み込んだ。身動きが一切出来なくなった彼の頭上には刃の形をした無数の魔力の塊が浮上していた。

そして、ハルが指を鳴らす音と同時に刃はスタークに襲い掛かる。

まずい…スタークが…！

「くそっ…！！」

体中を貫かれたせいでひざまずくことしか出来ない。

するとハルは背中に背負っていた一本の剣を取り出した。

それは白く輝く…まるでアレンの聖煌剣のようであった。

「これは退魔剣メルセサイナス…その名の通り…邪悪を消し去るための剣だ…」

もはや抗う手段はない。浄化されることしか…

突然、だれかが叫んだ。

それは悲しげに聞こえる…だれだ…？死に際の俺様に何の用だ？

その時、思い出した。これは…ピアンカの声だ…微かにしか聞こえないためはつきりとは認識出来ない。

何か囁いているのか…？

死なないで…。

二本の剣は火花を散らして競り合う。ハルは驚いた様子だった。

まだ抵抗する力が残っていたなんて…！！

弾き返して距離を置いたスタークは大きく息を吸って、体勢を整える。

「ふう…：やっと頭が冴えてきたぜ。

待たせたな。てめえに見せてやるよ…：さらなる魔人の力をな…！！」

THE DIVINE JUVENILE ?

ひしめくような緊張感が背後に待機しているドルコンにも伝わる…。そして、同じ魔人の彼は察していた。スタークが次に繰り出す策を…

つまり、あらゆる物質を眼に映す第一の能力「魔人眼」、己の身動きと引き換えにあらゆる状態変化を解除させる第二の能力：万象還元

そして、第三の能力…

「それはいつたい…」

「…待たせたな。」

さあ、ユーのはどんなものなんだい…？

なんせ…第三能力は…

個々の魂を具現化させた能力なんだから…な…！

その名を「夢現」…。するとスタークの周囲に無数の鋼の鎖が出現する。しかも一つ一つに重々しい魔力が込められている。

そして彼は笑う。魔人は笑い、神の子を冒瀆する。

やれ…神は堕ちた…

全ての鎖がハルの体に襲い掛かる。彼は結界を再び張り対抗するが、まがまがしい鎖はそれを打ち破り肉体の動きを封じる。

「ば…かな…!!」

「終わりだ…死ぬんだよ。てめえは…」

裂

そして、鎖に圧力がかかり、ハルの肉体が引き裂かれる。崩れ落ちてゆく神…哀れなやつだ…。

「誰がだい？」

裂かれた肉体は浮上し、スタークに問い掛ける。こいつは本当に化け物なのか…!?

「くそ…!! 離せ…!!」

平和軍の兵士達が動きだしアレンやドルコンに襲い掛かる。彼らは金色の輪を手にしていた。それはハルの魔力が込められたリングであり、手枷のように装着させることで身動きを封じられる。

「…君は勘違いをしているんだよ。魂が滅びぬ限り……」

徐々に断片的な肉体から手足が創造されていく。そして、ついに完全な状態へと回復したのである。

「…何度でも蘇生するのさ。」

さあ…せっかくだ。君には僕に裁かれていたどころ。

見るがいい…！これが…僕の真の姿だ…！…」

THE DIVINE JUVENILE ?

ハルは全身全霊の魔力を出し切り、浄魂を行う。底無しの威圧感を覚え、そして敗北を悟った。

今度こそ本当に終焉の刻……。誰もが絶望した瞬間に先程までの勢いが若干乱れてつつあった。それはハルの異変が物語っていた。

「な、なんだこれは…!？」

彼の体から魔力が放出され、激しく乱れる。これもスタークの夢現による効果だろうか。しかし、スターク自身も目の光景に驚愕している様子である。

「あいつは俺様の能力じゃねえ…あれは…完全に魔力が暴走してやがる…!」

苦しみの中で、彼の視界に彼の部下が入る。助けを請うことを試みた時、彼の肉体を刃が貫く。

それを手にしていたのは…

「ミ、ミランダ…!!」

涙を目に浮かべながら、彼女は刃を引き抜く。崩れ落ちていくハル、神の玉座から追放された彼はようやく気づいた。

「…ま、まさか……」

「申し訳ございません、ハル様。私は…感センシテしまッタ…!!」

彼女の体はもう既に侵されていた。マリアというウイルスに。

次の瞬間にこの場に駆け付けたグロリアは彼女の靱帯を切ることで動きを封じる。

「すまない…後ほど必ず治そう…」

おのれえ…！！モーファアアツツ！！！！！！」

彼は激昂してエデンの総帥を叫ぶ。

ふいに空間が裂け、その空洞の奥からついにそれが姿を現した。

「久しいのお…平和軍といったか…？」

中世欧州の貴族が所有していたようなドレスを着て、肩から肩までの幅はある扇子を手にして、金色に輝く髪飾りをつけた女性が現れたのである。

そして、その背後には仮面をつけた集団が待機していた。

グロリアは怒りのあまりなりふり構わず女性に斬り掛かる。

仮面をつけた一人がそれを阻止するように剣を操り攻撃を防ぐ。

「貴様らだな…！ミランダを…そしてハル様にマリアを感染させたのは…！」

「ははは…その通りじゃ。話はそれだけか…？」

仮面の男はグロリアを押し返し、すかさず一撃を与える。早い…！！

「余談が過ぎたようだ。ここで消えてもらおう。我々エデンの障壁よ。」

とどめを刺そうと試みた時、仮面が真っ二つに割れる。それはスタークの攻撃によるものだった。

「やっぱりてめえだったか…キース…！！！」

兄は弟を冷徹なる眼差しで見下していた。

DEADLY CONFUSION

戦場はもはやエデンによる戦禍と化していた。スタークとキースはしばらく対峙すると瞬時に姿を消して場所を移す。ここで戦うと周りを巻き込みかねないからだろう。

この場所には、モーフア率いるエデンの軍勢、感染したことによってミランダとハルは意識を失い同志らがエデンの兵士と戦闘を繰り返している。

リサは負傷しながらもマリオと共に力を振り絞りハルとの戦闘との傷ついた仲間の治療に専念していた。

「リサ：ユーも大分ダメージを受けているのだろう…。無茶をするではない。」

「いえ：魔人化出来ない程ダメージを受けている今…これくらいのことしか出来ませんわ。」

それより：アレン君と言ったかしら。早く彼女を助けに行ってはどうかしら？今、彼女を救えるのはあなただけですわ。」

そして、アレンは十字架のピアンカのもとへと駆け付け、見上げる。彼女の名前を叫ぶように呼びかけるが目覚めることはない。

すると突然仮面を被った長身の男が現れた。すかさず聖煌剣を抜き体勢を整える。

「へえ…反応出来たんだ。俺っち君のコト知ってるぜ…？俺っち達を倒すためにわざわざこっちの世界に来たんだろ？」

こいつがエデンの兵士である以上、ただ者ではないことはわかる…。

ならば…大技の一撃で決めるしかない…！！

聖煌剣の先端をかざし、全力でシャイリアス・レイを放つ。爆風が吹き荒れる中で男は……

「なっ……」

「おいおい…人が話してるじゃん…マナーがなってないね。」

男はシャイリアス・レイをいとも簡単に止めたのである。しかも、片手だけである。

しかし、仮面だけは割れてしまった。男は小麦色の肌をしてパーマがかかった容姿をしていた。

「あーあ、割れちゃったよ。これ高いらしいぜ？まあいいや。自己紹介をしよう。」

俺っちはアラン・ユリアーノ…エデンNo.5だ。

平和軍のやつらはみんなに取られちゃったから…君と戦うことにはたんだよ。失望させないでくれよ…?」

DEADLY CONFUSION ?

アランは柔軟にさせるようにゆっくりと体を動かし、徐に大きな鎌を取り出す。おそらく魔力と思われる物が黒い煙へと変形を遂げている。なんて邪悪なんだ…！！

そしてそれを片手にした彼の形相が変わる。まるで血肉に飢えた獣のように…！！

「いくぜ…気を抜かないでくれよ。」

凄まじい勢いで迫るアランに対して思わず反射的に剣を前に出す。

迅速かつ強靱な一撃によって聖煌剣にひびが入ってしまふ。

まさか…僕はこいつとまともに戦うことすら出来ないのか…！！

ファーストクラスのやつは皆ここまで強いのだろうか。すかさず蹴りなどの打撃攻撃を繰り返される。

肋骨が数本折れてもおかしくはない力である。

なす術もなく血を吐き出して地に倒れ込む。

「わるいね…すぐ楽にしてやるよ。」

大鎌を振りかざした彼の背後を灼熱の炎が襲い掛かる。瞬時に回避したがその次の瞬間に炎の中から現れたのは炎をまとったクローをはめたドルコンだった。

「くっ…!!」

「ユーの相手はミーなの…さ。そら、まだまだいくぞ!!」

クローによって一撃を与えたが、再びしかけた攻撃は難無く回避されてしまった。

「ほう…ユーの戦闘力はたいしたものだな。まさか一撃目の滅業焔を避けられるとは思っていなかったよ。」

「そりゃどうも…。てかあんた魔人旅団の面子かい？」

「イエス、いかにも。」

「……ラッキーじゃん。いつぺんに魔人まで殺れるなんてさー!!」

DEADLY CONFUSION ?

大鎌を振り回し、さらに地を蹴り上げて頭上からドルコンを襲撃する。

鎌は確実に刺さる感覚を得た。しかし、それは炎の分身であった。周囲は炎に囲まれてアランは逃げ場を失う。そして、不意に背後から首を捕まれた。

「大人を舐めるな、ベイビー！」

魔人から繰り出される強力な一撃によってアランは吹き飛ばされる。

ドルコンは体力を極限にまで消耗しているにも関わらずファーストクラスを相手に攻めている。

イテテと言いつつ立ち上がると、彼は高笑いをしだす。

「アツハツハツ！！面白いじゃんか！

なら…これならどうだい！？」

すると大鎌を勢いつけて斜め上へと投げる。その先には…十字架に…。

ピアンカ…！！ダメだ…このままじゃ…

いや…守ると誓ったじゃないか。いつまで僕は怯えているんだ…？
目の前の現実…。

目の前が絶望ならば、それを希望に変えてしまえばいい。前へ進め。
自身の剣で…切り開け…！！

ひびの入った聖煌剣の柄を掴み、大鎌へと先端を向ける。

すると、周囲の動きがスローモーションになる。まるで武士の刀が競り合う時に互いに動きが止まって見えるかのように……アレンの視界にはそう映っていた。

ただ唯一動き見せていたのは聖煌剣だった。剣が激しく輝き、それはアレンの体ごと包み込んだ。

目を開けると、直ぐに異変に気付いた。自身が汚れない白いロブに包まれていて更には聖煌剣の刀身が長くなっていた。

すると大鎌は見えない壁にぶつかったかのように落下していく。突然の光景を目の当たりにしたアレンはすぐに言葉を発せなかった。

「なんだい……？それ……」

「力を抜かないでね……？加減が出来ない……！！」

刹那の間にアランから鮮血が吹き出る。深い傷である。しかもそれはシャイリアス・レイではなく単なる魔力を帯びた剣圧によって傷つけた。

「……アツハツハツ！！面白いじゃないか！！いいね！！」

「そんじゃあ……俺っちももう少し本気出そうかなあ……？」

大鎌を振りかざし、周囲の空気が一変する。なんとも言い尽くせない圧力が漂う。

しかし、仮面を身につけた同志が駆け付けて振りかざした腕を掴み

を阻止した。体格からしてどうやら女性のようである。

「モーフア様によって帰還命令が下された。戦いは終了だ。」

「…仕事は済んだのかい？なら、もういいや。」

アレン君…だっけ？なかなか面白いね。また遊んであげるよ…アッ
ハッハッ…！」

「ま…待て…！！」

軍勢のもとへと戻ろうとした二人を引き止めようと試みた時、仮面の女性が魔力のバリケードを張り進撃を防御する。

「勘違いするな。私が介入しなければ、死んでいたのは貴様達だ。運の強さに感謝するがいい…！」

そう言い残し二人は戦いから退いたのであった。

アレンは一時的に強力な力を入れたが、まだまだファーストクラスと戦うには未熟なのである。

DEADLY CONFUSION ?

一方、平和軍の兵士たちはエデンの軍勢との死闘を繰り広げていた。鮮血が飛び散り、死体が次々と続出していく。

「くそ……いつらしぶといぜ……!!」

「シルヴァ殿！退いてくだされ!!」

そういつて手を前方へかざしたのはランド・テリア。彼は平和軍の中でも属性攻撃に長けているのである。

魔力を手に充てて強力な雷を打ち放つ。おそらくエデンの中でも番号が30以下の下級兵達は一網打尽した。

「どつちら……敵もそろそろ限界のようだな。」

「…ッ！…ランド！！避けるおおおー…！！」

遅い。そう一言言い放ちランドの隙を突いて体を脇差しのような小刀で一瞬の内に切り刻んだ。

「ぐっ…！！」

「終わり。」

とどめを刺そうと試みた時、シルヴァによる水の攻撃によってランドを救出した。

しかし、男はその一撃を回避した。まるで姿を消したかのように迅速である。そして豪なる水を繰り出した瞬間にシルヴァさえもその刃の餌食となってしまう。

「お前ら、弱い。オレ、強い。」

まだ息の根が途絶えていなかったが、彼らの目的は平和軍を殲滅することではない。真の目的は、「誓い」を立てることであった。

それを聞いた時、意識が朦朧としていたハルを含めその場にいた平和軍の兵士達が形相を変える。

時が満ちたのである。

今から数千年前、この世界はイノセンスという精霊によって創造され、そしてイノセンスは眠りにつき、世界の秩序を傍観していたのである。

それ以降、イノセンスは百年に一度眠りから目覚めさせた者の願いを叶えてくれるという伝説が残されている。

そしてこの平和軍の本基地こそイノセンスの眠る場所なのである。

はるか昔から平和軍の本来の使命は、イノセンスを管理することだった…

そして、今年が眠りから覚めるの時だったのだ…

「エデンの時代が到来するのじゃ…わらわが世界を変えてみせようぞ…アーツハツハツ!!!」

そしてモーファは仮面の軍勢を率いてイノセンスが眠る部屋へと向かう。扉を開けようと試みた時、今まで感じたことのない程強大な魔力を感じる。それは恐怖とともに安らぎさえ感じた。

何一つ存在しない部屋に、「それ」は存在した。

「それ」はモーファに語りかける。言語として機能していない音を発していたが、不思議と理解出来る…。

「さあ…わらわと同化するのじゃ…!! わらわの力となり、お前が創造した世界を作り直すのじゃ!!」

その声に反応するようにイノセンスはモーファの肉体へ憑依する。そして彼女が部屋から出てきた時、今までの老婆のような容姿とは異なりまるで貴婦人のようだった。

「ふう…さあ、もうここは用済みじゃ。帰還するとしよう。」

「………待て…!!」

辛うじて動き出したのはグロリアだった。彼の体も限界に達していたが、魔力を自身に充てることで動いていた。

しかしながら、狂気の刃によって彼の奮闘も虚しく終わった。

ランド、シルヴァそしてグロリアさえ倒した男は刃を納めるとモーファの下へと戻る。

わらわは絶対な存在となった…。抗えるものならするが良い。

高笑いを揚げながらモーファやエデンの軍勢は去っていった。

壊滅状態に陥った平和軍、絶対的な力を得たエデン…世界はかつてない危機に瀕している…。

DEADLY CONFUSION ?

基地中心部において激闘が繰り広げられていた時、隣接していた連絡橋ではスターク、キースが対峙していた。

以前人間界において遭遇した時は戦闘することはなかった。それに、彼ははたしてスタークを対等な相手として見做していたのかすら疑問である。

「へっ…ようやく二人きりになれたな。」

「貴様は何故死に急ぐのか…俺には理解出来ない。まさか…俺を倒すつもりではないだろう？」

「なあに、単なる兄弟喧嘩さ。」

血肉を曝すバイオレンスなやつだけどな…!!」

スタークは白銀の剣を取り出し、強大な魔力を解放する。彼を相手にする以上、力を抜くような悠長な行動は出来ない。

「人間の世界では命拾いしたな。だが…貴様は己の命をぞんざいに扱う傾向があるようだ。」

キースは剣を抜き、尖端をスタークに向ける。その時彼は底無しの恐怖を覚える。思考が一瞬止まり、次の行動に移ることが出来ない。

そして、目の前に存在していたはずの兄の姿が消えて、背後にとてつもない悪寒が走る。

迅速に反応したが、背中に剣で斬られた傷が残る。流れていく鮮血、そして再び背中に殺気を感じた。

しかし、それに応じることなく剣を前方へと構える。すると刹那の間に互いに剣で競り合っていた。

「今のフェイクに気付いたか…」

「フェイクだと…？笑わせんな。」

スタークの魔力が跳ね上がり、さすがのキースですら危機感を覚える。

彼は瞬間的に後ずさったが、強力な手によって肩を掴まれる。それは魔人と化したスタークであった。

白銀の剣は紅く染まり、キースは距離を置いて掌を前方へとかざす。すると強大な衝撃波が放たれる。

「くそっ…!!」

「魔人とはいえ…俺に並ぶことはない、永劫にな。消え失せる。」

邪悪な魔力が剣に纏わり付き、体勢を崩したスタークに致命的な一撃を与えた。

意識を失い魔人から元の姿へと戻っていく。完全なる敗北と言っても過言ではない。

雲行きが怪しくなり、突然雨が降り注ぐ。彼の血はそれによって流

れていく。

「終わりだ。」

スタークの剣を掴み、それを腹部へと突き刺しとどめを刺す。

徐々に体が動かなくなっていく、そしてキースは何事もなかったかのように去っていった。

これが、実力の差である。戦いに飢えたスタークでさえ実兄のキースの前では赤子の如く扱われてしまう。

このあとアレンらが駆け付け、リサやマリオの尽力によって応急処置は施された。

十字架に磔けられていたビアンカも漸く解放されて意識を喪失したままアルフレッドに抱えられ安静にさせた。

しかし、この場にいた誰もが同じことを考えていた。

今の實力では、エデンの軍勢には太刀打ち出来ないと…。

DEADLY CONFUSION ?

一夜に渡る戦争は終わり、どうにか全員が一命を取り留めた。リサやマリオの尽力が無ければ被害は更に深刻化していただろう。

夜が更け、マリオは自分自身で反逆を犯したにも関わらずシルヴァやランドの治療に携わっていた。

誰も言葉を発することなく小部屋には沈黙が漂っている。そしてそれを破った意外にもシルヴァだった。

「…ハル様とミランダは大丈夫なのか？感染、してるんだろ？」

彼女らしくない意気阻喪とした声だった。実際、彼はリサと協力して何度もマリアの除去を試行したが、癒える様子は全くなかった。

今現在、ハルとミランダは意識を失ったまま別の部屋で隔離されている。

「……お前、これからどうするんだ？」

それはマリオにとって様々な解釈が出来る。平和軍を脱退するか、それとも反逆の罪を償うか。

しかし、シルヴァは最後に言った。

たしかにてめえの反逆は追放する程の重罪だ。だが、事態は変わってしまった。どうだ？俺様達と世界を救いたくないか？

マリオはただただ涙し、自分の居場所を確かに見つけた。自分は彼らと運命を共にする、そう決心したのである。

そしてその後スターク、ビアンカは意識を取り戻して、平和軍会議室において全員で今後の動向について思慮した。

「我々はハル様とミランダの護衛と世界の秩序を保つという本来の目的に徹する必要がある。」

貴様達はどうするのだ？行く先はあるのか？」

グロリアの的を射ている発言に何も返すことが出来ずにいたが、そこでドルコンはある提案を挙げた。

「スターク、ミーについてこないか？無論、ユー達も…な。」

ユーは感じただろうか？エデンのキースは化け物だと…な。アレは魔人旅団でも確実にトップクラスに君臨するだろう。

どうだ？ここは共に鍛練しようではないか。」

スタークは渋々と承諾したが、想いはアレン達と同じだった。

更なる高みを目指さなければ勝てないということである。

その時、徐にシルヴァが立ち上がりアレンらに頭を下げる。突然の出来事に驚きを隠せない。あんなにプライドが高い彼女が…

「てめえらに恥を承知で頼み事がある。マリオを連れて行って欲しい。」

「え…しかしシルヴァ様、おいらには平和軍兵士としての義務が…」

「救命リカバリー・チームとして、俺様達と同じステージに立てる程強くなってこい。そして必ずここに戻ってこい。」

彼女が彼に託した想いは半端なものではない。これは同志としての誠意が反映しているのである。

そして、アレンは周囲の様子を疑い、マリオに手を差し延べる。

「一緒に行こう。必ず強くなって…エデンに打ち勝とう。」

いつの間にか夜が明けていた。昨夜は急な雨天となってしまうたが、今は雲から光が差ししていた。まるで僕らの未来に兆しが見えたかのように、そして僕らも歩き出そうとしていた。

新たな状況で、新たなスタートを切ろうとしていた。

DEADLY CONFUSION ? (後書き)

ここまですが第2章となります。平和軍での戦闘、そして新たな激動を描いてきました。

次章では魔人旅団等を登場させ更なる展開をお見せしていきます。

あ、余談ですが総アクセス数が：第1章までは1000件でしたが、今回は10000件にまで伸びました(^^)
これも皆様のおかげです

これからも地道に更新し続けていくので、応援よろしくお願ひしますm(____)m

EDEN（前書き）

平和軍基地における激動が繰り広げられて数日が経過した。

平和軍が壊滅的状况に陥っていることが世界中の民に周知され、この世界は今だかつてない危機に瀕していた。

その頃アレン一行は新たな仲間としてマリオを引き連れ、ドルコンから魔人旅団のアジトへと向かっていた。

一方エデンでは更に動きだそうとしていたのだった。

E D E N

天気は生憎の雨であり、宴を開くには相応しくはない。もはや三大勢力である平和軍は衰退期に突入していると言っても良いだろう。

今となつては恐れる障壁など存在しないが、強いて挙げるとすれば魔人旅団である。

リーダーとされるゾラを筆頭として数多くの魔人が集う組織であるだけあつて多少の対策を練っておく必要があるだろう。

エデンの一角には会議室の役割を果たす小部屋がある。その中にぞろぞろと仮面を被った者が現れる。

「……………」

無言のまま入室したのはキース・オーウエン。無論ファーストクラスではNo.1である。彼は部屋に入った瞬間に仮面を外した。それは彼だけではなかった。

「ぷはぁーッ！ー！やつぱ仮面は息苦しいよなあ！魔力も制限されちまうしなあ！ー！」

金色の髪を後ろに束ね、戦いに飢えたような目つきをした男性の名前はボルカニック・レスカレード。エデンNo.2。

「ふん…貴様は少し言葉を改める。」

仮面を外すと蒼い瞳を持った端正とした顔が現れた。彼女はルル・オーデンヴァック。先日平和軍の本基地で勃発したアレン、ドルコンとアランの戦闘を阻止した人物である。

「ふっ…今宵はどのような宴が披露されるのだろうか…。我々は勝利の杯を手にし歓喜…いや狂喜の余韻に浸る。嗚呼、恍惚！ー！」

「ははっ。伯爵やけにご機嫌じゃないか。どうかしたのかい？」

「なに…我輩は気まぐれなものでね。」

漆黒のマントをまとった銀髪の男性の名はエリオット・アンリ。そして後者はアラン・ユリアーノ、それぞれNo.4、No.5である。

「着いた。」

彼は平和軍基地にてグロリア達を瀕死に追いやった刀使いである。名前はゼロ・マックイーン。数はNo.6。

「ふう…皆さんお揃いで何よりですわ。」

「まだ新入りが来るらしいね。」

「知つとるで。バギーの空席を埋めるとか言つてたかな？」

薄緑色の髪をした訛りが強い口調の男はセル・ムルジュ。以前スタークと交戦して敗れたNo.7である。

彼と会話している白衣を身にまとった小柄な少年はハリー・リグニ

ツツ。ファーストクラス最年少にしてNo.8である。

しかし、No.9であるエミリオ・サクリアイスは欠席していた。一人を除いてファーストクラスの人物が全員集結した。

その場にいる全員が円卓テーブルに用意されていた椅子に着席した時、数人の兵士達が馬車のような乗り物を運搬する。そしてそれは奥にあるごうかな椅子の前に止まり、そこから総帥モーファが現れた。

「揃ったかの…。では、円卓会議を始めようではないか。」

会議室は一瞬のうちにいくつもの魔力で充満していた。その場にいた兵士達はあまりに強大な魔力に肉体が耐え切れず息絶えてゆく。

そして、また一人この部屋に近づくものがいた。

E D E N ?

会議室にいる全員がひしひしとその近づいている魔力を感じていた。そして、それは扉を目前にして立ち止まる。

扉が開き、N O ・ 1 0 の席を埋める人物が現れた。見かけはまるで少年のようである。少年は仮面を被り黒色の武装を身にまとっていた。

テーブルに肘を置いて様子を伺っていたボルカニックはあることに気づいた。

(こいつ…まさか…)

「実はの、こやつは随分前からエデンに存在していたのじゃ。但し、何年間も楽園にて鍛練を積んでいたがな。」

楽園…その名を聞いた時にファーストクラスの者が皆耳を疑った。

楽園とは11番以下の兵士がファーストクラスへと昇格する時に修業を積む空間である。そこでは死に値いする程過酷な試練が待ち受けている。

「へえ、楽園で何年間も…ねえ。」

アランは楽しみに少年を見つめていた。しかし、それは彼だけではない。通常彼らでさえ楽園には一年程度しかいられないのである。

「では…小手調べといこうかえ。」

すると閑散とした会議室の中に三つ首の巨犬が突撃してきた。これは研究に研究を重ね誕生した悪魔である。

それは咆哮を揚げて少年を威嚇する。すると彼はゆっくり剣を取りだす。

悪魔が突撃してきた時その凶刃は首を一つ切断して、背中へと瞬間的に移動する。

あまりの速度に悪魔は硬直したまま微動だにしない。そして少年は

剣を剛健な背中を容赦なく刺した。少年は血肉が飛び散りつつも何一つ様子を変えなかった。

しかし、驚くべきことは地獄と同等の樂園を生き抜いただけではない。なぜなら彼は…

その後状況は沈静し、会議は進行していった。今夜の会議はとある場所に住む四種族達に関する内容である。

その種族達はそれぞれイノセンスの潜在能力を司る魔石を所有している。それを奪取することが現在のエデンが優先する目的なのである。

E D E N ?

この異世界にはイノセンスの力を司る四つの魔石があり、それらはそれぞれ四種の部族に守られていた。

そして、エデンは最初にここからはるか北東のグランドバレーへの遠征を決断した。そこにはエリオット・アンリ、セル・ムルジュらファーストクラスと複数の下級兵を引率することにした。

「ほな…エリオットはここにおつたらええ。どうせ、夜にならないとあかんしなあ。」

セルは下級兵を引き連れて別室へと移動した。そこにはエデンに設けられている特殊研究所によって開発された物質転送装置が設備されている。

それによってピンポイントではないものの目的地付近にまで瞬間的に移動可能となる。

さて、祭の始まりや…エデンの更なる台頭を祝う祭やで。

同時刻、北東に位置するグラントバレーの頂上に存在するにネリス
ト城周辺にて。

空に浮かぶ満月が城下街を照らしていた頃、一人の庶民が追い剥ぎ
によってなけなしの金銭を奪われていた。

日中は商人達によって繁盛しているが夜はこの有様である。

「へへへ…これはいただいていくぜ。」

必死にしがみつき抵抗していた庶民の腕を蹴り、逃走しようとした
時だった。

どこからともなく軽快な汽笛の音色が鳴り響く。それを聞いた追い
剥ぎは焦燥感に駆られる。

そして突然現れたのは煙草を加えた浴衣姿の女性だった。彼はけだ
るい雰囲気醸し出しながら追い剥ぎに接近していく。

「あ、あんたは…！」

女性は徐にダイスを取り出して転がす。その目は3を示していた。

「ちっ…あんだツイてるね。温いやり方で済ませてあげるよ。」

すると女性はダイスを掴むと、握った手が輝き出した。女性の手には扇が現れ、それを広げた途端魔力が上昇し始める。

「観念しな!!絶扇波!!」

扇で前方を扇いだ途端に凄まじい疾風が追い剥ぎを吹き飛ばす。そしてその隙を突くように女性は手の平でダイスを転がし2の目を出した。

女性が頭上へと跳んだ瞬間に新たに現れたのは巨大な独楽こまだった。重量のある独楽は追い剥ぎを容赦なく潰した。

「悪は成敗するまでよ!」

追い剥ぎが気絶した後にもた新たに二人が到着した。二人は女性の味方である。

彼らはグランドバレーに拠点を置いて活動しているハンターである。ハンターと言っても悪事を働いた賊を捕獲することを生業としている。この地域では彼らのようなハンターは数多く存在する。

「まったく…お前はいつも勝手に急ぐんだから。ついていくの大変なんだからな！」

彼はリーダーのエース・リッチモンド。銃使いである。

「まあまあ、結果オーライですよお。」

常に笑顔でおっとりとした口調の青年はシオン・レジスタ。三人の中で唯一属性を持つハンターである。

「なんだい…せつかく成敗したのにさ。」

気性の荒い彼女はジュリア・ミレオン。賭博をこよなく愛している。

そして彼らは追い剥ぎを北東平和軍へと引き渡して報酬を受け取った。

平和軍は世界各地に設けられている。先日の激戦によって壊滅状態に陥っているものの、各地の兵士達は通常通り警備を行っているのだ。

雄大なる景色を誇るグランドバレー。この時まだ誰もが後の惨劇を予測していなかった…。

NIGHTMARRISH INVASION

夜はさらに更け、小動物の死骸を求めている飢えた獣が徘徊する時刻となっていた。

かつてこの獣達はネリスト城の警備として活躍していたが、城に帯びている魔力に長期間当てられて狂犬と化してしまった。

この地域では動物の殺生、束縛、危害を加える行為は罪となるため、こうして野放しとされているのである。

この法律を撤廃する意見が多く寄せられているが一向に実行される様子が見られない。

「はあ、いい加減こいつらどうにかならないのかよ。見てらんないぜ。」

「何かこう…国の情勢が一辺する程の被害が出ない限り政府は動かないだろうねえ。」

三人はただひたすら夜の郊外を散策していた。彼らには帰る居場所はない。こうして悠々とした旅を続けているのである。

シオンは先程から天空を見上げていた。今宵は星など皆無である。しかし、彼はずっと見上げていた。

どこか、異変を感じた。

「さあて…用意出来とるか？」

城下街から約2km離れた広大な草原に突如登場したのはセルを筆頭としたエデンであった。

百を超える悪魔とN.O.11〜20が数人という強力な軍勢である。

「ほな、頼みますわ。」

セルは下級兵を従わせてネリスト城へと向かっていく。

緊迫感が高まる中住人達はただならぬ予感を察して続々と民家から出てうるたえる。

ジュリア達が城下街へと向かおうとした時、背後から凄まじい魔力を感じた。

「あんた達…まさか…」

「我々はエデンだ。命令に従って、この地域を支配するために来た。邪魔をするなら容赦はしないぞ!!」

サイドクラスにも満たない番号を持った兵士達が現れ、剣槍などの武器を所持していた。おそらく戦闘は回避出来ない。

「てめえら…喧嘩売った相手が悪かったな。くらいな、仙光!」

エースが掌を前方にかざし、そこから視界を完全に妨害するほど強力な閃光が繰り出された。すると兵士達は一斉に気絶してしまった。

「おかしい…さっきの不気味な魔力はどこへ行ったんだい？」

ジュリアは周囲を見渡したが異変は見られない。だが、相手はあの

エデンだ。油断は出来ない。

突然城下街から爆発音のような衝撃が響く。手遅れだったか…!?

三人は性急にネリスト城下街に駆け付けていった。

悪夢のような小夜はまだまだ終わらない…。

NIGHTMARRISH INVASION ?

三人が雨の中地を踏み締めて城下街に辿り着いた時にはもうエデンの手が及んでいた。

逃げ惑う民を容赦無く襲う黒い怪物。なるほど、あれが例の悪魔というやつか。

エースは先程閃光を放ったグローブ嵌めて悪魔達を次々と撃退していく。彼らには悪魔と戦える程の実力があるのは確かである。

ダイスの目に応じて多彩なる攻撃を繰り出すジュリア、グローブによる打撃攻撃によって相手を撃破するエース、そして唯一属性を持つシオン。

この戦場において彼らに競り合える實力を持った者はいない。まさに無双である。

しかし、状況は一変することとなる。地面から突如うねるように木の根が現れた。それは生き物のようにつごめきエースの脚を捕らえる。

「な、なんだこいつは!？」

「みいつけた…あかんなあ…勝手に悪魔達を倒したら。」

先程ジュリアが感じ取った魔力はセルのものであった。不敵な笑みの裏にはとてつもなく邪悪な何かが渦巻いていた。

一瞬でも気を抜いたら容赦無く殺されるにちがいない…!!

「おい、あんた達は何でここを奇襲する…!!」

「モーフア様の使命や…私怨はあらへん、せやけど君らもこの子達の餌食になつてもらおうで…!!」

くる…!!

NIGHTMARRISH INVASION ?

「なんや…もう終いか？つまらんなあ。」

開始早々からセルはほぼ全力で彼らを潰しにかかった。シオンは鋭利なる枝によつて身体を貫かれて重傷を負つたまま倒れてしまった。エースとジュリアはダメージを負いつつもまだ戦闘可能だった。しかし、実力の差は歴然たるものである。

エースがグローブからまばゆい閃光を放つたため、なんとか一時的に避難出来た。しかし発見されるのも時間の問題だ。

「くそっ…でたらめに強いねえ…」

「ジュリア、下手したら俺達はここで死ぬにちがいない。

だが、奴にでかい一撃与えることは可能だ。」

「……どつちやって……?」

数分後、彼らは決心しセルの目の前へと立ち塞がる。これは一種の賭けである。しかも生死を賭けたギャンブル。

「いくよ!」

ジュリアが振ったダイスは6の目を出した。これは偶然だが、彼女は大仕事を働いたのである。

彼女の手足には複数の白い糸があった。それはまるで傀儡くわいを操る糸のようである。

ジュリアの糸は徐にセルの方へと伸び、手足を括った。すると彼女が右足を前に出すとセルは同様に動き出す。まさにこれは相手に自分と同じ動きを強制させる能力。

「さて…終いにしようじゃないか!！」

勢い良く旋風を巻き起こす扇を取り出し、魔力を精一杯充てる。

「くっ…!！」

「滑稽だねえ…そんな手を動かしたってあなたの手に持っているのはただの棒きれじゃないか。」

「観念しな!絶扇破!！」

全力の魔力によって巻き起こされた突風は身動きが取れないセルへと向かっていく。そして衝突音が周囲に轟いた。

NIGHTMARRISH INVASION ?

渾身の力を込めた突風はセルに襲い掛かった。さすがのファーストクラスといえどある程度の害は受けたはずである。

ジュリアは肩膝をぬかるんだ地面についた。ダイスによる能力は連発すればする程肉体への反動が大きいのである。

「なっ…」

「この子らは意思を持ってるんや…。僕の危機に反応して防御してくれただけのことや。」

さて…生死の賭博は失敗やな。死んでもらうで…!!」

その刹那、地面から冷気が漂う。雨に囚るものではない。これは真冬の中の大地のように…氷を張っているのである。

それは無論自然なるものではない。唯一属性を所有することが可能なシオンが能力を発揮したのである。

「氷を張ってしまえばその能力は使えない……」

「そついうこつた!!」

この時、エースはセルに対して大打撃を与えようと試みていた。地面に氷が張ってある隙に狙えば確実に命中するからである。

しかし、セルは未だに余裕のあるそぶりを見せていた。薄氷を一枚張ったところで樹木を封じられるのは一瞬の間だからである。

一瞬、その一瞬のチャンスあればエースにとって十分なのだ。目にも映らない速度で突進し、魔力を存分に込めたグローブによる一撃はセルを吹き飛ばし、大ダメージを負わせたのだ。

「賭けは成功だ……!!」

三人は負傷しながらもエデンの脅威を凌駕した。こうして侵略は終

わるはずだった。

空が…紅く………

深紅の空を見上げた瞬間、突如ジュリアが気絶した。二人もただでは済むはずもなく、過度の重力がかかっているかのように体が重くなっていく。

「……………なんや…やっと到着したんやな。エリオット……」

天地に怪奇的な笑い声が響き渡る。それと同時にセルは足を引きずりながら歩き出す。

シオンが剣を構えた時、空から黒い煙が降りて人の形を形成していく。そこに現れたのはエデンNO・4 エリオット・アンリだった。

DARING CHALLENGERS (前書き)

平和軍基地を去ったあと、アレン一行はドルコンらの案内によって
魔人旅団のアジトへと向かうことにした。

リサの能力によって全員が別の空間へと転送された。そこは今まで
いた場所とは一風変わった森丘だった。

しかし、アレンらは感じていた。どこからかひしひしと伝わる魔力
に…

DARING CHALLENGERS

辿り着いた場所は这个世界の魔境のようだった。近くには滝が流れていた。清潔な水が絶えることなく流れてゆく。

丘を登り始めて小一時間程経過した時、閑散とした洞穴を発見した。

「な、なんだかおっかない場所つすね…!!」

マリオは震えながらも奥へと突き進んでいく皆を追いかけた。ドルコンを先頭に深部を目指すと、辺りに設置してある松明が逐次点いていく。

間違いない。この先にいる。魔人旅団が…!!

長い一本道を抜けた後、そこには不思議な光景が繰り広げられていた。

軽快なミュージック、白黒のタイル、棚に敷き詰められている酒、そこはまるで現世のバーのようである。

「なんだこころは……」

「へい！ただいま帰ってきたの……さー！」

ドルコンらを迎えたのは5人の魔人である。

「へい、ラスト。彼らが噂のやつら……さ。」

「……ほう、どうも俺のこの眼にはそうは見えないがな。」

「まあまあ、そう言うな。とりあえず、ユーたちの紹介をしようではないか。」

魔人旅団は八人構成の小規模な組織である。第八、七、四魔人はそれぞれれりサ・アミューサ、バンテラ・クリングス、ドルコン・モンテリオ。

そして、第六魔人ヤマヌシ。日本刀に似た剣を腰に据えた侍のよう

な魔人である。

第五魔人はアギラ・マホラ。アジアンじみた衣服を身に纏った男である。その瞳は焦点が合っていない。どうやら盲目のようである。

第三魔人ティア・ワルディーン。リサと同じく女性であるが、その実力は相当高い。

第二魔人スルガ・マルコヴィッチ。短銃と短剣を兼ね備えた戦法で強敵を打倒し、マニアと言われる程の戦闘好きである。

そして、中央に立つ黒髪で色白の男性こそが魔人旅団のトップ。ラストである。

その場所にいた誰もがとてつもなく強大な威圧感を放っていた。さすが第三勢力と恐れられていた存在である。

DARING CHALLENGERS ?

軽快なジャズがぴたりと止んだ時、第二魔人のスルガはグラスを手に取りブランデーを飲み干す。アルコール臭を放ちながら彼は前に出る。

「おいドルゴン。こいつらのどこがすごいんだ？あん？」

彼の台詞に過剰な反応を示したスタークはスルガの胸倉を掴み睨みつける。できれば何ごともなく事を進めたかった…

「おいおい、言ってくるじゃねえか。」

「あん…？強そうに見えねえんだよ。」

「やるか…？」

目を逸らすことのない二人が同時に剣を抜こうとした時、スルガは体に何かとてつもない圧力がかったように倒れた。

それはラストによる何らかの能力だった。冷静さを保ったまま彼は歩み寄る。

「くっそ…!!」

「無駄な戦闘は控える。それで…？俺らに何の用だ？」

「彼らはミー達と同じく打倒エデンという目標を掲げている。そこで、同盟を結んで戦力に加えたいの…さ。」

「…なるほど、奴は人間か。名前は？」

「アレン…。アレン・クロニクル。」

「良いだろう。では、テストをしようじゃないか。」

そう言うとラストは壁に設置してあるスイッチを押した。すると「

の酒場にセツティングされていたショーステージの地形が変化し、透明のキューブになった。

それに触れながら話すラストの方へとスルガ、ヤマヌシ、ティア、アギラは近寄ってゆく。

「こいつらに勝ってみる。ただし、こちらは魔人化は使わない。オープンな条件で戦いを行う。」

これは小手調べにしては相当ハードである。ドルコンらに匹敵する実力者達を相手にするからだ。こちらで戦闘を行うのは治療担当のマリオを除いて必然的に四人…。

「おもしれえ、やってやろうじゃねえか。」

「では、始めようか。最初は誰が出る？」

互いに相手の戦術がわからない以上、実力面以外では対等である。そして最初に名乗り出たのはアルフレッドだった。

「気をつけて！」

「ああ、ちょっと頑張ってくるよ。」

それに対して旅団側からは第六魔人ヤマヌシが出る。草履で床を踏み締める音が響く。やはりその風貌は侍そのものだ。

「お手柔らかに。」

「拙者はお主が如何なる者か知らぬが…しかと試させていただきます。」

互いにキューブへと近づく。すると二人はその内部へと密閉されてしまった。これは魔力によって作られた戦場であり、内部に入った者の精神のみが機能する。つまり、この間肉体は抜け殻のようになる。

DARING CHALLENGERS ?

今この空間において存在するのはアルフレッド、ヤマヌシの二人だけである。つまり、介入する者はいない。これこそ真の一騎打ちである。

アルフレッドは愛槍ルドゼラを手にして相手の出方を伺っている。解放しないとはいえ、相手は魔人である以上どんな手段を繰り出すか予測がつかない。

「来ぬか…」

「いやー、やっぱりとりあえず洞察しないとねえ…」

危ないからさ

彼は風のごとく背後に回り込み、一気にその体を貫いた。しかし、彼はすぐに感づいた。

手応えが全くないと…

「どうした？気を緩めるな。」

刀を抜くモーションが見えないまま強靱なる刃によって傷つけられた。

どういうことだ…？たしかに背後を取り、たしかにルドゼラで攻撃をした。しかし…手応えがなかった…

「見えぬか？拙者の刃が。」

「おかしいなあ…」

「無理もない。絡繰りを見破らない限り、お主に勝機はない。」

アルフレッドはヤマヌシが刃を抜く瞬間に注目した。そして、彼は気づいた。その刀には刃が付いていないことに…

それはまた再び肉を裂いた。それは間違いなく存在する。しかし、まるで見えない刃である。

「面白い刀だね、それ」

「案ずるな。直に終わらせてやるぞ。」

ヤマヌシは駆け出して刀の柄に手を添える。また見えない力が容赦無く襲い掛かる。

しかしながらアルフレッドはルドゼラを前方に振り出した。互いの武器が軋んだ時、わずかに刃の姿が現れた。

一瞬の内に再び消えたが、後ずさった瞬間地面に触れた途端姿を現した。

「なるほどね…」

アルフレッドはにやりと笑う。どうやら、見えたようである。

「そいつは皮膚以外の物質に触れた途端姿を現す…そして僕の予想だとそれは姿を現す度に何らかの劣化が生じる…なんてトリックかな？」

「ふん…確かに、拙者のこの冥刀はその姿を消し、現れる。だが、真の能力はそれだけではない。そして、それはもう起きている。」

不審に思った彼はルドゼラを握り直して突風を起こすことを試みた。しかし、それはあまりにも弱い。思うように魔力を込められずにいたのである。

「気づいたか。この刀の形を見た者に発動する能力…それはお主の力を確実に奪う。」

一度見た者は魔力の半分を封印される。そして二度見た者はまたその半分…観念するが良い。」

つまり、今アルフレッドの魔力は通常の四分の一しか出せない。絶
体絶命の危機に瀕しているのである…!!

DARING CHALLENGERS ?

ヤマヌシの驚異的な能力によってアルフレッドは徐々になす術を封じられてゆく。

しかし、まだ彼は諦めていないようである。完全に術を失ったわけではない。むやみに突撃せずに攻めるしかない。

アルフレッドはルドゼラを使い全力で突いた。すると槍の形状をした疾風の塊が吹き飛んだ。

しかしながら、それはあまりにも弱く、ヤマヌシの刀によって防がれてしまう。再び現れた姿から目を逸らした時、ヤマヌシはその隙を突いて斬りかかった。

「諦めるが良い。拙者の戦法には敵わぬとな…」

「まいったなあ…」

頭をボリボリと掻いてしばらく立っていたが、とうとう行動に移ろうとしていた。ルドゼラに手を添えて何かブツブツと呟いている。

「この子は僕のことを嫌いだね…いつつも起こすと子どものように」

怒るんだ。」

ヤマヌシにはアルフレッドの発言を理解出来なかった。しかし、それはすぐにわかることになるのである。

突然ルドゼラから凄まじい魔力が漂う。それと同時に形状が今までよりも鋭利になり厳つくなっていた。

「馬鹿な…冥刀によって魔力をあれ程減少させたはずだ！」

「あー、これは僕の魔力じゃないんだ。このルドゼラ君自体が持つ魔力…」

この槍はただの武器じゃない。意思を持った悪魔の武器だ。」

再び疾風の塊を繰り出した。それは先程の何倍もの力が込められていた。予想外の展開にヤマヌシはまともにダメージを受ける。

風が止んだ時、ヤマヌシはふらつくながら立ち尽くしていた。勝敗は決まったようである。

「無念…お主の勝利だ。」

目が覚めると、そこは外の世界だった。起き上がるうとした時、アルフレッドは体の痛みを覚える。ルドゼラの能力を使用した反動と戦いの傷が重なったせいである。

「へっ、よくやったじゃねえか。」

スタークが歯を見せて笑いを見せる。勝利を祝福するかのよう。

「なんか気味悪いなあ。」

ジョーク混じりの会話をしていた時に続いて新たな魔人が前に出る。それは盲目のアギラだった。こちら側はアレンが挑むことになった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6034r/>

THE TEAR OF WORLD

2011年12月14日00時46分発行